

シンポジウム

文化遺産の意図的な破壊

—人はなぜ本を焼くのか—



シンポジウム

文化遺産の 意図的な 破壊

Intentional
Destruction of
Cultural
Heritage

人はなぜ
本を焼くのか

2019年
12月1日[日]
13:00 - 17:00
12:30 前場
政策研究大学院大学
想海樓ホール

定員300名 入場無料・事前申込制
主催 | 文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁 後援 | 外務省、国際協力機構、国際交流基金

JCIC-Heritage 文部科学省



JCIC-Heritage

文化遺産国際協力コンソーシアム

シンポジウム

文化遺産の意図的な破壊

—人はなぜ本を焼くのか—

文化遺産国際協力コンソーシアム

例 言

本報告書は、文化庁、文化遺産国際協力コンソーシアムが2019年12月1日に開催したシンポジウム「文化遺産の意図的な破壊—人はなぜ本を焼くのか—」の内容を収録したものである。原稿は発表者から提出された発表原稿あるいは録音音声をもとに書き起こされたものを、報告書の体裁を整えるために編集者が加筆・修正を加えた。各報告で使用した写真のうち、出典の記載のないものはすべて発表者の提供による。

目次

開会挨拶	5
岡田 保良 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長/国土舘大学イラク古代文化研究所 教授)	
趣旨説明	6
山内 和也 (文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長/帝京大学文化財研究所 教授)	
講演 1 秦始皇帝の焚書坑儒の真相	12
鶴間 和幸 (学習院大学文学部 教授)	
講演 2 エジプトにおける文字記録の抹殺と アレクサンドリア大図書館の消失	22
近藤 二郎 (早稲田大学文学部 教授)	
講演 3 ユーゴ内戦時の文化遺産の破壊 —サラエヴォ図書館、コソボの教会堂などを例として—	28
鐸木 道剛 (東北学院大学文学部 教授)	
講演 4 テロと古文書と誇り—マリ北部トンブクトゥにおける事例から—	40
伊東 未来 (西南学院大学国際文化学部 講師)	
パネルディスカッション「破壊の論理と文化遺産保護」	50
ファシリテーター：中村 雄祐 (東京大学大学院人文社会系研究科 教授)	
パネリスト：山内 和也、鶴間 和幸、近藤 二郎、鐸木 道剛、伊東 未来	
閉会挨拶	62
青木 繁夫 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長/東京文化財研究所 名誉研究員)	
資料編	
文化遺産の意図的破壊に関するユネスコ宣言	63
災害リスク削減に向けた図書館関連活動及び紛争・危機・自然災害時の図書館 関連活動に対する IFLA の関与の原則	68

開会挨拶

皆さん、こんにちは。本日は、ようこそお集まりくださいました。文化遺産国際協力コンソーシアム副会長の岡田です。本日は、会長の青柳先生の都合がつかないということで、私が代わって冒頭の挨拶を務めます。関係のかたがたには、立派な会場を用意していただき、ありがとうございました。文化遺産国際協力コンソーシアムが普段扱っている材料としては、文化遺産の保存や修復、遺跡の調査で、そのテーマでもってシンポジウムや研究会などをずっと続けています。本日のシンポジウムのテーマは、タイトルにあるように文化遺跡の破壊や、本を焼くことについてです。

私どもは、このテーマでどのぐらいのかたがたが集まるだろうかと懸念をしていましたが、たくさんの方から応募があって、早々に申し込みの定員となりました。本日は、盛況のうちに開会をすることができ、心より御礼申し上げます。事務局によると、そのようなテーマで、普段は来ないようなかたがたからの申し込みも随分とあったとのこと。もしかするとコンソーシアムそのものがどのような集まりで、どのような組織なのかを少し説明したほうがいいのではないかとこのことで、冒頭の挨拶と致したいと思います。

本コンソーシアムは、2006年に立ち上がった、文化遺産の国際協力をするための法律（「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」）に基づいてつくられた組織と申しますか、事業体です。今のところは文化庁の事業を東京文化財研究所で受託して事業を実施しているだけで、公的な機関ではありません。この十数年、活動を続けています。その目的として、国際的な文化財の支援と協力を掲げています。事業としては、一つ目に研究者のかたがたや、文化財保護行政を担っている人たちと、そこへ資金提供をしている民間の財団のかたがたなど、いろいろな方面で文化遺産の国際協力に参画をしているかたがたのネットワークをつくることです。

二つ目は、海外のどこで日本の協力が有効にはたらく国々があり、どのような状況が存在するのかを調査することです。三つ目は、国内で研究活動をし

ている方や、日本から海外へ出て行って調査活動などを行っている方がいるので、そのかたがたの情報をできるだけ一つの所に集めて、データベース化する作業もしています。それらを本日集まっているかたがたも含めて、どのように情報発信をしていくか。コンソーシアムでは、会員登録を受け付けているので、そのかたがたに対する会員サービスも行っています。

さまざまな形で、文化遺産の国際協力をどのように進めていくかを事業としている組織なのです。今後ともこのようなコンソーシアムへの理解と、できるだけ多くの機会にいろいろな形でのご参加をお願いします。本日は『文化遺産の意図的な破壊—人はなぜ本を焼くのか—』といったちょっと刺激的なタイトルですが、この仕掛けについては提案者の1人である山内先生からお話があります。私は早々に退きますが、本日はいろいろな局面のお話があると期待しています。どうぞお楽しみください。よろしくお祈りします。



岡田 保良（おかだ やすよし）
文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／
国士舘大学イラク古代文化研究所 教授

趣旨説明

山内 和也 (やまうち かずや)

文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長／
帝京大学文化財研究所 教授

ただいまご紹介に与かりました帝京大学文化財研究所の山内和也です。本日は文化遺産国際協力コンソーシアムのシンポジウム「文化遺産の意図的な破壊—人はなぜ本を焼くのか—」においでいただき、ありがとうございます。この企画の提案者を代表しまして、このシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます(図1)。



図1

人は文字を生み出し、はじめは粘土板やパピルス、そして木簡や竹簡、羊皮紙や紙に文字を書き記し、記録や書物を残してきました(図2)。そうした文書や書物を集め、文書庫、そして図書館を作り、自分たち、そして自分たちの祖先の記録を残しました。その一方で、古代から現在にいたるまで、文書や書物を意図的に破壊するという行為を繰り返してきたこともまた、歴史上の事実です。



図2

1953年、『華氏451度』(Fahrenheit 451) という小説が発表されました。レイ・ブラッドベリのSF小説で、「ディストピア」、つまり「ユートピア」の正反対にある「暗黒郷」を描いた代表作とされています。表題の華氏451度、つまり摂氏232.78度は、紙が燃え出す温度を意味しています。1966年にはヌーベルバーグの巨匠フランソワ・トリュフォー監督によって映画化され、2018年にはテレビ映画として再映像化されています(図3)。また、この本は



1984年早稲田大学第一文学部(東洋史専攻)卒業、88年早稲田大学大学院文学研究科(修士課程)修了、92年テヘラーン大学人文学部大学院(修士課程)修了。2003年東京文化財研究所勤務を経て、2016年より現職。専門はイラン、中央アジアの文化史、考古学。アフガニスタン(パーミヤーン)、インド(アジャンター)、タジキスタン、カザフスタン、エジプト、ヨルダン、アルメニアなど、コーカサス及び中央アジア、西アジア地域で広く文化遺産保護の活動を行ってきた。現在では、キルギス共和国のアク・ベシム遺跡で発掘調査を実施している。

日本語にも訳されています。物語の舞台の世界では、すべての情報がラジオやテレビの音声や画像のみとなり、市民に有害な情報をもたらす本と読書が禁じられ、本が焼かれてしまいます。



図3

「ファイアマン」、もともとは「消防士」の意味ですが、訳書では「昇火士」と呼ばれています。この機関が社会の秩序を守るために、本を所有する人を摘発し、本を燃やしてしまうのですが、その「ファイアマン」の1人である主人公がその世界に疑問を抱き、反抗し、仲間とともに残された本を記憶していくというものです。焚書とそれに対抗する人たちが扱った小説としてよく知られていますが、焚書は、こうした小説の世界の話ではなく、現実の世界でも幾度となく起こっています。

ドイツの詩人ハインリッヒ・ハイネは、1821年に執筆した戯曲『アルマンゾル』(Almansor)のなかで、“..dort wo man Bücher verbrennt, verbrennt man auch am Ende Menschen”と言っています。日本語では「本を焼く者は、やがて人間も焼くようになる」と訳されています(図4)。この戯曲はレコンキスタ、つまり「国土回復運動」の時代を扱ったもので、イスラーム教徒がコーランを自ら焼くことが語られます。ちなみに、このアルマンゾルはアラビア語の人名「アル・マンズール」のことです。



図4

これは、1933年に本格的に始まるナチスによる「ビブリオコースト」の112年前のことです。ハイネは、文化と知識の集積である本を焼く者は、最終的には、文化を生み出し、それとともに生き、未来へと伝える人間をも抹殺すると予言したのです。ナチス・ドイツは、ナチズムの思想に合わないと考えられた書物、つまり「非ドイツ的」な書物を焼きました(図5)。それには、カール・マルクスなどの社会主義的な書物や、詩人のハインリッヒ・ハイネ、『飛ぶ教室』を書いたエーリッヒ・ケストナー、戯曲『三文オペラ』の作家として知られるベルトルト・ブレヒト、精神分析学で有名なジグムント・フロイトなどの著作が含まれています。



図5

「ビブリオコースト」は聞きなれない言葉かもしれませんが、「ホロコースト (holocaust)」という言葉であれば、どこかで耳にしていることと思います。現在では、広く、ナチスが行った「ユダヤ人の大量虐殺」を意味する言葉として知られています。しかしながら、「ホロコースト」は、もともとはユダヤ教の重要な儀礼の一つ、「^{ぜんはんさい}全燔祭」、つまり、生贄の動物を祭壇の上で焼き、神に捧げることを指す言葉でした。旧約聖書のモーセ五書の一つ、『レビ記』には「焼き尽くす献げ物」として次のように記されています。

「主は臨在の幕屋から、モーセを呼んで仰せになった。イスラエルの民に告げてこう言いなさい。あなたたちのうちのだれかが、家畜の献げ物を主にささげるときは、牛、または羊を献げ物としなさい。牛を焼き尽くす献げ物とする場合は、無傷の雄をささげる」。

その後、「(火による) 大虐殺」の意味で用いられるようになり、ナチスのユダヤ人虐殺によって、日本人である私たちにも広く知られるようになりました。ビブリオコーストは、「本」を意味する「ビブ

リオ」と「焼く」を意味する「コースト」から作られた造語です。日本語では「焚書」がこれにあたります（図6）。

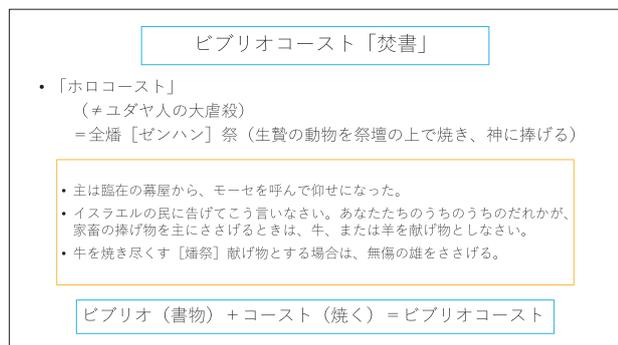


図6

書物を焼いたり、抹消したりするという行為は、有名な秦の始皇帝による焚書坑儒、キリスト教徒によるアレクサンドリア大図書館の破壊、モンゴル軍によるバグダードの「知恵の館」の破壊、コンキスタドルによって失われたアステカ文書といった古代から近世にかけての単なる歴史的な出来事ではありません。20世紀に入っても、ナチスによる焚書、そしてサラエヴォ国立図書館の徹底的な破壊がありました。私たちが生きる21世紀でも、その行為はさらに続きます。イラク戦争時における公文書館の焼き討ち、トンブクトゥの写本に対する脅威といったように、決して過去の出来事ではなく、現在にも続く出来事なのです（図7）。



図7

本日のシンポジウムのテーマは「人はなぜ本を焼くのか」というものです。「意図的な文化遺産の破壊」の背景とその論理を知るための手立ての一つとして、「本を焼く」ということを取り上げます。

私は、現在、帝京大学で「文化遺産」という講義を担当しています。授業では、「破壊された文化遺産」や「危機にある文化遺産」を取り上げ、文化遺産がなぜ破壊され、それを救い、保護するために何

をしているかという事例を学生の皆さんに紹介しています。このような事例は、学生に衝撃的な印象を与えるものですから、文化遺産に対して、学生に関心を持ってもらう一つのきっかけにはなります。

皆さんもご存じのとおり、ターリバーン政権によるバーミヤーンの大仏の爆破、ISによるパルミラやハトラ、ニネヴェの爆破といった文化遺産の破壊は続いています（図8）。これらの破壊は、「ヴァンダリズム」つまり「文化に対する蛮行」であり、「文化遺産の意図的な破壊」です。そのたびに、私たちは文化遺産の保護を叫び、保存修復への取り組みを行ってきました。その一方で、なぜ文化遺産は破壊されるのか、しかもなぜ意図的に破壊するのかということについては、あまり深く考えてきませんでした。



図8

私自身、2002年から、アフガニスタンのバーミヤーン文化遺産を保護するための活動に携わってきました。どのようにして破壊された文化遺産を保存し、守っていくのかということはいつも考えていました。それだけでは、ダメなのではないかと思うようになったのは、繰り返し起こったISによる文化遺産の意図的な破壊がきっかけでした。（図9）



図9

私たちが生きているこのインターネットの社会では、瞬く間に、ある意味、好きなように情報を発信することができるようになりました。新聞やテレビ

という媒体を飛び越え、世界中に自分で情報を発信できる時代と言えます。ISは、パルミラやハトラの遺跡を「意図的」に破壊し、それをインターネットで配信することで、自分たちのプロパガンダの手段として上手に利用したと言えるかもしれません。

こうした「意図的な文化遺産の破壊」を授業で取り上げるたびに、いったい、彼らはなぜ、文化遺産を意図的に破壊するのかという疑問が浮かんできました。「宗教的な狂信者」と言ってしまえば、わかったような気になるのですが、彼らには、彼らなりの明白な論理があるのではないかと考えるようになりました。ISの文化遺産破壊の行為やその論理を支持することはできませんが、彼らが何を考え、なぜ意図的に破壊したのかを考えることは、今後、文化遺産を破壊から守るために必要なことだと思ふようになりました。

もちろん、実際には、私たちは破壊側の立場には立つことはできませんし、また、破壊した側の論理は詳しく分析されていませんから、あくまで破壊された側からの想像となってしまいかもしれません。しかしながら、意図的に文化を破壊する集団や個人が、何を否定し、どのような効果を狙って破壊するのかを問うことは、決して無駄なことだとは思われませんし、社会全般あるいは集団にとって、文化遺産がどのような価値や意味を持つかを考える糸口になるのではないのでしょうか。

さて、ここで「本を焼く」ということにもう一度戻ってみたいと思います。このシンポジウムでは、「意図的な破壊」の一つの事象として「本を焼くこと」を取り上げますが、この文化遺産国際協力コンソーシアムのシンポジウムで「本を焼く」ことをテーマにすることに、首をかしげる方もいらっしゃるかもしれません。

これまで、コンソーシアムのシンポジウムや研究会で取り上げられてきたテーマといえば、「文化遺産国際協力のかたち—世界遺産を未来に伝える日本の貢献—」、「世界遺産の未来—文化遺産の保護と日本の国際協力」、「文化遺産保護は平和の礎（いしずえ）をつくる」、「ブルーシールドと文化財緊急活動—国内委員会の役割と必要性—」といったものです（図10）。どちらかという、文化遺産の保護という分野における国際協力をどう考えるか、どのように協力していくべきかを扱ったものでした。その意味で、このシンポジウムは、これまでのものとやや

趣を異にするものともいえます。



図10

日本の文化財保護法では、有形文化財の美術工芸品の一つとして「典籍、古文書」が挙げられています。また、ユネスコの「世界の記憶」、いわゆる「記憶遺産」の定義では、「手書き原稿、書籍、新聞、ポスター等のテキスト資料」が含まれているとされています（図11）。古いものであれば、私たちも、書籍や写本が文化遺産であると容易に理解できます。

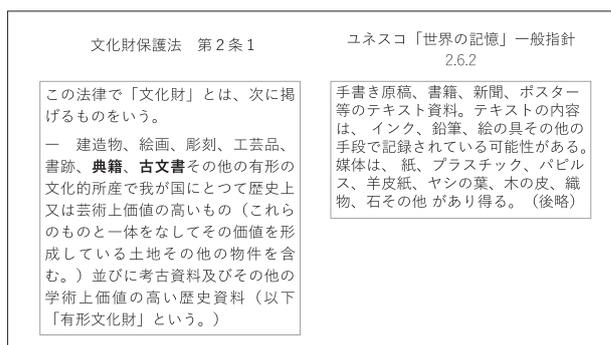


図11

ですが、このシンポジウムでは、「始皇帝による焚書坑儒」や「エジプトのアレクサンドリア大図書館の焼失」といったような古い歴史的な出来事だけでなく、「サラエヴォ国立図書館の破壊」やマリのトンブクトゥでの事例のように、つい最近の出来事ともいえるものも取り上げることになります。冒頭でお話ししましたが、ナチスによる「ビブリオコースト」もまた意図的に本を焼き、破壊した出来事です。2003年のイラク戦争では、バグダード博物館が掠奪されてことは大きく報じられましたが、その陰で、公文書館が焼かれたことはあまり知られていません。

図書館や公文書館の破壊や焼き討ち、書物や文書の破壊はなぜ繰り返されるのでしょうか。なぜ、人は書物や文書を破壊し、焼くのでしょうか。本を焼

くことで消し去ろうとするものは何なのでしょう。

言葉を話し、文字で記録することは人間にしかできません。そして、書物や文書は、人間の一つの集団の記憶と知識の集積です。本来、知識や記憶は、一つの社会集団が共有する財産であるとともに、人類共有の財産ともなりうるもので、また、将来のための礎ともなるべきものです。その一方で、一つの集団が持つ歴史や伝統、価値観を明確に示すものでもあり、一つの政権にとっては、その正統性の拠り所となることもあるでしょう。

秦の始皇帝が行った焚書坑儒ですが、焚書の対象となったのは、「民間にあった医薬・卜筮・農事などの実用書以外の書物」とされており、すべての本を焼き払ったわけではありません。始皇帝は、それまでの世界から脱却して、新たな国を作るために、過去の伝統の制度や知識の集積であった書物を焼いたのかもしれませんが。

古代エジプトでは、石で造られた神殿や墓の壁面などに彫られたり、描かれたりした碑文やレリーフの削除や改ざんが行われた痕跡が確認されています。古典古代の知の中心であったアレクサンドリア大図書館は、ある時破壊され、そこに所蔵されていた知識や知恵が失われてしまいました（図12）。こうした出来事は、なぜ起こったのでしょうか。



図12

ユーゴ内戦では数多くの文化財が破壊されました。1992年のサラエヴォ国立図書館の破壊もその一つです。生活基盤の破壊ではなく、物質文化と精神文化、そして歴史の破壊が繰り返され、かつ徹底的に行われたことは、世界に衝撃をあたえました。その背後にある論理は一体何だったのでしょか。

西アフリカのマリの町、世界遺産のトンブクトゥでは、13世紀から17世紀にかけて数多くの貴重な写本が作成されました。イスラーム教に関するものだけでなく、天文学や数学、医学、法学など、イス

ラーム世界の高度な知識を示すもので、現在、「トンブクトゥ写本」として知られています（図13）。

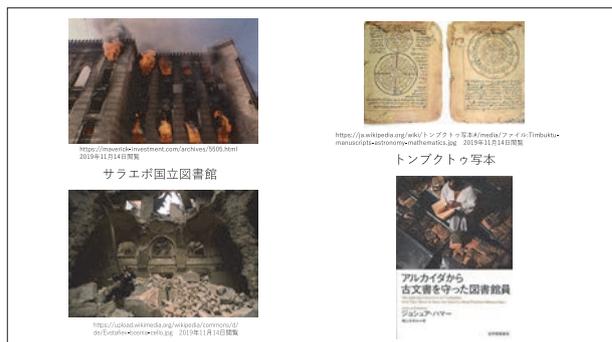


図13

2012年、イスラーム武装勢力は、非イスラーム的だとして、これらの写本を破壊しようとした。同じイスラーム教を信奉しているはずなのに、なぜイスラーム世界の知識を抹消しようとしたのでしょうか。あるいは、それを売って資金にしようとしたのでしょうか。今日のシンポジウムで明らかになることと思います。

いずれのテーマも、過去の、歴史的な事例ではありますが、現在まで続く「本を焼く」側の論理や考えを知るうえで、とても重要なものです。

なぜ人は文書や書物を破壊し、焼くのか。なぜ図書館や公文書館を破壊するのか。本を焼くことで消し去ろうとするものは何なのか、その陰にある、破壊者側の論理と感情を解き明かすことで、なぜ人は本を焼くのか、その目的は何なのかを理解することができるかもしれません（図14）。

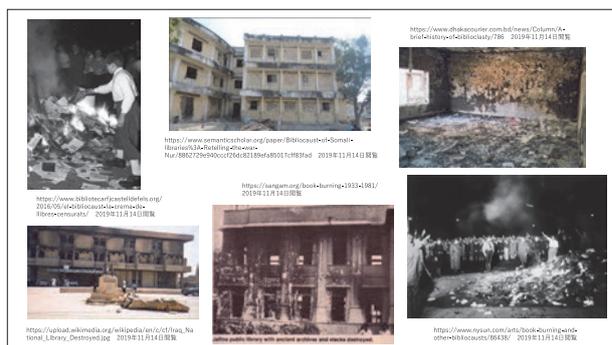


図14

「本を焼く」ことは、文化遺産の意図的な破壊の一つの事象にしすぎませんが、その論理を解き明かすことは、いまだ止まぬ文化遺産の意図的な破壊の裏にある破壊者の論理を明らかにする一つの手立てとなるでしょう。破壊された文化遺産を保存し、修復するだけではなく、文化遺産の意図的な破壊を

未然に防ぐこと、そのための方策を導くことこそが必要だと思います（図15）。

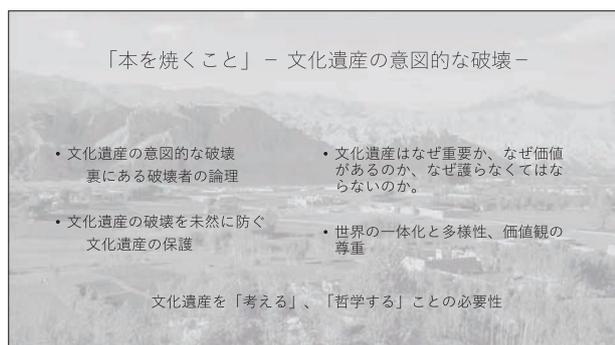


図15

「文化遺産」の授業という、とかく、文化遺産を保護し、将来に伝えていくための取り組みや制度・法律・条約を学ぶものだと感じている学生が多いように思います。もちろん、制度や法律を学ぶことはとても重要なことです。しかしながら、今こそ、文化遺産を「考える」、「哲学する」ことが必要なのではないでしょうか。21世紀に生きる私たちは、文化遺産を守ることを自明の理のようにとらえています。この21世紀であっても意図的な文化遺産の破壊は止むことがありません。なぜ文化遺産は

重要なのか、なぜ価値があるのか、なぜ守らなければならないのか。これは「自明の理」なのでしょう。時代や地域、社会や集団によって、それぞれの価値観は異なります。

人間社会は多様性があるゆえに豊かであるといえます。人間社会が多様であるからこそ、価値観もまた多様です。その一方で、21世紀は、世界の一体化が進む中で、多様性の尊重と重要性が叫ばれる時代です。多様性の中で、お互いの価値観を認め合い、尊重することがなければ、文化遺産を意図的な破壊から守ることはできないと思います。

このシンポジウムでは、歴史的に行われてきた焚書や文化遺産の「意図的な」破壊行為を振り返り、文化遺産を破壊する側の「論理」に照準を当てていきます。あくまで破壊された側からの想像にはなりません。何を否定し、どのような効果を狙って破壊するのかを問い、社会にとっての書物、ひいては文化遺産の意義について考える機会とします。私たちは将来のために何ができるのか、どのような国際協力のあり方が必要なのかを過去の事例から学び、議論を展開する場にできればと思います。ご清聴、ありがとうございます。

秦始皇帝の焚書坑儒の真相

鶴間 和幸 (つるま かずゆき)
学習院大学文学部 教授



1950年生。学習院大学文学部教授、博士（文学）。専門は中国古代史。著作に『秦帝国の形成と地域』（汲古書院）、『人間・始皇帝』（岩波書店）、『ファーストエンペラーの遺産 秦漢帝国』、『始皇帝陵と兵馬俑』（以上講談社）等がある。「中国文明」や「始皇帝と兵馬俑」の展覧会の監修も何度か務めた。始皇帝研究に関しては、始皇帝陵や始皇帝の巡行経路を歩くなど現地の遺跡に詳しい。著書出版後も現地調査や出土竹簡史料から始皇帝の実像に迫っている。司馬遷の『史記』は一級の最重要史料であるが、出土史料との齟齬が見えてきたので、面白くなっている。映画キングダムの中国史監修も務め、できうる限り2200年前の歴史の舞台を再現できるようお手伝いした。

学習院大学の鶴間です。私に与えられたテーマは、本日のテーマの代名詞的なことばになっている焚書を行った始皇帝についてです。実際にどうであったかを歴史的に考えて、さらに中国古代で書物を燃やすことには、そもそもどのようなものであったのかについてお話します。始皇帝の実際の姿は、肖像を残すことを避けていたので分かりません。これは明の時代の暴君・始皇帝の姿を表した三才図会の肖像です（図1）。私は、2015年に岩波新書から『人間・始皇帝』という本を出しました。暴君・始皇帝の裏にある人間・始皇帝とは、どのような姿なのか。それを追っていくと、後世の人たちが考えた秦の政策を、よりその時代に入って考えられるのではないかということで、『人間・始皇帝』のタイトルを付けました。中国と韓国で、それぞれ翻訳がされました。余談ですが、中国語では「人間」の意味は俗世間です。そのままでは訳せないので『始皇帝』として、副題に始皇帝とその生活の時代と付けられました。もう一つ前に出した『中国の歴史』の3巻では、ファーストエンペラーの遺産と題し、始皇帝の遺産を漢の時代がどのように受け継いでいったのかという視点で、中国史の秦漢史の概説書を1冊書きました。

全13巻のうちの10巻が中国語で翻訳をされ、台湾でも別に翻訳されました。総部数100万部といわれて、大変にびっくりしました。今、中国の若い人たちは、外国人である日本人の研究に大変関心を持っています。私たちも大いに刺激をされました。焚書坑儒の図には、始皇帝と、その前に焚書令の提案者である李斯が登場します（図2）。左下は書物を焼く光景、右下は坑儒（坑儒）とのことで、儒者、

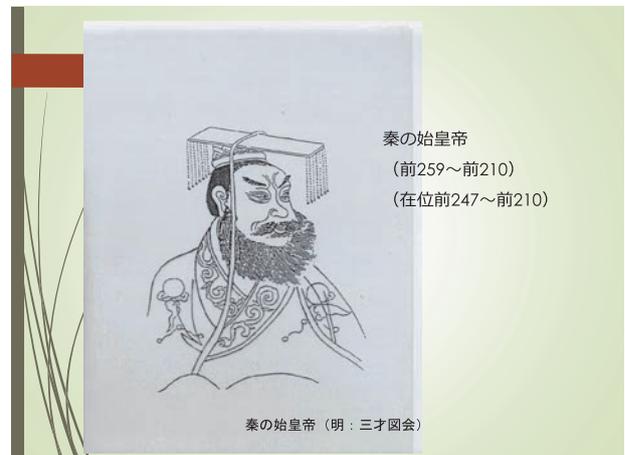


図1

四百六十数名を穴埋めにしています。この画像について、最初に取り上げます。

いろいろなテキストがありますが、『帝鑑図説』の1606年の版本で分析をしてみます。右上では、始皇帝が玉座に座っています。その下に李斯がひざまずいて、焚書といわれる政策を提案しています（図3）。少し脱線をしますが、この画面には誤りがあります。原泰久氏の『キングダム』といわれる50数巻のマンガが大変にヒットをしました。実写化もされて、本年4月に公開がされましたが、私はその中国史の監修を裏でひっそりと務めました。私もマンガを読んで、歴史的に少しおかしいところに意見をさしあげ、映画の舞台を作るときに参考にしてもらいました。

原氏は、始皇帝の玉座を清朝時代の康熙帝や、乾隆帝といった近世の皇帝の玉座と同じように描いています（図4）。しかし2200年前の始皇帝の玉座は椅子ではなく、床の敷物の上に正座をするものでした。映画でいきなり変えてしまうのは抵抗がありま

したので、美術監督の斎藤岩男さんと検討をした結果、なるべく低い玉座にし、ベッドのような玉座にしました（図4）。これは斎藤美術監督のスケッチです。今回の映画は、始皇帝の弟の成蟜が玉座に就き、秦王のちの始皇帝を追放した事件が描かれていますので、映画では成蟜が玉座に寝そべっている姿がよく出てきています。

一方で、フィクションですが、始皇帝の少年時代の政が自分とうり二つの漂と出会う場面では、きちんと正座をしている秦王の姿があります（図4）。これを立派な敷物にすれば玉座になります。明代の人たちがすでに秦の時代の歴史を忘れてしまい、始皇帝が暴君であることを後世の手本にしようとしたのが、『帝鑑図説』の目的です。歴史は、その時代のことを忘れていきますし、後世の考え方でその時代を見てしまいます。われわれは、それを突破していかなければなりません。

先ほどの画面の左下では、書物を焼いています（図5）。焚書ですが、その別の画像を拡大しま



図2

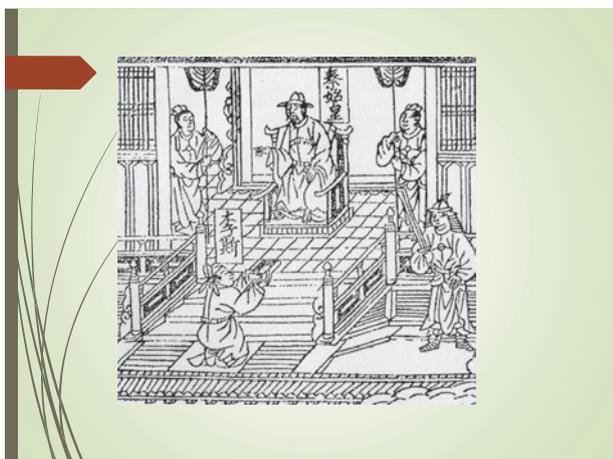


図3

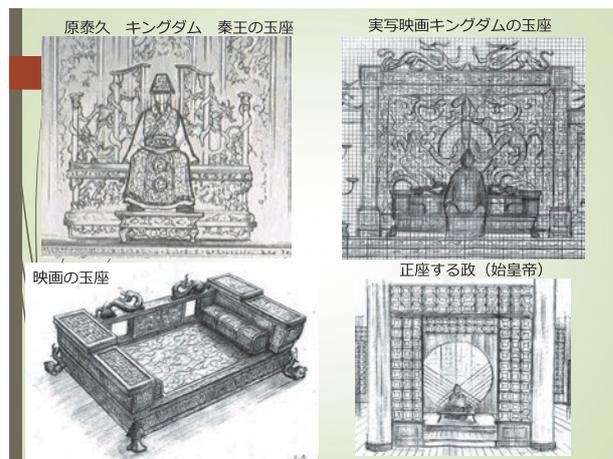


図4

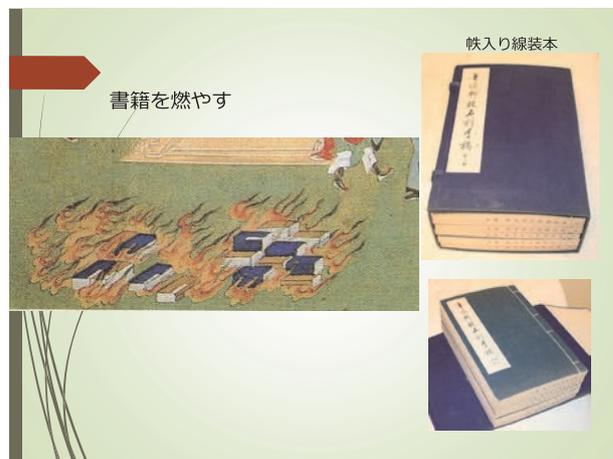


図5

した。この書物は、私の手元にある帙入りの線装本です。漢籍とは、糸でとじた紙の書物です。そのままでは書棚に立たないので、布張りの厚紙の箱に入れます。これを帙（ちっ）といって、青い布で張ってあります。『帝鑑図説』に見えた書籍は、まさに印刷本で、帙入りのものです。印刷本が出てくるのは、10世紀の宋の時代以降ですので、2000年以上前はこのような書物はあり得ないわけです。

宋の時代以降に印刷本の時代に入りました。『史記』を読む人たちの需要は多く、紙に印刷をした書籍が広まりました（図6）。さかのぼって唐の時代は、まだ写本の時代ですので、紙に手書きをした時代です。東京国立博物館には『史記』の水利史を書いた河渠書の唐代の写本があります（図7）。紙に筆写をした時代は、唐代までとのことです。

さかのぼって、戦国時代や秦・漢の時代です。紙は、後漢の蔡倫が発明をしたといえます。紙自体は前漢末からありますが、戦国から秦・漢は竹簡と木簡の時代です。木簡は竹がない所で使われますが、

少しかさばります。竹は成長が早いですし、竹自体は非常に薄いものを作れるので、竹が取れば竹簡を使っていました。画像は、展覧会用に150枚ほどのものをひと巻きにしたものです（図8）。秦の時代の焚書は、竹簡を燃やしていました。

これは『史記』の太史公自序といわれる司馬遷の自伝130巻目の最後です（図9）。前漢の武帝の時代での隸書体で、書家の方に書いてもらいました。漢の時代の書物とは、このような感じです。東京国立博物館にも漢の画像石があって、そこに竹簡を持つ役人が描かれています（図10）。手元にある竹簡が、とじひもとと一緒に見ることができます。ここで李斯が出した焚書令のことを考えてみます（図11）。焚書令で出した対象で一番大事なものは①番で、国の史官が持っている秦の国以外の歴史書です。秦は、東方の六つの国を滅ぼしたので、例えば楚や韓、魏、趙、燕といった国々の歴史書を燃やすことが最も重要でした。勝利した秦の側ではない歴史書を消滅させようとした。



図6



図8

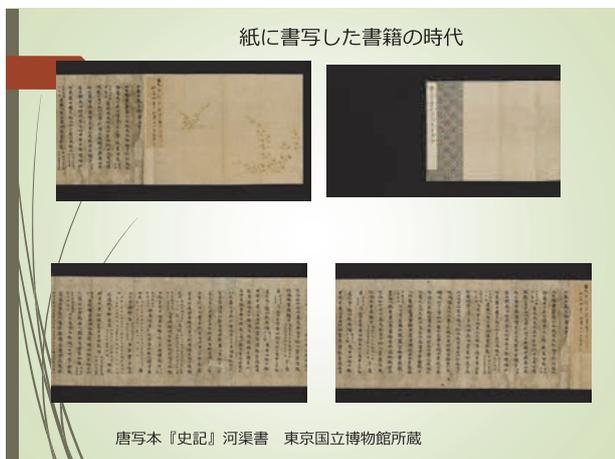


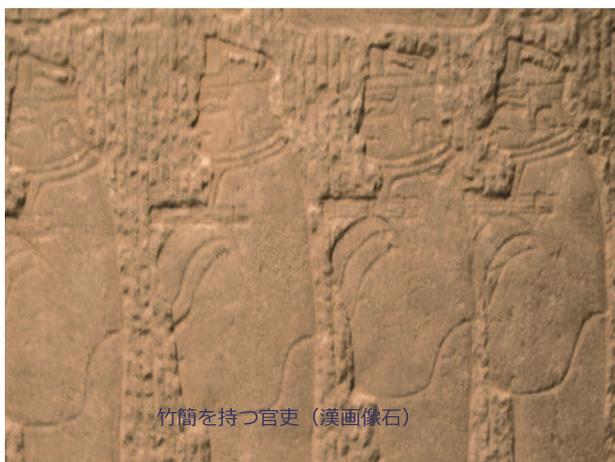
図7



図9

②は、漢の人たちが問題にしたもので、博士の官が持っているものはいいが、民間で詩や古代の帝王の歴史書である書、諸子百家の百家語を持っていると、全てを役所に集めてきて、焼かねばなりません。なぜかといいますと、③にあるように詩経や書経をテキストにして、いろいろな政治の議論をしている者を棄市として、死刑にする。その後にあるように古をもって今をそしる者ということで、昔の歴史を取り出してきて、今の政治を批判することを押さえることが李斯の提案でした。後で言いますが、今の政治とは統一をしたときのことではなく、6年後に始めた戦争のことを言っています。

⑤にあるように医薬書、占いの卜筮の書や農業関係の書物は、技術書なので焼く必要はありませんでした。⑥が大事で、法律を学ぶものがあれば、役人について学べとのことを提案しました。次に禁書令の時代背景は、繰り返しますが、秦が統一をしたときではなく、6年後に戦争をしたときのことです。秦と東方の国々との戦争で、東方の国々を征服した



竹簡を持つ官吏（漢画像石）

図10

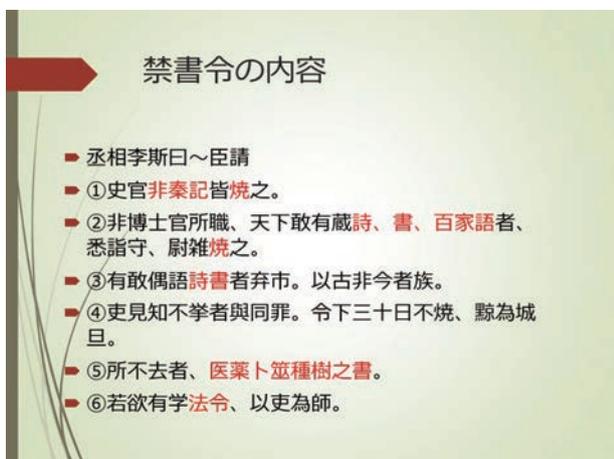


図11

結果、一つの秦の帝国をつくったので、反発が非常に強かったのです。そこでもう一度、中国世界をまとめようと、ある意味で李斯が仕掛けた戦争は、北方の匈奴と南の百越の対外戦争でした。北方には30万の軍隊、南には50万の軍隊を出しました。

秦の時代は、意外なほどかっこ付きの自由な言論がありました。学者たちが国の政策に自由に意見を言って、過去の歴史を持ち出して、いろいろと意見を言っていました。それを戦争の最中に中央で一時的に押さえようとしたのが、焚書令です。そのことが分かるのは、同時にいろいろなことが連動しているからです。焚書令と同じ年に万里の長城を築きま（図12）。北方の匈奴との戦争をするので長城を造って、南には砦を築きました。長城と都との間には直道といわれる軍事道路を造って、都自体も阿房宮といわれる宮殿を拡張した大きなものを造りました。核になる秦の咸陽を守りながら、新たな戦争に備えたわけです。

この衛星画像では、秦の都は、西側にあります。始皇帝陵と咸陽から真っすぐに線を1000キロぐらい東に伸ばしていくと、海（黄海）に行き当たります。そこに秦は東門といわれる門を置きました。あまり注目はされていませんが、今私たちは衛星画像を使って、その東門がどこにあって、どのような遺跡なのか探っています。東海大学の情報技術センターと一緒に推測して、現地の人にボーリング調査をしてもらっています。目印になるような石像があります。北方の秦の長城は、石積みの長城です。都との間を直道で結びました。咸陽の都は阿房宮の宮殿を充実させました。始皇帝の陵墓はずっと作り続けていて、このときは始皇帝陵の所に陵邑といわれ

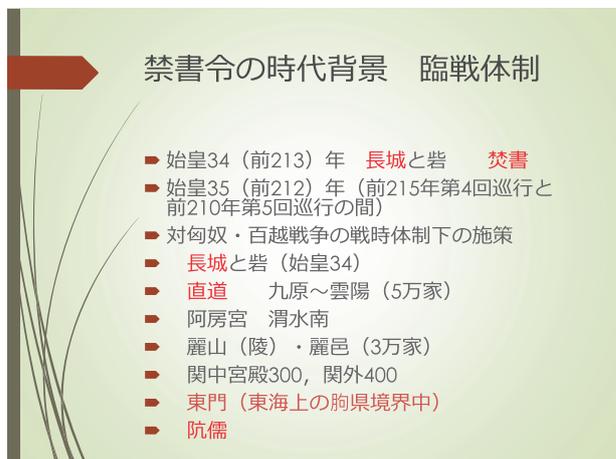


図12

る墓守の都市を築き、同時に遙か東方に東門を築いたのです。

これは一連の戦時体制の事業であり、統一時の事業ではありません。その中で、焚書坑儒が行われました。最近新たに分かってきたことは、焚書以前の戦国時代のお墓から、いろいろな竹簡の書物が出てきたことです。秦の統一が前221年、前213年に初めて焚書令が出され、それが前漢の恵帝の時代まで続きます。民間で詩や書を持っていることを禁じた法令は、前漢の時代にも受け継がれます。このことを漢の儒者たちは批判しますが、前漢の高祖劉邦の時代は、秦の政治をそのまま受け入れています。

武帝の時代になって、いろいろと面白い書籍が発見されました。焚書の際に詩経や書経を民間に隠しておこうとする動きがありました。何をしたかといいますと、竹簡を土壁の中に塗り込んだのです。壁の中に塗り込んで残すことは、紙の文書であるとうまくいきませんが、竹の文書だからこそできたことです。前漢の武帝の時代にこれらが発見されました。武帝の時代のことですので、私たちは発見されたものを文献の中でしか知ることができません。魯恭王の劉余や河間献王の劉徳が、先秦時代の焚書以前の文字で書かれた書物を発見したとのニュースが漢の時代にありました。

司馬遷は、詩書を焼くことを、「詩書を焚く」と表現しました。司馬遷の時代は坑儒ではなく、術士を穴埋めにしたと表現しています。穴埋めも、今は坑の字にしていますが、本来はこごと偏の阨と書きます。儒家を対象にしたというのは、後漢の班固が『漢書』の中で書を焼き、儒を穴埋めにしたと言ったからです。後漢の時代は儒教の時代なので、始皇帝が穴埋めにしたのは、孔子の学問を伝える儒家たちであると、ある種思い込もうとしたのです。始皇帝を批判する中で、自分たち儒家の立場を守ろうとしたのです。司馬遷自身は、術士といていたように、政治の批判をしたのは、儒家ではありませんでした。いろいろな学者がいて、秦の時代ではいろいろな学問が自由に行われていました。

これも大変に重要なことで、それこそ儒家以外にも道家的なものや、いろいろな学問がかなり自由に語られていました。始皇帝自身もそのようないろいろな思想を持っていました。また戦争をしようとなったときに、この政策を一時的に取りました。しかし後漢の人たちは、それが儒者を対象に弾圧した

ものであるとしたのです。新しい資料の話をしませと、武帝の時代の司馬遷の『史記』とほぼ同じ時代に書かれた竹簡が出てきました(図13)。これは始皇帝の物語で『趙正書』といいます。本日は時間がないので詳しい話はできませんが、びっくりしたのは司馬遷の『史記』とは全く違うストーリーが、同じ武帝の時代に伝わっていたことです。

『史記』では、始皇帝は長男の扶蘇に跡を継がせようとした。『趙正書』では、末っ子の胡亥を正当な跡継ぎにしたことを始皇帝も認めたくなくて、死を迎えます。『史記』では、臨終のときに長男の扶蘇に自分の葬儀をしてくれと遺詔を出しましたが、『趙正書』では胡亥が正式な後継者となっているのです。『史記』では、胡亥と趙高と李斯がクーデターを起こしますが、そのことが『趙正書』には全く出てきません。『趙正書』は同時代の始皇帝の書物ではありません。『史記』も、始皇帝以降の100年後の書物です。いきなり地下から出てきたものと、長年読み継がれてきた正史とが同等に並ぶのです。

前漢の人たちは100年前の秦の話を持ってきて、「秦始皇本紀」といわれる正史の中に取り上げました。私たちは今、少なくとも始皇帝と同時代の文書がたくさん出てきているので、そこから考え方を考えていかなければならなくなりました。北京大学では、盗掘された大量の竹簡を入手して、その研究がされています。先ほど文書は壁に塗ると言いましたが、もう一つの逃れる道としては、地下のお墓の中に竹簡の文書を入れることです。お墓の中に入れて、現在まで残るといふ書物の残り方です。これが『趙正書』であったのです。



図13

焚書令を提案した李斯について、少し説明をします。李斯は戦国時代の秦国から見れば外国人ですが、秦に仕えて、最後は丞相にまで上って、焚書を提案します。権力の頂点に上り詰めますが、その後は趙高との間の権力闘争に負けて、最後は死罪を受けて、車裂きとなりました。私は李スについても見直したいのですが、本日のところでいえば、彼がなぜ焚書を提案したのかを見ていきます。それは韓非との出会いがあったからです。韓非と李斯は、荀子の下で学んだ兄弟同士です。韓非の思想は、いかに帝王は官僚たちをうまく使いこなすのか、一方官僚たちは、いかに帝王の逆鱗に触れずに、激怒させずに政策を提言するのかを説いています。

韓非は本当に頭が良く、君主への説得に大変に苦勞をした話が『韓非子』の中で書かれています。その中には実は焚書のことも出てきます(図14)。韓非はあまりにもできるので、始皇帝も韓非に会えれば自分は死んでも構わないとまで言っていました。実際に韓非が秦に来ると、李スたちによってねたまれ、最後は毒を与えられて自殺させられます。焚書坑儒の背景には、こうした韓非の思想がありました。秦国は戦国時代に入ると、商鞅の変法といわれる大変な大改革をします。改革とは、法でもって政治をすることです。商鞅は、恣意的な政治ではなく、法律に基づいて政治をすることを主張しました。

その中に詩書を焼いて、法令を明らかにするとの言葉があります。詩と書は、孔子や孔子の弟子集団がテキストにしていた書物です。書(尚書)は歴史書で、詩(詩経)は民間の歌を集めたもので、いろいろな政治的風刺の言葉が込められているものです。それを基に活発な議論をしていたのが孔子集団

です。これを対象に挙げて、詩書を焼く。一方では、法令を明らかにすることに力点があります。韓非は、『韓非子』和氏篇の中で商鞅の変法について言及しているので、これを李スも参考にして、秦で焚書令を施行しました。

李スは、権力の頂点にかけ上って、最後は地に落とされます。自分が行ってきた事業を振り返って、これがあったから自分は死罪になると逆説的に自分の功績を褒めながら、彼はやむなく死罪を受け入れます。実は、その中に焚書がないのが気になっています。

さてもう一方の坑儒について話をします。坑儒は、先ほど言ったように坑儒の字を使っていました。穴を掘って、儒者を生き埋めにしたとの話です(図15)。この坑とは、もともと戦争のときに敵兵を穴埋めにする戦術でありました。

焚書にしても坑儒にしても、戦争と結び付けて考えていきたいのです。秦の武安君白起が長平の戦いで四十数万人を捕虜にしました。全てではありませんが、彼らを穴埋めにしたとの記事があります。秦王(始皇帝)がまだ王のときに邯鄲を攻めて、自分が生まれた故郷に入りました。母親と幼いときに過ごしていたときにいろいろな迫害を受けたということから、そのような人たちを探し出してきて、恨みから穴埋めにすることもありました。項羽も穴埋めを行いました。項羽が秦王を敵にして、秦の軍隊の20万人を新安城で穴埋めにしたとあります。

これらは戦争の一つの手段で、敵を捕虜にするだけでなく、敵を穴埋めにするという戦略です。焼くことも戦争の手段でした。項羽は最後に秦の咸陽城を焼き払いました。咸陽城を焼いた光景が描かれ

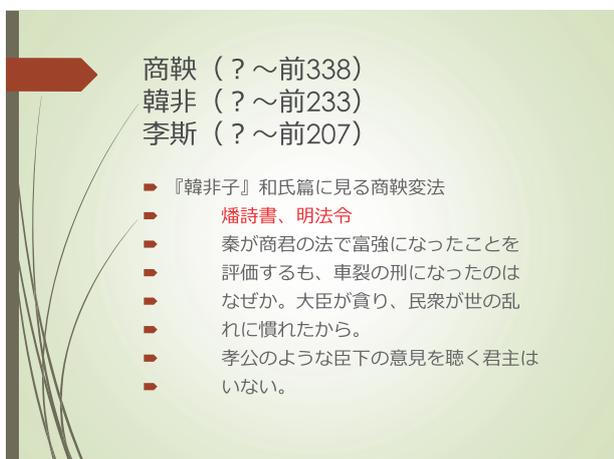


図14



図15

ています（図16）。岡倉天心の弟子で、日本画家の木村武山が1907年に阿房劫火といわれる作品の絵を描いています。私は、この描き方が随分と気になりました。なぜこのように描けるのか。阿房宮の史跡には、土を固めた版築の基壇は残っていますが、どのような建物であったかは分かりません。宮殿を焼くことを焼の字を使っています。

その火は3カ月も消えなかったと記録されています。阿房劫火の絵画のデジタル画像を拡大してみると、レンガ造りの城壁が見えます（図17）。秦の時代にはレンガ造りは、あり得ません。当時は版築といわれる土を固めて、層にして造っています。焼きレンガで造るのは、宋代以降の建物です。上にあるように現在でも西安城は城壁が残っていますが、武山が描いたのはまさに焼きレンガの城壁です。武山は、明の『帝鑑図説』と同じように古代の城壁を知らないわけです。何を参考にしたのかといいますと、明・清の西安城です。彼は現地には行っていないので、岡倉天心の弟子の早崎稔吉が、撮っ

てきた写真を基に描いたのではないのでしょうか。

少し不謹慎な気がしますが、この戦争において敵を焼くことや燃やすことは、料理のことばと重なっていることを話させてください。宋代以降の料理は、強いコークスの火力で、鉄鍋で油で炒める調理が広がっていきました。それ以前の中国古代では、なますという生ものを食べていましたし、煮る料理や焼く料理、蒸す料理が基本でした。炒める中華料理というのは、新しいのです。漢代の画像石には、かまどを使わずに五徳のようなもので煮ている場面が見えますが、竈は普及してしましました（図18）。画像石の左上は、動物の肉を割いている場面です。右側では何かを焼いている場面で、真ん中の左は蒸し器で蒸しています。

戦争の記事を見てみますと、咸陽は屠すという表現があります（図19）。咸陽の町を項羽が焼いてしまうわけですが、別の言い方をすると咸陽の町を屠す、これは屠殺の屠です。住民を殺すことを意味するのに、表現がかなり強烈ですが屠の字を使いま



図16



図18



図17



図19

す。もう一つは、秦の宮殿を屠焼するという表現もあり、住民を殺して、咸陽の宮殿を焼くという言い方をしています。秦の宮殿を焼いて、その火は3か月間、消えなかった。項羽は秦の宮室を焼いて、始皇帝陵の地下宮殿を掘り、ひそかに財物を燃やしたと言われていました。しかし始皇帝陵の地下宮殿までは盗掘をしていないということが、だんだんと分かってきました。兵馬俑自体に項羽の軍隊は入って、その一部を焼いていますので、そのことを指しているのではないのでしょうか。始皇帝陵は地下宮殿だけでなく、周囲の施設を含め、非常に広範囲です。

項羽が紀信という人物を焼き殺したとの表現もあります。また項羽が漢の劉邦の父を捕らえて人質にしたときに、実際にはしませんが、煮て殺すと脅しました。烹の字を使っています。割烹（肉を割いて煮る）の烹の字はあきらかに料理の言葉を人間に対して使っています。項羽は、斉の城郭を焼夷して、斉の人たちを穴埋めにしたと言っています。焼くや屠は戦争の言葉ですが、書物を焼くことも、一つの

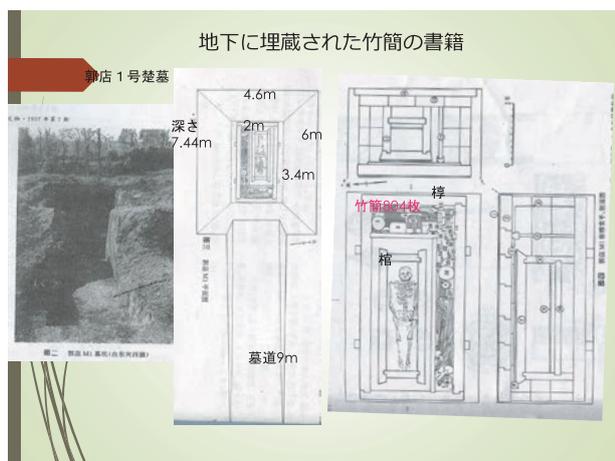


図20

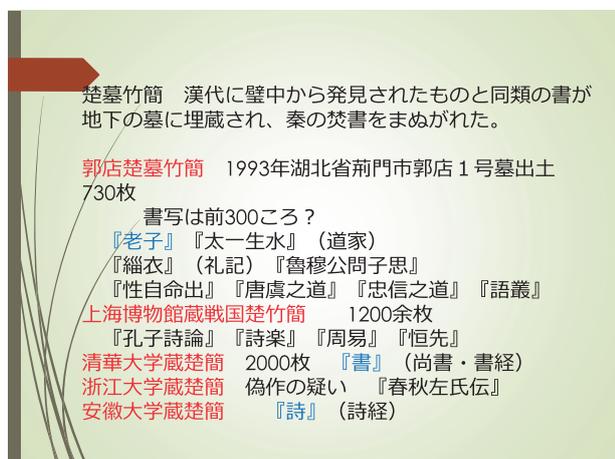


図21

政治的、軍事的なパフォーマンスのように思われます。漢時代の戦争の場面が画像石に見えます。敵の首を取って、その首を並べています。敵の首を取ることは、取った側からすると爵位を与えられることになります。

地下に埋蔵をしたことで、現在まで書物が残ることが最近になって、よく分かってきました。戦国時代の楚の墓が随分と発掘をされています(図20)。詩や書は、焚書の対象となっていました。国の博士たちは持っていましたが、民間ではどこまで焼かれていたのか分かりません。最近、それ以前にお墓の中に入れた戦国時代の詩経や書経が出てきました(図21)。郭店楚簡といわれるお墓のほかに、上海博物館、清華大学、安徽大学などには盗掘をされたものが寄贈をされました。戦国時代の楚の文字で書かれた詩経や書経が出てきているので、新しい観点から焚書の対象になった書物の研究がされるようになりました(図22)。

秦の時代のお墓にも、竹簡は残されていました。1975年に初めて大量に秦の時代の竹簡が出てきました。地方の役人の墓でしたので、書籍よりも行政文書が埋蔵されていました(図23)。役人は、詩経や書経を読むことをしていたでしょうけれども、お墓の中に入れるのは生前に使っていた行政文書です。その中に秦の時代の法律文書がありました。『為吏之道』といわれるものは大変面白い書物です。最近、私は吏道という言葉を使い始めました。王たる道の王道と覇者たる道の霸道といわれる言葉がありますが、吏たる道とはすごく大事で、秦の時代にはこのような書物を役人に読ませました。

それを見ると、今でも通用するようなもので、役

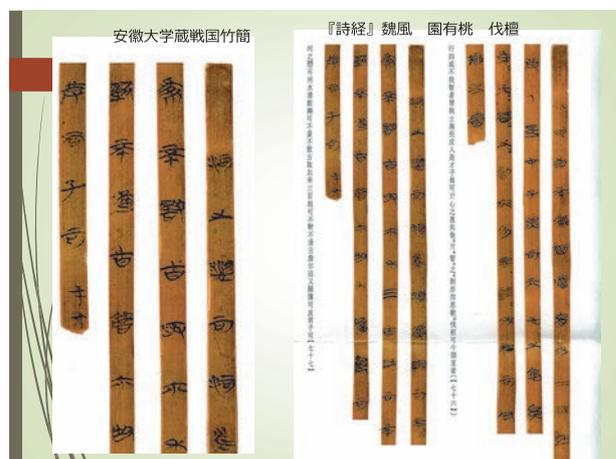


図22

人は清廉潔白でなければならない、蓄財してはならないとのが書いてあります。時代を超えて、今でも吏道の精神は大事です。『為吏之道』を読んでいくと、不思議なことに気付きました。その中に『論語』と同じような文章がたくさん出てきたのです。役人は君臣関係を大事にします。君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たりです。『論語』の中に出てくる国と家の上下関係が、『為吏之道』にも出てきました。他には、老子に関係のある言葉も出てきました。私が言いたいのは、秦の思想はいろいろなものがあって、最初から弾圧をしていたわけではありません。始皇帝自身も、いろいろな思想を受け入れた人物です。それがだんだんと分かってきたのです。

お墓の中ではなく、井戸の中に文書を残していたことが最近、分かってきました。これは里耶古城といわれる所で、井戸の中に大量の行政文書が投げ捨てられていました(図24)。行政文書であればコピーをして役人のお墓の中に入れますが、里耶古城

の古井戸にはいらなくなった行政文書の原本がそのまま投げ入れられていました。古代の人たちがどのような基準で、文書のアーカイブを残そうとしたのかはまだよく分かりません。古井戸の文書は本物ですので、大変に価値が高いです。3万8000件も出てきました(図25)。

益陽秦簡といわれる古井戸に廃棄をされた行政文書もあります(図26)。二世皇帝が自分の父の始皇帝が亡くなったことを非常に悲しんで、自分は父親の遺言を受け継いで、これから自分はリセットしてやり直すとの意気込みを語っています。『史記』にはないようなものが同時代の資料で出てきたので、古井戸に残された竹簡は、大変に重要な資料となっています。ほかにもそのような資料がたくさん出てきていて、湖南大学が購入したものもあります。北京大学では、先ほどは漢の時代の竹簡でしたが、秦の時代の竹簡も入手しました。医学書もあり、焚書の対象にはなっていなかったものです。

竹簡は、非常にきれいな形で、お墓の中で残りま

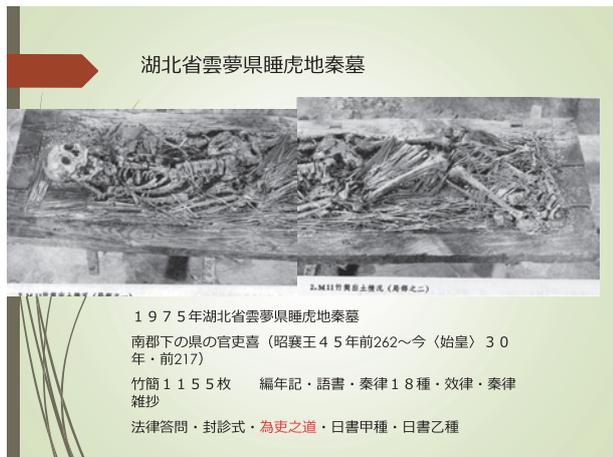


図23



図25



図24



図26

す。竹の色と炭の色は、非常によく残されています（図27）。このような書物を焚書では焼いたといいますが、焼くことが一つの政治的なパフォーマンス



図27

になるわけです。確かに地方の役人は、1カ月以内に詩や書を集めてきて、全て焼けといっていますが、これが果たしてどこまで行われたのかは、なかなか立証しがたいと思われます。一つの政治的なパフォーマンスとして、書物を焼くことがありました。これは戦時のときに敵の都市を壊滅することや、項羽が咸陽宮を焼くことによって、秦の人たちは項羽の軍隊に非常に恐れをなしたわけです。李斯が提案をした焚書も皆、戦争に協力をしるのことで、学者たちを黙らせるための一つの方策だったと考えます。今回、このテーマから私なりに振り返ってきました。まだまだ新しい資料が出ていますので、一般にいられている焚書坑儒の考え方をこれからもだいぶ改めていく必要があります。私の話は、以上です。ありがとうございました。

エジプトにおける文字記録の抹殺とアレクサンドリア大図書館の焼失

近藤 二郎 (こんどう じろう)

早稲田大学文学部 教授

皆さん、こんにちは。近藤です。私はこのテーマを与えられて、非常に困りました。副題として『人はなぜ本を焼くのか』とあるのですが、私の研究している古代オリエントや古代エジプトにおいて本を焼く行為は、具体的な形では出てきません。例えば、西アジアでは粘土板文書が書かれて、図書館に入れられています。私の親友の西アジアで発掘をしている人に話を聞くと、粘土板はもろくなっているので、焼かれたほうがしっかりと残ると言っていました。発掘のときにもろい粘土板は、わざと火を使って、固めてから取り上げるとの話を知ったので、本日はどのような形で話をしていくかで、少し困ったわけです。

人はなぜ本を焼くのかとのことで、古代エジプトではどのようなものを「本」として指すのかといいますと、パピルスの巻物です。これは『死者の書』といわれるもので、お墓の中に副葬をされるものです(図1)。図書館などにずっと保存をされていたわけではなく、個人の墓の中に副葬をされる目的で作られて、墓の中に収められていました。エジプトは、非常に乾燥をしている地域なのでよく保存されています。古代エジプトでは、紙は王家に所属をするものや、王家が独占とのことで、紙の原形がパピルスです。これはファラオの語源になっている大きな家との意味のper-aaに、定冠詞のpaを付けて、pa-per-aaといいます。それがパピルスの語源だといわれています。

パピルス自体は非常に簡便なものですが、高価なものであったので大量に作ることは、なかなか難しかったとのことです。後で話をしますが、古代エジプトの場合の正式な文字記録は、石に刻まれることが主でした。パピルス文書が実用的に使われるの



1951年、東京都杉並区生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程(考古学)満期退学。1981年～83年にかけて文部省アジア諸国等派遣留学生としてカイロ大学留学、1976年11月より早稲田大学エジプト調査隊に参加し、エジプト各地の遺跡の調査にあたる。早稲田大学文学部助手、リヴァプール大学Fellowなどを経て、現在、早稲田大学文学部考古学コース教授、同大学エジプト学研究所長。一般社団法人日本オリエント学会会長。専門はエジプト学、考古学、文化財学。主な著書に『ものの始まり50話』岩波ジュニア新書、『エジプトの考古学』同成社、『ヒエログリフを愉しむ』集英社新書、『わかってきた星座神話の起源 エジプト・ナイルの星座』誠文堂新光社。

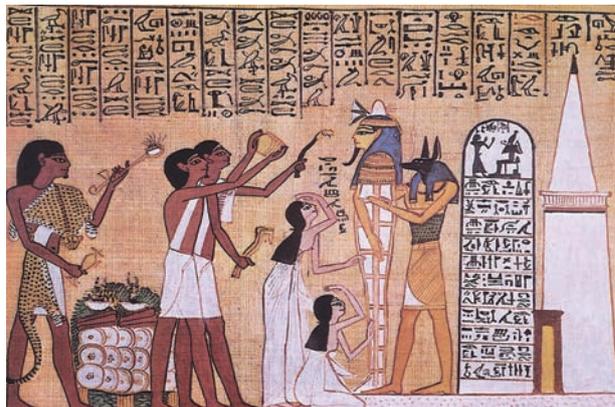


図1 フウネフェルの死者の書

は、例えば葬儀の際に神官がパピルスを持って、お墓の前で読み上げるといった一時的な目的が非常に多かったようです。有名なものとしては、イタリアのトリノにあるトリノ王名パピルスです。これは1810年代にテーベで発見されました。

発見をされた時点では、完璧なパピルスの巻物でした。その後に管理の悪さや、移送手段の問題があって、ばらばらになりました。かつてイタリア人が見つけた完璧なパピルスの巻物は、かごの中に入れて、ロバで運んでいた途中で崩壊をしたとの話が非常に流布をしました。必ずしもそうではなかったようですが、完全なパピルスが今では、この画像のような状況にあります。パピルスは耐久性に問題があり、その使用に関しては極めて消耗をして、文字が薄れることや、使用のときに写本を作って、パピルスの文書を再び修復をする。古代エジプトの書記たちは、その行為を繰り返し行っていたようです。

その点で、古代エジプトにおける文字記録は、基本的には石碑や神殿の壁面の碑文、墓の壁面に描かれたレリーフや壁画、オベリスクといわれる神殿の正面に作られた、一対の尖塔の碑文ですが、大抵が赤色花こう岩で作られています。石製の彫像などに碑文が書かれていました。基本的には、石に刻みつけるものが正式な文字資料になっています。神殿などを焼いても、文字の資料が喪失をすることはありません。

パピルス文書自体は巻物として、非常に多く写本の類いが作られています。実際に私も40年ほどエジプトで発掘をしていて、最近では運のいいことに発掘作業中に、パピルスの文書が砂の中から出てきます。大抵は小さな破片にはなっていますが、燃やされた痕跡は一切、残されていません。エジプトの中で燃やされた痕跡が出てくるものとしては、骨や木棺の部分です。それらがなぜ燃やされているかといいますと、主に近代における盗掘者が墓の中で、たいまつ代わりに燃やして、明かりにしました。実際の発掘の中で、木棺やパピルスの文書が焦げた状態で出てくることは、ほとんどありません。

パピルス自体は非常に高価なものだったので、パピルスに写すだけではなく、石灰岩のオストラコンが文字を写す写本の材料として使われていました。岩窟墓を掘っていくときに岩をくりぬいた石灰岩の断片の中で、平らで文字が書きやすいものに文字を記していました。

有名なものでは現在、イギリスの大英博物館にあるロゼッタ・ストーンがあります。これは知っているとおりですが、ナポレオン・ボナパルトのエジプト遠征の際に、西デルタのラシードで発見をされた文書です。フランス人はロゼッタと呼んでいることからこの名前になっています。

左側は、20年以上前の写真です。実は、文字に白いチョークのようなものが塗り込んであって、文字を見やすくしてあります。表面も少し塗られている状態でしたが、1999年にロゼッタ・ストーンは洗浄をされました。今までは玄武岩とのことで、バサルトと呼ばれていましたが、最近では花こう閃緑岩と呼ばれています。文字も非常に見えなくなっていますし、ガラスの中に入っているので指紋が付いて、最近はきれいに写真が撮れません。昔は、自由に触れるような展示をしていました。ロゼッタ・ストーンは、神官たちの布告を記したもので、プトレマイオス朝時代の公用語であるヒエログリフとギリシア語で書かれています。一番上が欠けています。

「ヒエログリフ」には、「聖なる・刻された文字」という意味があります。その次がデモティックで、最後がギリシア文字です。ヒエログリフとデモティックは右から左に書かれていますが、ギリシア文字は左から右に書かれています。布告の上の部分がなくなっていて、そのために真ん中のデモティックと最後のギリシア文字で解読を試みるが行われました。

エジプトの文字について少し簡単に述べていきますと、初期王朝時代に文字ができます。これはルーヴル美術館にあるゲベル・アル＝アラクといわれるプリント製のナイフです。両側には文字ではなく、図像が描かれています。左上にあるように、この図像から明らかにバビロニア風の服装をした人が描かれています。これはナイル川流域から出ていますが、両脇にライオンを従えています。裏面にはエジプト風の船と、メソポタミア風な船が描かれていますので、このような文字資料ではないものを類推することが、ずっと行われていたわけです。有名なナルメル王のパレットは、もちろん文字が設立をした後ですが、文字記録はほとんどなます鱈(ナル)とのみ鰈(メル)のナルメルとの名前ぐらいです。ここから文字をどのように見ていくかは、なかなか難しい問題です。

一番古い文字資料は、エジプトでは紀元前3100年ぐらいに出てきます。これは非常に古い100年ほ

ど前の19世紀の発掘で、後にドイツの考古学研究所が再調査をして、同じような資料を出しています。ヒエログリフは、発見の最初からその後に至るまで、ほとんどプロセスを追うことができません。くさび形文字は、時代ごとに進化をしていて、だんだんと修練されていきますが、エジプトは最初から最後まで、ほとんど同じ形態をたどっています。このような文字を使って、エジプト人はどのように文字記録を表していたかといいますと、いくつかあります。

ここでは、特に王名表といわれるものを中心として、エジプト人が歴史記録の中で、正しい王の名前すなわち、歴史の中で残すべき王の名前をどのように記録したかを見ていきます。これはアビュドスのセティ1世葬祭殿の中に刻まれた王名表です。王名表は、他にもサッカラなどで出てきます。古代エジプト人は大体、紀元前の1300年ぐらいのセティ1世や、ラメセス2世といった第19王朝の頃に王名表を作成していました。ラメセス2世の王子であるカエムワセトは、古王国時代のピラミッドの修復をしました。そこで自分たちが古代エジプト史の中で、どのような位置付けかを記録します。

この王名表について具体的に少し見ていきますと、画像にあるように順番に王の名前が出てきます(図2)。ここでは時間の関係もあるので、いくつかの部分を見ていきます。これは、12王朝の最後の部分と、18王朝の最初の部分が結び付いていますが、この約300年近くの期間が抹殺をされています。第2中間期といわれるヒクソスが活動した時代が、正式な流れの中で断絶をされています。12王朝のアメンエムハト3世とアメンエムハト4世の後は、18王朝のイアフメスの時代が始まっていると

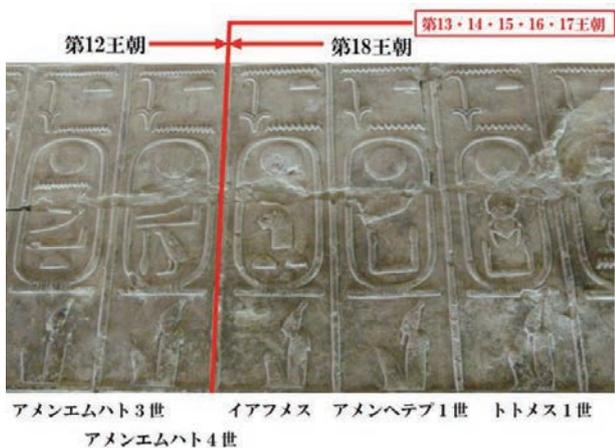


図2 アビュドス王名表(中王国・新王国時代)

なっていて、彼らの歴史観の中であってはならない時代を故意に抹殺をすることが行われています。

有名なハトシェプスト女王は、トトメス2世の妃で、トトメス3世と共同統治を行っていました。その記録もありますが、ハトシェプストの名前は完全に抹殺をされていて、トトメス2世の後にトトメス3世、アメンヘテブ2世、トトメス4世との形につながっています。アマルナ時代といわれる約30年間の時代がありますが、この30年間の時代も王名表の中では、同じように全くない時代として扱われています。実際には、アメンヘテブ3世の後にアマルナのアメンヘテブ4世であるアクエンアテンや、有名なツタンカーメンなどの何人かの王がいますが、この王名表では、アメンヘテブ3世の次の王はホルエムヘブとなっています(図3)。このようなことが行われています。

これは実際の王名表での表現ですが、カルナク・アメン大神殿へ行くと、ハトシェプスト女王のオペリスクがあります(図4)。ちょっと分かりにくいですが、この辺りで色が変わっています。上のほうが黄色になっていて、下は赤くなっています。なんで色が変わっているかといいますと、オペリスクは非常に聖なるモニュメントです。そこに書かれた文字を消して、改ざんをすることは難しいです。何をしたかといいますと、ここまでの高さの壁をオペリスクの周りに建てて、ハトシェプスト女王の名前を読めないようにしました。見えていますが、下の部分に書かれた碑文を見えないような形にすることが行われました。

その理由としては今、言ったように聖なるモニュメントの名前を全て上から消せばいいわけですが、

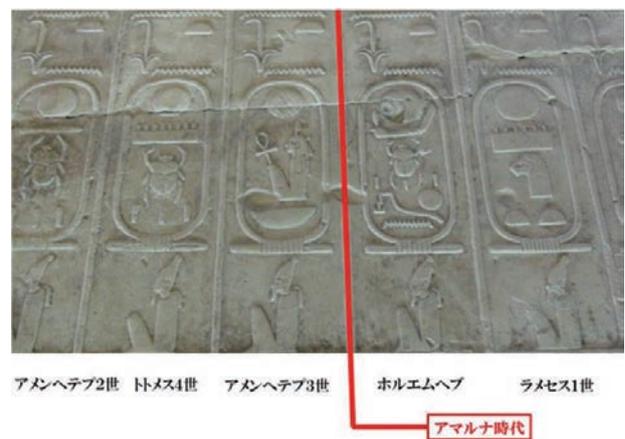


図3 アビュドス王名表(アマルナ時代)

それはせずに壁を造って、碑文を見せなくしてしましました。これもカルナク神殿の中にありますが、実際に抹殺をしたかの問題になると、非常に難しい部分が出てきます。この女王の形のままで改ざんをしているので、ここに女王の名前が書いてあって、これなどはハトシェプスト女王の即位名であるマアト・カー・ラーが分かるように削られています。アメンといわれる神の名前だけは、カルトゥーシュの中では削られています。

この女王に関する名前などの文字の部分の削ることが行われていて、完全に抹殺をしていますが、その人物が誰か分かるような形での非常に不思議な抹殺の方法をしています。同じようなものが、ここにもあります。この残っている部分は、アメンといわれる神様の名前で、「アメンに愛されしハトシェプスト」との部分削られています。ハトシェプスト女王の即位名があって、ここが全く図像びつりに削られています(図5)。研究者によっては、トトメス3世がハトシェプスト女王に対して、非常に憎しみを持っていたからといわれていますが、その実態はよく分かりません。

碑文でも神の図像は残っていますが、女王の名前や図像を故意に抹殺をする例は、いくつも見られます。このようにきれいに削っている例もあります。これがハトシェプスト女王の抹殺の問題です。もう一つは、アマルナ時代にも記録の改ざんが非常に多



図4 ハトシェプスト女王のオベリスク(カルナク)

く行われています。王の名前の中にあるアメンや、王の名前もアメンヘテプとの名前なので、名前自体も消しています。アテンの名前は船の名前として、輝くアテンといった形で残ってもあります。改ざんは、非常に徹底的に行われました。これはダハシュールにあるアメンエムハト3世の黒いピラミッドの一番上に乗っていたピラミディオンです。現在は、カイロのタハリール広場のエジプト博物館にあります。

アマルナ時代には、全国でアメンの名前を一生懸命に削ることが行われていました。多くは、アマルナ時代が終焉すると再び、アメンの名前を書き直すことが行われますが、この場合は削られたままで残ってしまいました。同じようにルクソール神殿のアメンヘテプ3世が造った部分では、王の名前とアメンの名前をずっと削って、ないものにするのがたくさん行われています。これはアメンの名前が書いてあって、「アメン・ラーに愛されしアメンヘテプ」との名前です。初期において王名のアメンは、あまりきちんと削っていません。太陽のラーは削らないで、神の名前であるアメンだけを削ってました(図6)。

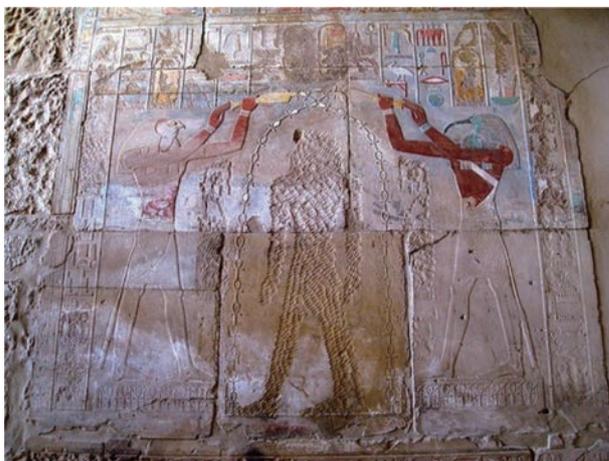


図5 削られたハトシェプスト女王レリーフ(カルナク)



図6 アメン神の名前だけ抹殺

後になると、アメンヘテブ・ヘカ・ワセトといわれる、「アメンヘテブ・テーベの支配者という意味の名前」全体を削っていくようになります。徐々に抹殺の部分が変わってきています。具体的に実際に抹殺をされたものが、どのような形であったのかを大英博物館にあるサッカラの王名表で、少し見ていきます。先ほどのアビュドスの王名表でもありましたが、アメンヘテブ3世からホルエムヘブの間にアマルナ時代が入ります。これはセティ1世の次のラメセス2世の時代に造られました。古代エジプトでは、王の系譜と残すべき王の名前の系譜が、19王朝のラメセス2世時代に積極的に再構成をされていたことが分かります。

先ほどのトリノの王名パピリスといわれる王名を書いたパピリスも、もともとはラメセス2世の時代に作成されたものだといわれています。何人の王が歴史の中で好ましくないと除かれたかといえますと、アメンヘテブ3世の次にホルエムヘブ王がきますが、ここに私たちがよく知っているアクエンアテンやツタンカーメン、アイが入ります。これはカイロのエジプト博物館にある木棺ですが、誰のものか分かっていません。なぜかといえますと、名前が削られているからです。さらに、ツタンカーメンの時代の前に、女性のファラオがいたことも分かっています。

この王像はツタンカーメンの王墓の中から出てきますが、実際の名前は削られているので分かりません。明らかに他の王像と比べると、女性の支配者がツタンカーメン以前にいたことは分かっています。近年では、その人物がアクエンアテンの王妃であったネフェルトイティ（ネフェルティティ）ではないかといわれています。かつては、娘のメリトアテンが候補に挙がっていたことがあります。エジプトでは、本を焼く行為はほとんどありませんでした。王名表から抹殺をすることとともに、大きなことがもう一つあります。

これはカイロのエジプト博物館の建物の外側に置かれている、アクエンアテンの石棺です（図7）。アマルナに建設をされたアクエンアテンの王墓に安置をされていた赤色花こう岩製です。カイロのエジプト博物館には、非常に重要な資料にも何の案内パネルはなく、自分で探さなくてはなりません。アマルナにあったアクエンアテン関係の資料の多くは、木っ端みじんといいますが、この棺もまた全てたたき壊しています。

これなどもきちんと説明パネルを書いて、アマルナにあった王のお棺であることを示す必要があります。同じようにヒクソス時代の王の記録も、多くが抹殺や破壊行為を受けているので、先ほどの王名表の中にも名前はありません。そのようなことが繰り返し行われています。これが本を焼くといいますが、記録を抹消することはどういうことなのかの答えとして、一つあると考えています。王家の谷で発見をされたアクエンアテンのものと推定される木棺があります。これは王の名前が書いてある所だけをきれいに切り取っていて、誰のものなのかはよく分かりません。

かつては、この王がスメンクカーラーと呼ばれる王ではないかといわれていました。この木棺の下の部分は、ドイツのベルリンのエジプト博物館からエジプト政府に返却をして、今はカイロに展示をされています。このように王の名前が書いてある所だけを切り抜くわけですが、これは見ても分かるように木棺が使われています。それこそ火を付けて、燃やしてしまえば残らないわけですが、結果的には名前の部分だけを切り取って、この王様が誰なのかを分からないようにしています。たたき壊しているわけでもなく、この場合は火を付けたわけでもありません。

アマルナ時代が終わると、今度はアマルナに関係をした王であるアクエンアテンと、王妃のネフェルトイティの図像が抹殺をされています。削除の痕跡が残っていました。アメンヘテブの名前は、ここではきちんと残っていますが、そのほかのアクエンアテンやアテンに関する名前が全て抹殺をされるようになります。アマルナ時代が始まる時には、アメンの名前を消して、アマルナ時代が終わるとアテン



図7 アクエンアテン王の石棺(カイロ・エジプト博物館)

の名前を消していきます。なぜ、それがまだ残っているかについては、何ともいえません。これはアマルナ時代が終わって、それほど時間が経っていないときに名前だけを消したのではないのでしょうか。その後になると、そこも削ることや壊すことになっています。

同じようにツタンカーメン王は、1922年にエジプトで発見されました。それは王墓が発見されたことで、その存在が明らかになりました。今、言ったようにアマルナ時代の王は全てないものになっているので、ツタンカーメンの名前や、ツタンカーメンの名前を記した彫像や記録は一切、書き換えや抹消をされる仕組みになっています。これは像ですが、エジプトでは彫像にしてもレリーフにしても、その人物の特徴をよく表す形で表現が行われています。

この場合にツタンカーメンの名前はありますが、ルクソール神殿列柱廊のオペトの大祭を描いたレリーフのツタンカーメンの王名がホルエムヘブの名前に書き換えられています。アメンヘテプ3世とホルエムヘブとの間にツタンカーメンも入れて、4人か5人の王たちの存在が知られています。その間をないものにしてしまったために、ホルエムヘブといわれる元将軍の王は中抜きといえますか、抹殺をした王たちの治世の約30年間を彼の治世に加えています。

そのほかにもさまざまな問題点が、たくさんあります。アメンヘテプ3世自身は、何故、王名表にあり名前が削除されなかったのか、息子のアメンヘテプ4世との間で共同統治があったのか、なかったのかという問題が議論されています。共同統治がなかったと主張する人たちは、王名表にアメンヘテプ3世の名前があることを理由として、共同統治はなかったとしています。

最後にアレクサンドリア大図書館の創設から焼失までと、アレクサンドリア大図書館の果たした役割に関して、簡単に説明します。私は専門が古代エジプト史なので、プトレマイオス朝時代以降のものに関しては、それほど詳しいコメントはできません。

アレクサンドリア大図書館は、実はプトレマイオス2世が創設をしたといわれています。かつては、アレクサンドリアの町自体がアレクサンドロス大王の名前を取って、プトレマイオス1世とプトレマイオス2世の下でつくられていきました。アレクサンドリア大図書館は、プトレマイオス2世が基礎を築

いて、この時代に集められた文字資料を使うことによって、マネトンのエジプト史などの歴史的な文献が作られました。アレクサンドリアは、この当時はプトレマイオス朝の王都で、初めてナイル川に面していない王都でした。

地中海世界の中心都市として、多くの船舶が入港をしていて、アレクサンドリアの港に入ってくる船の持っている書物を全て没収していました。オリジナルは図書館に入れて、持ち主には写本は作って、返すといった非常に手荒な方法で短期間のうちに、ものすごい数の文字資料を収集しました。その後、プトレマイオス8世が、アレクサンドリアから学者たちを追放したことで大図書館は衰退していったと言われています。

クレオパトラの時代までプトレマイオス朝は続きますが、一説には例えば、小セネカやプルタルコスが書いているように、紀元前48年にユリウス・カエサルが自らの船に放火をして、その火災が町全体を覆いました。それによって大図書館も焼失をしたとの記録をいくつか見ることができます。

その後、30年弱に『地理誌』を書いたストラボンの記述に、アレクサンドリア大図書館の記述があります。あまり詳細ではないので、その価値や規模が小さくなった可能性があります。一度に焼失をしたわけではなく、この図書館は紀元後4～5世紀の町の消失とともに、またはアレクサンドリアの町が求心性を失って、文化の伝導がなくなってきたときに消失をしていったのではないのでしょうか。もう一つは、アレクサンドリア大図書館の消失は、ある意味では古代の知が喪失をしたものであって、古代世界が終焉を迎えたときに消失が起こったと考えています。

現在、アレクサンドリアには新しい図書館が再建をされていますが、場所の問題は非常に難しいです。ストラボンが『地理誌』の中に書いているセーマ (Sema) と呼ばれているプトレマイオス朝の墓域が一つも見つかっていません。プトレマイオス1世から、クレオパトラの息子である15人のプトレマイオスのお墓は、一つも見つかっていません。アレクサンドロス大王の埋葬やクレオパトラの埋葬なども見つかっていないので、今後、アレクサンドリア大図書館やその他の場所が見つかっていくとなると、だいたひ話が変わってくる可能性があります。非常に雑ばくな話で、とりとめもありませんでしたが、時間なので終わります。どうもありがとうございました。

ユーゴ内戦時の文化遺産の破壊 —サラエヴォ図書館、コソボの 教会堂などを例として—

鐸木 道剛 (すずき みちたか)
東北学院大学文学部 教授

東北学院大学の鐸木です。よろしくお願い致します。今回のシンポジウムの題名は、なかなかキャッチーです。意図的な破壊とのことで、意図的な破壊を肯定するのか、と思わせます。しかし副題を見て、やはり焼くこと、つまり破壊は許されないとの問題意識を感じさせます。今回、僕の役割はユーゴスラビアの話です。そこに期待をして来られたユーゴスラビア関係やセルビア関係の方もいるかもしれませんが、それについてはあまり話しません。例を出します。

それよりも最初に山内先生が言ったことが重要です。いろいろと破壊の例を出すのは簡単ですが、果たしてなぜ本を焼くのか。というよりはむしろ、なぜ焼いてはいけないのか。その問題を考えることが必要です。文化遺産について、今までにさまざまなシンポジウムがあったようですが、文化遺産を守るべきということは「自明の前提」になっています。果たして、本当にそうでしょうか。われわれの周囲を見ると、そうではありません。インテリは別です。インテリは西洋的な教養を持っているので、文化財は守るべきであると言います。今回、まずはそのような例を見せます。

その前に課題なので、ユーゴスラビアの話をしします。僕は1976年からユーゴスラビアに行っていて、当時はまだチトーの時代でした。チトーが亡くなって、ユーゴスラビア内部で対立が深まり、クロアチアの観光名所でもあるドゥブロヴニクが砲撃されました。インターネットで見たら地図が出ていて、色分けがされていました。ドゥブロヴニク砲撃は、セルビアがしたのかもしれませんが、これを言いだすといろいろと議論になるので言いません。



1950年大阪生まれ。1974年東京大学文学部美術史学科卒。ベオグラード大学哲学部美術史学科留学を経て、1980年に東京大学大学院博士課程中退、岡山大学助手。2016年岡山大学教授定年退職を経て現職。専門は、セルビアのビザンティン美術史、イコンとアイドルについての諸問題。1994年辻莊一・三浦アンナ記念賞、2011年セルビア国旗勲章第三等級章を受ける。著書に『イコン：ビザンティン世界からロシア、日本へ』（毎日新聞社、1993年）、『山下りん研究』（岡山大学文学部叢書、2013年）などがある。

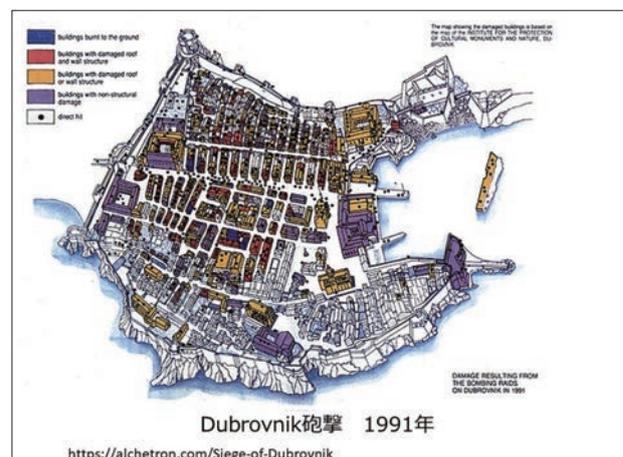


図1

ドゥブロヴニクの例ですが、徹底的に壊された建物、屋根と壁が破壊された建物、屋根が残っている建物というふうに地図に色分けがしてあります(図1)。これはインターネットに出ていますので、関心のある方は見てください。

もう一つは、ボスニアのモスタルの橋が壊されました(図2)。この画像はインターネットから取りましたが、僕は壊される前の写真を撮っています。それから今回の表題でもあるサラエヴォの国立図書館です(図3)。サラエヴォ国立図書館はヴィエチニツァ(Vijećnica)といわれますが、もともとは図書館ではなく公会堂でした。カレル・パルジークといわれるチェコ人が設計していて、図書館になるのは1949年です。これが1992年に破壊されました。誰が破壊したかは、やはりそれぞれの見解もあるので問いません。

それが2014年に再建され再開されました。再開した2014年5月9日には、大々的にお祝いされまし



図2



図3

た。この建築は、そもそも非常に面白いです。サラエヴォ国立図書館はチェコ人のカレル・パルジークの設計ですが、広島原爆ドームもまたヤン・レッツェルといわれるチェコ人が設計しました。右上は原爆ドームで、左は壊される前の原爆ドームです。このヤン・レッツェルは、同じチェコ人のヤン・コチェラという、ハンガリーのエデン・レヒネルと並ぶユーグント・シュティール氏の非常に面白い建築家の下で学んでいた学生でした。レッツェルはダルマチア、モンテネグロ、ヘルツェゴビナを訪問しているので、この図書館を見ているはずですが、僕は建築の専門家ではありませんが、2人とも外国で活躍するチェコ人建築家です。それは偶然ではないのかもしれませんが、両者ともに原爆ドームとして壊され、サラエヴォでも壊されたとのこととなります。ユーゴスラビア関係は以上です。

それよりも図書館の問題です。これは、僕が学生時代に手に入れた本です。この本の表紙の写真は憧れで、このような所に住みたいといいたく、勉強をしたいと思います。中身は、文学の名所ガイドです。調べてみると、この写真はディズレーリの書斎でした(図4)。これはインターネットでも出てきますし、公開され観光で訪ねることもできるようです。

このような図書館を壊すことは、記憶の破壊、そして文化の蓄積の破壊です。これは自明なことです。他にもいろいろな理由があるでしょうけれども、そこは細かい違いです。図書館とは文化の蓄積で歴史そのものです。例えば、これはギリシアのアトスのゾーグラフ修道院の図書室です。今は蔵書整理中なので、番号を付けて文化の蓄積が行われてい



図4

ます。一番印象深いのは、大英図書館です(図5)。僕は使ったことはありませんが、昔、マルクスが使ったとのことで、これが理想の図書館といえますか、憧れでしょう。僕のいる東北学院の学生にこの話をすると、今は本を読まない学生も多いのですが、興味があるとのことで、案外反応をしてくれます。

もう一つは、中学生時代に見た映画の『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授の書齋です。これも憧れです。吹き抜けの部屋で、言語学の教授なので、たくさん本を持っています。若い人もいますので、もっと最近の映画を例に挙げますと『美女と野獣』です。ベルは、本が好きな変わった女の子として登場します。野獣に捕まってしまうのですが、野獣は優しいので、だんだんと仲良くなっていきます。あるとき、野獣の城の中の図書館を見せてもらう場面があります。これは感動的な場面なので、ぜひとも見てください。彼女は図書館に入ると驚いて、呆然とします。そこで野獣が「大丈夫(Are you all right)?」と聞きます。その後もベルは感動のあまり「きゃっ」と言うわけです。これは素晴らしいです。ここも学生に見せると、分かると言ってくれるので、今の若い人も捨てたものではありません。もう一つは、大英図書館を模倣したもので、秋田国際大学の有名な中嶋先生を記念した中嶋記念図書館です。僕の大学は仙台にありますので、学生も割と知っています。このように歴史と知識の蓄積である本に囲まれた空間は憧れです。

その最高の例が、こちらです(図6)。これは博物館ではありますが、作家の司馬遼太郎先生がこれだけの本を所蔵していたとのことです。一応は、上

まで上がれるような形になっています。このようなものに憧れて、実際に僕の友達で天井の高い書庫をつくった人がいます。素晴らしいのですが、実は年を取ると使いにくくなります。はしごが怖くて仕方ないと言っています。手の届く所に本を集めないと書庫としては実用ではないと、だんだんと気付くようになってきました。この司馬遼太郎記念館は安藤忠雄の設計で、素晴らしいです。館内に亡霊が現れたと言われ、屋根のコンクリートに「しみ」が出てきました(図7)。坂本龍馬の亡霊、あの有名な写真と同じ角度です。司馬遼太郎は『竜馬がゆく』で有名なので、坂本龍馬が感謝を込めて出てきたとインターネットにも出ていたので、僕はすぐさま見に行きました。コンクリートのしみは消えないらしいので、今でも見られます。この問題は、後にも繋がっています。

仙台の隣の多賀城市が市立図書館をつくりました。手前側を蔦屋書店が経営をしていて、いろいろ

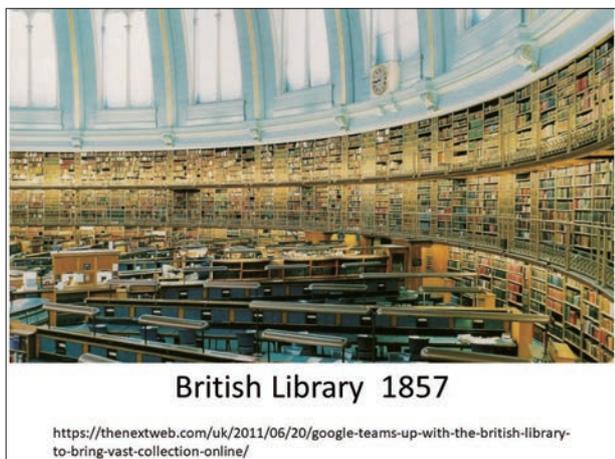


図5



図6



図7

と問題があると言われていて、高い所に本を置いていますが、全て偽物で空っぽの箱だけで、これは相当に問題含みです。手前は売り場だからまだいいとしても、実際の図書館の中に行くと上から2段目に空っぽの箱が並んでいます。1段目は家庭用の料理や手芸の本で埋まっています。古典は入りませんが、しかしいずれは埋まるのではないのでしょうか。今は埋まらないので、空っぽの箱で埋めているということかもしれません。しかしともかく重厚な図書が蓄積された図書館への憧れは蔦屋書店にもあるわけです。次は和辻先生の書庫です。手の届く所に本がある実用的な書庫を持っていて和辻先生は偉いです。今、言ったように、図書館は歴史と知識の蓄積、文化と記憶の場所です。それがどうして重要か、初めにも申し上げましたように、だいたい「マター・オブ・ファクト（自明の前提）」ということで話が進みます。しかし考えてみると案外そうでもありません。

このことが広く議論され始めたのは2001年の9.11（アメリカ同時多発テロ事件）です。9.11をきっかけに、2002年にドイツのカールスルーエで「イコノクラッシュ（Iconoclasm: Beyond the Image Wars in Science, Religion and Art）」という大きな展覧会が開かれました。これは美術史研究においては、非常に重要な展覧会です。「イコン」とは正教会で大切にされている「聖像」のこと、美術史用語で物質文化を指します。「イコノクラッシュ」とは「物質文化の尊重」と「物質文化の破壊」との衝突の意味です。厚いカタログが出ています。2003年には、9.11で壊された貿易センタービルの写真を表紙にした論文集も出ていて、モニュメントの意味をもう一度、考え直しています（Nelson/Olin, *Monuments and Memory, Made and Unmade*, Chicago, 2003）。日本でも議論はその前からあったでしょうが、やはり2011年の3.11（東日本大震災）がきっかけです。

少し宣伝をさせていただくと、わが東北学院は東日本大震災を経験して、その後研究会を立ち上げ、『震災学』という雑誌をずっと出しています。前書きや発行の言葉には、震災学を通じて破壊についてもう一回考えようということがあります。破壊はマイナスですが、それはどういうことなのかをもう一回考え直す研究会を、2011年以降ずっと行っていて、『震災学』も13冊出しています。毎年数回、ゲストスピーカーを呼んで講演会やシンポジウムを行っているので、

機会があれば来てください。

僕が東北学院に勤務し始めたのは4年前ですが、その年の震災学のシンポジウムでも、人文学がいかに関に立たないか、学問をもっと現場にさらさねばならないということが言われていました。未曾有の出来事とよくいわれますが、ならば未曾有の物言いが必要ということを書家の畠山直哉さんと哲学の鷲田清一さんも書いています。本日が未曾有の物言いの機会かもしれません。

未曾有の物言いが可能か。まずは具体的な例を挙げましょう。われわれが、いかに文化財保護に関心か。ここにいる皆さんは文化財保護に熱心でしょうけれども、現実を見ると、文化財に指定されたものは守りますが、その指定がされていないものはことごとく破壊されるのです。

例えば大阪の中央郵便局です。吉田鉄郎という非常に重要な建築家が設計をしました。これは撤去に対して反対運動があったので、インターネットにもかなり載っています。重要文化財にして保存しようとの記事が出て、国に指定を求めて提訴と書かれています。訴訟をしたら却下をされて、訴える資格はなしとの記事も出ました。それに関するシンポジウムも開かれました。亡くなられましたけれども、日本近代建築史の大家である鈴木博之先生を中心にして頑張りましたが、やはり駄目でした。壊されて、下の写真にあるように空き地になってしまいました。上が壊される前の写真です。下はその後で、建物の入り口だけは辛うじて残すとのことで、箱で覆っていますが、全体は破壊されました。

このような重要な建築でなくても、われわれの日常の記憶はことごとく抹殺されます。これは仙台の華僑会館です（**図8**）。大したものではないのでしょうけれども、昭和の初めの建築なのでしょう。これは本年の春に気が付いたら消滅していました（**図9**）。変わった建築ですが、このところは誰も使っていないようでした。しかし壊す必要はありませんでした。いつもながら、残していると誰かが怪我をするだろうとのことで行政側が壊して、今は完全な更地です。

他には、仙台にある魯迅が住んでいたとされる下宿、その下宿そのものではありませんが、その大家さんの家が残っていました（**図10**）。それも本年の5月8日に破壊されました（**図11**）。壊される前のものは4月19日に撮った写真です。予告がされてい

たので写真を撮りました。今はもうなくなっています。このように身近なものは、本当に破壊されます。僕は1970年代に池袋の南の千登世橋近くに住んでいましたが今行くと、ほとんど全ての建物は建て替えられ、50年前と同じなのは、ほとんど道筋だけです。これが現実で、文化財保護が大事だと言いながらも言っているだけで実際は歴史の破壊、記憶の破壊が常です。文化財保護が重要だと言うのは西洋的なインテリだけなのです。西洋的なインテリ、つまりこれはキリスト教的物質観であることは後で説明します。

もう一つ、僕は岡山大学にいたので、岡山で非常に重要な庭園の例を挙げましょう。東湖園は岡山県最古の日本庭園の一つです。何回か行ったことがあります。これが2013年に閉園して、2015年の5月20日に行ってみると、池も埋められ、もう完全になくなっていました。マンションが造られるとのことです。これについては地元の人たちは皆、最初

から諦めていて、反対運動も起こっていません。地元の人に聞くと、あの土塀の所に亡霊が出たとのこと。幽霊が出る怖い場所だったので、なくなってよかったと言うことなのでしょう。このことが問題の本質に触れることとなります。

日本では、「もの」には付喪神が付くと考えられています。「陰陽雑記に云う、器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす。これを付喪神と号す。」100年経つと「もの」には精霊が付いて、それが人の心をたぶらかします。百鬼夜行です。これは室町時代から非常に有名で、よく引用されます。早くも三島由紀夫は1956年の小説『金閣寺』のなかで引用しています。江戸時代の画家である伊藤若冲は絵に描いていて、物に目鼻を付けています(図12)。ここで言う100年に意味はありません。使つてすぐにどれでも命が付きます。これが偶像なのです。この後にアイコン論の話をしてします。それとの対比で偶像論が非常に興味深い、と言うか、偶像



図8



図9



図10



図11

こそわれわれの日常の感受性そのものなのです。

筆塚などもあって(図13)、ものは単に捨ててはならず、供養をしないと収まりません。その中でも針供養は有名です。これは和歌山の淡島神社です。このような感受性が、われわれの日常の中にあります。それはインテリの人にも、実はあるはずです。古い話かといいますと、そうではありません。これは久志塚(櫛塚)といわれるもので、京都の美容院の人たちが昭和36年に作りしました(図14)。これらは廃れていくものではなく、むしろ人形供養は盛んになっています。われわれの感受性は、「もの」に命を付与します。つまりアニミズムの感受性です。

アニミズムといいますが、これは厳密に理解しておかねばなりません。エドワード・バーネット・タイラーのいうアニミズムです。アニマ(氣息)とはいうものの、スピリットがあるとのことです。これはタイラーがアニミズムという言葉を作ったときに、『原始文化』の中できちんと書いています。そ

れはスピリチュアリズムの意味で、物にスピリットが宿るとのことで、アニミズムとの言葉を使っています。スピリチュアリズムは当時、降霊術を意味し、ヴィクトリア朝のイギリスでよく使われていた用語なので避けたわけです。

このアニミズムの感受性が如実に表れているのは更地です。この数年、更地研究をしているのですが、更地こそわれわれの感受性をよく表しています。一番新しい自分の家の近くの更地を撮ってきました。更地とは家だけではなく、植わっている樹木も全て無くします。このようなことをなぜするのかといいますと、そうしないと売れないからです。なんで売れないかといいますと、「もの」が残ると命がこもるからです。前の人の怨念ではないかもしれませんが、気持ちがかもっています。ショッキングだったのは、大阪の南の堺の南海電鉄沿いの広大な更地です。今ここにはもうイオンの商業施設が建っていますが、元はセルロイドのダイセルの工場があったとのことです。今の状態が右で、レンガ造りの建物を一つだけ残してあとはもう何もありません。かつての工場にはレンガ造りの建物が四つありました。これはインターネットに写真が出ています。この右端の一つだけ残して、建物の前の木も100年経って大きくなっていますが、全て抜根されました。このようなことをなぜするのかといいますと、先ほどのアニミスティックな感受性の裏返しです。僕は、更地の例を授業でもたくさん使い、学生にレポートで更地の写真を1枚出しなさいと指示して集めました。

岡山大学にいたので、岡山の例が多いです。これはクラボウの跡地で、今は病院になっています。こ



図12



図13



図14

の更地の感受性について、われわれは考えなければなりません。その中で最高の更地は、こちらです（図15）。足跡が残っていません。1人だけ歩いた跡がありますが、足跡もない完璧な更地です。箒で向こうから掃きながら後ろ向きに歩いて道に出たのではないのでしょうか。ここまでするのはなぜでしょうか。ほとんど宗教的な営みと僕は感じます。完璧な無です。この業者の人に話を聞きたいです。この辺りで今も更地をつくっているの、今度、岡山に帰ったときに見つけたら業者の人を訪ねようと思っています。見事な更地です。これが、われわれの日常での感受性なのです。

僕は、これは禅寺などの砂紋とほとんど同じ行為だと考えています。禅寺の宗教的な行為です。この何もない所が素晴らしいと感じる（近代から見ると）恐ろしい感受性が日本にはあるのです。坂口安吾が『日本文化私観』で言う「無きに如かざるの精



2015/10/15撮影 岡山市津高

図15



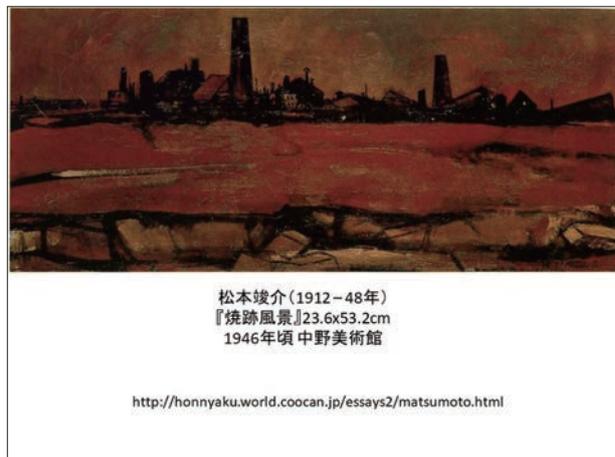
坂口安吾 (1906-55)
1946年2月、蒲田区安方町の自宅二階にて 撮影：林忠彦
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/dc/Sakaguchi_ango.jpg

図16

神」です。何もないのがいいとのことですが、恐ろしいです。この精神がわれわれ、そして自分の中にもあることを、一応は、近代人のつもりの僕自身が気付きます。例はたくさんありますが、特に戦争中の空襲の後です。坂口安吾の『墮落論』の中に「麴町のあらゆる邸宅が嘘のように消え失せて余燼をたてており……爆撃直後の罹災者達の行進は虚脱や放心と種類の全く違った驚くべき充満と重量をもつ無心であり、素直な運命の子供であった」とあり、さらに「彼女達の笑顔は爽やかだった」とあって、非常にプラスに考えています。この写真は坂口安吾の書斎の有名な写真です（図16）。これは先ほどのヒギンズ先生の書斎と比べると、大変に違います。何もありません。

僕は美術史家なので、もうひとつ、画家の松本竣介を例に挙げます。彼が戦後すぐに書いている『残骸東京』といわれる短いエッセーがあります。その中で「その下で失われた諸々の、美しい命、愛すべき命に祈ることになしには口にすべきではないだらう」とありますが（それは当然のこと）、「だが、東京や横浜の、一切の夾雑物を焼き払ってしまった直後の街は、極限的な美しさであつた」とのことで、これが更地の美学です。実際に更地を見つけたときに、僕も正直、すがすがしい気持ちになります。知っている建築が壊されると歴史の破壊に憤りますが、大体の更地は前に何があったか気が付きません。空っぽの所にすがすがしさを感じます。

松本竣介は破壊された町、つまり極限的な美しさの絵を何枚も描いています（図17）。スケッチし、油彩画の完成作は1946年となっており、さまざまな焼け跡の絵を描いています。1枚だけはモノク



松本竣介 (1912-48年)
『焼跡風景』23.6x53.2cm
1946年頃 中野美術館

<http://honnyaku.world.cocacn.jp/essays2/matsumoto.html>

図17

ロームの図版しかありません。スーザン・ソントグは『写真論』の中で、写真を撮ること（絵を描くことも同じ）はそこに美を発見していると言っています。醜いものは誰も絵に描きません。美しいとか醜いとは言わなくても、とにかく肯定的に評価するからこそ絵を描くわけです。松本竣介は、この廃虚を肯定的なものとして見えています。その感受性に対して、「もの」を立ち上げていく思想、歴史と記憶を肯定する思想、これが文化財保護の思想です。それはどこにあるか。僕が研究しているイコン（聖像）論にその答えがあります。

イコンは非常に美しい。美しいですが、朽ちていくものです。これはセルビアのイコンです（図18）。中世セルビアの13世紀と14世紀には、ビザンチン世界の中で最も美しい美術があります。イコンも単なる「もの」です。横から見ると手あかが付いて汚いものですが（図19）、非常に美しいです。この汚いものや朽ちていくものは、どうせ消滅をします。それを美しいとする根拠は何なのかといいますと物質肯定です。これはキリスト教の教義にきちんと根拠があります。それはエジプトから旧約を経て新約で実現する世界観です。

まずは、どこから始まったかといいますと、エジプトのアニミズムを否定することです。『旧約聖書』のテキストを見ると、物が生きていないことを徹底的に書いています。『詩篇』の中に「国々の偶像は金銀にすぎず、人間の手が造ったもの。口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかぐことができない。手があってもつかめず、足があっても歩けず、喉があっても声を出せない」（115篇）とあり、『知恵の

書』には「何の役にも立たないねじ曲がった、節目だらけの木片を注意深く彫って造りあげた木像は、自分では何もできず、像にすぎないので、魂がない」とあります（13章）。

他にも例はいくらでも出せますが、いかに人の形をしてリアルであっても、そこに命の息は全くないので、単なるものであるといっています。「十戒」でも像を造るなどというのはどういうことかといいますと、像を造ると人間は拝んでしまうからです。これはドイツの古典主義者ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーが『彫塑』の中で書いています。「イスラエルの神は、その感覚的な民族を形象や立像から十分に守ることができなかつた。いったん像ができてしまえば、彼らの感覚に生命を付与する霊が生まれて、偶像崇拜を避けられなかつた」。それがあって、ユダヤの民はヤハウェから頻りに叱られています。ソロモンですら、晩年は偶像崇拜をしたと書いてあります。

「もの」に命がない、生きているのは神のみなのです。見えるものは神ではなく、見えるものは単なる「もの」であり、被造物である、そしてそれをつくった神は見えないという対比です。見えるもの、それは朽ちていきます。見えない神という神観念は『旧約聖書』をみると、いろいろところで出てきます。『新約聖書』にもあります。いろいろと例がある中で作曲家のシェーンベルクのオペラ『モーセとアロン』の冒頭のテキストが一番素晴らしいものです。「唯一、永遠、偏在、不可視、表象不可能な神（Einzig, ewiger, allgegenwärtiger, unsichtbarer und unvollstättbarer Gott）！」なのです。それに対して、われわれの物質世界は単な



図18



図19

る「もの」です。しかし『新約聖書』は、イエス・キリストは人なので、神が見えるといいます。『旧約聖書』から『新約聖書』へのプロセスとは、見えない神から見える神へのプロセスなのです。

神が人となったことは「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」（「ヨハネによる福音書」1章）というふうに『新約聖書』の中できちんと言明されています。それを神の受肉といいます。キリスト教の伝える福音は、まさにこの受肉によるのです。朽ちていく「もの」は命がないですが、神がその「もの」となったのです。それによって受肉した神の肖像画が可能となります。それがイコンの成立です。451年のカルケドンの公会議でいう、イエス・キリストは人であると同時に神である。これは矛盾していてナンセンスです。2世紀から3世紀の教父テルトゥリアヌスはそれを「不合理ゆえにわれ信ぜず」と言いました。

受肉ゆえに「もの」の世界と神の世界がつながって、「もの」の世界に意味が付与されます。朽ちていくものですが、永遠につながるのです。これは「神化」あるいは「聖化」といって、近代の物質文明を支えています（図20）。受肉による神化のプロセスについての考えは、ビザンチン神学のアタナシオスからプロテスタントのマルティン・ルター（「喜ばしき交換」『キリスト者の自由』）まで共通しています。このような形で一度旧約聖書によって、まず世界は「もの」であるとされたうえで、そしてキリスト教によって、世界は「もの」であるにもかかわらず、永遠に通じるのです。これが物質の「聖化」あるいは「神化」で、キリスト教楽観主義です。さまざまな形で、現実世界は既に神の国なのであり、

それは「実現された終末論」（波多野精一、チャールズ・ドッド）として聖書学でもいわれています。神学者のトレルチがプロテスタンティズムにおける現世肯定（Weltbejahung）は、最も峻厳な罪觀念すなわち旧約聖書を前提としていていると書いています（『ルネサンスと宗教改革』）。旧約聖書を経ての新約聖書という歴史的なプロセスが重要なのです。

しかしわれわれ日本人には、世界は「もの」であるという認識がありません。そもそも『旧約聖書』がないからです。中村雄二郎先生がものすごく時間をかけて、「世界はマテリアルなものであって、それとの格闘こそ芸術のみならず、思想や学問の要点である。そこに気付いたときに高田博厚と出会った」と書いておられます（「高田博厚氏との出会い」高田博厚『薔薇窓から』1972年所載）。高田博厚は高村光太郎と同じくロダンの弟子で、森有正と同じく西洋の物質観と格闘した人です。ブロンズの彫刻は、命のない「もの」だから、やはり朽ちていきます。しかしその「もの」は朽ちていくのですが、神にあるいは永遠に通じています。これがイコンの成立すなわち芸術の成立です。

もう一度、このプロセスを説明すると、エジプトは非常に素朴な物質肯定です。それが一度、旧約聖書によって否定され、然るのちに新約聖書によって再び肯定されます。それが近代のプロセスです。これは予稿集に書きましたけれども、マックス・ヴェーバーは、魔術の否定のプロセスは、ユダヤの預言者に始まって、プロテスタンティズムにおいて完成するといっています（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）。

日本のことを考えるとよく似たことがあります。日本思想史の家永三郎は『日本思想史における否定の論理』の中で「鎌倉仏教が深刻なる絶望に打ち勝って絶対肯定を快復した経過・・・中世はかかる絶対否定の上に築かれた絶対肯定を基調とする時代であった」と言っています。この根拠は、「絶対否定が其の儘に絶対肯定と相即する輝かしき天地」であり、それは親鸞や道元を見ると分かるとのことでした。これが日本における物質肯定の論理です。実際に鎌倉時代の仏像を見ると、聖なる木の一木造りではなく、寄せ木造りで、完全に「もの」として造っています。このようなものを秘仏にしてはいけません。しかし実際には秘仏にしてしまいます。

鎌倉時代の「もの」としての仏像に対して、「も

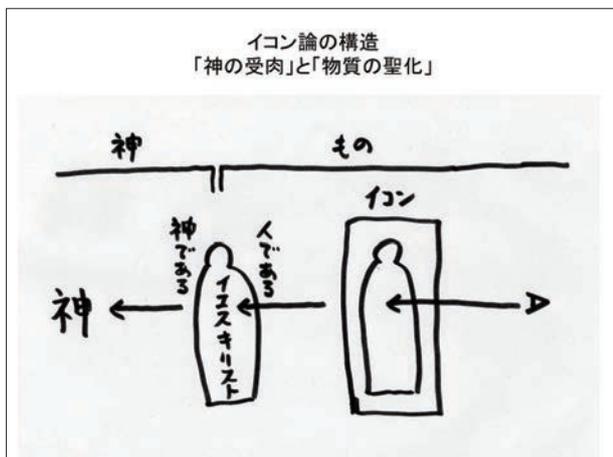


図20

の」に命があるのは、かろうじて人の形が分かるような仏様です。ここに技術つまり「アート (art)」は不要です。人の形になっていなくても拝みます。このような生きた偶像ではなく、完全に「もの」として作った彫刻は、鎌倉時代の運慶と快慶の時代にあります。例えば、慶派の仏師の手になる『訶梨帝母倚像』は素晴らしい出来です。これは今、滋賀県の三井寺宝物館で展示されています。普通は秘仏にしていますが、こういうものは秘仏にするものではありません。これは作った人が、「もの」として作っているからです。水子供養の仏様は拝むもので、それ自身が生きています。『訶梨帝母倚像』は単なる「もの」です。特に鎌倉時代はそのような物質観があります。この『訶梨帝母倚像』はミケランジェロのピエタに匹敵する名作であると思っています。

家永三郎はもう一つ、同じ論文の中で、わびの美意識を説明しています。「一般人に於いて否定せらるべきものがワビ人にとっては其の儘肯定せられると云ふ特殊の心境」、すなわち一般人によって否定をされるものを、わび人はそのまま肯定する。これは素人ながら、わびさびの美学の最も見事な説明だと思えます。備前焼の焼き物を見てみましょう (図21)。このようなものは一般的には汚いものでしかありません。僕自身29歳のときは、その良さは分かりませんでした。汚ければ汚いままでいいのかと思ったりしましたが、実はこれが美しい。一般人あるいは子供の素朴な感受性では否定をされるものが、そのまま肯定をされていると家永三郎先生がいう、そのような例だろうと思えます。

この根拠は家永三郎によると、前述したように、絶対否定はそのまま絶対肯定に転じるとのことです



図21

が、キリスト教では受肉が媒介します。受肉によって、否定から肯定に変わる、仏教では本地垂迹がそれにあたります。欧米の人たちは、本地垂迹についてもすごく研究をしています。日本における物質文化の根拠は、ここにあるのではないかと考えているのでしょうか、本地垂迹についてだけの見事な論文集が出ています (Teeuwen/Rambelli (ed.), Buddha and Kami in Japan, Honji Suijaku as a combinatory paradigm, 2003)。しかし受肉では、神は完全な人であって、「もの」が神であることは一回きり起こったのに対して、本地垂迹では「もの」となるのは方便であって、低次の表れにすぎず、しかもしょっちゅう起こるとい違いがあります。

これも予稿集の中に書きましたが、復元された鴨長明の方丈です (図22)。『方丈記』のテキストを見ると、方丈の部屋の中に何があるかといいますと、仏画が2枚と法華経、楽譜、箏と琴が一つずつあるだけです。ですから、いざ津波となるとこれだけ抱えて逃げればいいわけです。これが伝統的なわれわれの生き方でしょう。近代になって、物質をため込むといいますが、物質の肯定、先ほどの図書館への憧れといった物質肯定も、われわれの中にあります。問題は両者の位置付けです。これは震災の復興とも関わりますし、わが東北学院大学の震災学にも関わるものです。

『方丈記』の最後で、鴨長明は言ったことを全てひっくり返します。「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり」と言っていて、草庵を愛して、それに固執するとなると、それは仏の教えに反しているとのこと。せつかく言ったことを『方丈記』の最後で全てひっくり返していますが、



図22

これは不可知論で、何も決めません。これが仏教的知恵です。

その例にあげると、鈴木大拙がそもそも東洋に分割的知性はないと言っています(『東洋的な見方』)。小林秀雄も言っていますし(『偶像崇拜』)、柳宗悦は「仏教ではかかる二元にもものを分けずに、未だ二に分かれない境地に真理を見つめます」と言っています(『美の浄土』)。これは「無對辭文化」として最晩年の柳宗悦が書かれたことです。仙台にいたカール・レーヴィットというドイツの哲学者は、「ヨーロッパ精神はまず批判の精神で、区別し、比較し決定することを弁えている」が、それが日本にはないとの指摘をしています(『ヨーロッパのニヒリズム』)。

『旧約聖書』が始まって『新約聖書』に至るプロセスで、物質が肯定されます。それには、二つのやり方があります。これは文化財の修復の問題と関わりますが、ヴィオレ・ル・デュクは現実を否定して、理想の世界に修復をする。今、ノートルダム大聖堂の修復が問題になっていますが、ヴィオレ・ル・デュクは歴史上は存在しなかった理想のゴシック

クを再現しました(図23)。現代を否定して、理想に向かうとのことで、これは経済学者のシュンペーターのいう「クリエイティブ・ディストラクション」です。夏に日本にお招きしたフランスの美術史家ダリオ・ガンポーニさんに教わりました。

また『美女と野獣』の話ですが、最後にベルが野獣に「アイ・ラヴ・ユー(I love you)」と言うと、奇跡が起こります。そのときに何が起こったかといえますと、お城が全てきれいになって、修復され、元に戻ります。それまではツタが這って、壊れていた城壁も全て修復されます。時間の記憶の無視、これがヴィオレ・ル・デュクの考え方です。それに対して中世主義は時間の中の歴史を重視します。マルクスの中世賛美(『共産党宣言』)もそうですが、ラスキンはどうでしょうか。ラスキンは、「最後には神の大いなる栄光に向かう」と言いながら、人間は卑小であると言って現実の歴史に否定的でもあります(『ゴシックの本質』)。その両面があるので、ラスキンは非常にややこしくなっています。昨年、アメリカでラスキンについて、カレイドスコープのラスキン、つまりよく分からない、あるいは多面的なラスキン、とのシンポジウムがありました。ヴィオレ・ル・デュクの理想主義もラスキンの歴史主義も両方とも物質肯定に変わりありません。過去の物質を破壊して理想の物質(未来の「地上の天国」)に向かうか、あるいは理想に向かっての歴史上の物質(過去の「地上の天国」)を残すかの違いです。歴史は全て永遠につながっているのです。僕はイコン論については30年以上研究していますが、他についてはいろいろと考えているところで、本日も勉強をさせてもらおうと考えています。ありがとうございました。以上です。

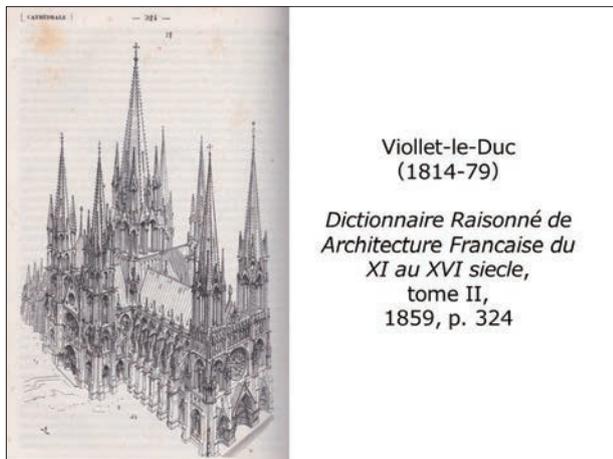


図23

テロと古文書と誇り —マリ北部トングクトゥに おける事例から—

伊東 未来 (いとう みく)
西南学院大学国際文化学部 講師

皆さま、こんにちは。西南学院大学の伊東未来です。鐸木先生の「ちょいワル」を超えてかっこいい不良のご発表があったので、どのような発表をしようかと緊張をしますが、不良になり切れない私は、凡庸な優等生の発表をします。私の専門は、文化人類学です。文化は非常に不思議なもので、あらゆる社会が文化をもっています。ここにいる皆さんも同様で、全ての人間は何らかの文化の中に生まれ落ちるわけです。そうした意味では、文化は普遍なものですが、一方で時代や地域によって、多様性があります。普遍性と多様性から人間について考えていく学問が文化人類学だと、私は理解しています。

文化人類学は、フィールドワークを主な研究手法にしています。研究対象文化の中に住み込んで、その人たちと衣食住を共にして一緒に暮らす中で、その文化を研究していきます。私自身は2003年以降、マリに長期でフィールドワークに出掛けています。本日、話をするのはトングクトゥといわれる町についてですが、私が長く滞在をしたのは、トングクトゥの双子都市ともいわれるジェンネです。トングクトゥもジェンネも、ユネスコの世界文化遺産に登録をされている歴史のある町です。

マリや、マリ北部にある小さな町のトングクトゥは、多くの方にとってはあまりなじみがないかもしれないので、まずはトングクトゥの概要を説明します。マリの位置は、西アフリカの内陸部にあります。授業のときに大学生にマリの位置を聞くと皆、本当にてんでばらばらな所を指します。日本にとっては、距離的にも心理的にも少し遠い場所かもしれませんが、人口は、およそ1854万人です。少子高齢化・人口減少の日本とは真逆で、国民の3人に1人が20歳以下という非常に若い国です。面積は、日本の3.3倍ありますが、人口の大部分はマリの南半分集中しています(図1)。

トングクトゥはマリの北部に位置します。私が滞在したジェンネは、マリのちょうど真ん中の中部にある町です。なぜ人口が南半分集中をしているかといいますと、ヨーロッパ以上の面積があるサハラ砂漠がマリの国土の北半分を覆っているからです。サハラ以南アフリカはサハラ砂漠があることによって、中東や地中海世界、ヨーロッパ南部と隔てられているイメージがあるかもしれませんが、歴史的にはサハラ砂漠はむしろ各地域を密につなぐ海のような存在です。本日の事例に出てくる古文書もサハ



専門は文化人類学。博士(人間科学)。2003年より西アフリカ諸国(マリ、ブルキナファソ、セネガル)にてフィールドワークをおこなっている。近年の主な著作は、マリの世界遺産都市ジェンネの歴史と現在について描いたエスノグラフィー『千年の古都ジェンネ—多民族が暮らす西アフリカの街』(昭和堂、2016年)、マリ人女性たちのトランスナショナルな個人貿易活動と社会の変化を論じた“Changing Malian Women’s Economic Activities: Vending in the Market, Travelling the World,” Japanese Review of Cultural Anthropology 18 (2) (2018年) など。



図1



図2

ラ砂漠を介してマリにもたらされたものです。

マリの主な産業は、農業です。労働人口の約9割が農業、牧畜、漁業に携わっているといわれています。何百年も前から金の採掘が盛んで、現在も主要な産品の一つです。この古地図を見たことがある方も多いかもかもしれません（図2）。日本の世界史の教科書では、人類の誕生から奴隷貿易の間までのアフリカの歴史はごっそりと抜けています。日本の歴史の教科書の中で、珍しく中世のアフリカの様子がたった1行で言及されるときに用いられる地図です。これは1375年に、現在のスペインのマヨルカ島で作成されたと言われている西アフリカの地図です。

この頃は、ヨーロッパ人はサハラ砂漠に阻まれて西アフリカの内陸部に到達できていませんでしたが、産品である金は、交易ルートを通じてヨーロッパまでもたらされていました。14世紀頃のヨーロッパで用いられていた金貨の原料の多くが、マリで産出された金だったといわれています。この地図の右下に描かれている、王冠をかぶって金塊を持っている黒人の男性は、マリ王国の王様のマンサ・ムーサ

だとされています。彼は、14世紀にメッカへ巡礼に行き、そのときに行く先々で金をばらまいて回ったので、彼が立ち寄った巡礼ルートの町々では、金の相場が大暴落をしたといわれています。歴史的には、それぐらい金が産出され続けてきた所です。

既に14世紀に王様がメッカ巡礼を果たしていたことから分かるように、マリはムスリムが非常に多い国です。現在は約9割がムスリムで、キリスト教徒は1割弱だといわれています。その1割のキリスト教とマジョリティのムスリムの仲が悪いかといったら、決してそうではありません。ムスリムとキリスト教は、互いに同僚や隣人、友達として対立することなく暮らしてきました。公用語は、植民地支配の影響でフランス語です。学校教育や行政の言語はフランス語で行われますが、日々の会話はバマナン語をはじめとした各民族の言葉で話されています。

異なる言葉話す人たちが共に暮らしているので、フランス語をはじめとして、各民族の複数の言語を話せるマルチリンガルな人も、決して珍しくありません。コーラン学校で、コーランの読み書きを学ぶ人たちも多くなります。近年では、コーラン学校は都市部の近代的な学校の存在に押されて、減りつつあるといわれています。それでも統計から計算をしてみると、約20人に1人の子どもがコーラン学校に通っている計算になります。イスラームの歴史が長いトンブクトゥやジェンネなどのマリの北部では、その割合はさらに上がります。ジェンネでは学齢にある子どもの約78パーセントがコーラン学校に通っています。

子どもたちは、算数、理科、社会などを学ぶ学校とは別に、日本の習字や塾のような形で、早朝や放課後にコーラン学校へ通っています。写真に写っているこの子たちは、私の近所さんの息子です（図3）。マリのコーラン学校では、7歳頃から、木の板に竹ペンとインクでコーランの一節を書き写しては声に出して読むことを繰り返していきます。この板は、使い捨てではなく繰り返し使うので、インクを洗い流してまっさらにしします。そのときに洗い流したインクは、神様の言葉を書いて流した水なので、そこら辺に捨てたりはしません。いったん壺に大事に保管して、大事な水として保存をします。徐々に素焼きの壺から染み出てなくなっていくはいますが、ぞんざいに扱うことはしません。マリの人たちに

とってアラビア語で読み書きをすることは、比較的身近な行為です。

本日、話をする写本が継承されてきたトンブクトゥの町は、マリの北部に位置しています。サハラ砂漠のちょうど南端のへりに位置している町です。首都のパマコは南部にあります。これはトンブクトゥの旧市街地の路地の様子です（図4）。レンガと石造りの建物が並んでいて、閑静な古都といった風情です。トンブクトゥは、サハラ砂漠の南北を結ぶサハラ交易の中継地として栄えてきました。

なぜ交易の中心地となり得たかは、その地理的な特異性を見れば納得がいくのではないのでしょうか。トンブクトゥは、砂漠のへりにあります。町の北側はもうサハラ砂漠ですが、南側はすぐ手前までアフリカ第3の大河であるニジェール川が流れています。これは私が2007年に初めてトンブクトゥを訪れたときに撮った写真です（図5）。奥に見えるの



図3



図4

がトンブクトゥ側の岸です。その手前には、日本ではなかなか見えないような広い川幅のニジェール川が流れています。地元の人たちもカヌーに乗って、牛を乗せて運びます（図6）。砂漠にありながら、船や水が日常の身近にある町です。

この写真では見えづらいですが、自然増水を用いた稲作も行われるので、周囲には水田も見られます。砂漠のへりにありながらすぐ直前までニジェール川が流れているわけですから、トンブクトゥはラクダのキャラバンと人や船の切り替え地点にあたります。南から運ばれてきた金や綿花などの商品は、ここでラクダに積み替えられて北に運ばれていて、それが品物によってはヨーロッパまで運ばれていきました。北から運ばれてくる岩塩やヨーロッパのガラス製品、中東の書物は、ここで人や船に積み替えられて、より南にも流通していました。

交易によって人の行き来が活発になったことで、トンブクトゥにはマグリブ諸国から多くのイスラム学者も集まってきました。11世紀以前は、トンブクトゥは牧畜民の小さなキャンプ地にすぎませんでした。町の名前ティンブクトゥ（トンブクトゥの原



図5



図6

語に近い発音)の意味は、ティンがトゥアレグの言語タマシク語で「井戸」、ブクトゥは女性の名前なので、ブクトゥさんの井戸です。井戸の周りに数家族が野営を張るような小さな集落でした。そこから徐々に大きくなって、トランスサハラ交易の重要な中継地となりました。これは約12世紀から16世紀ぐらいにトランスサハラ交易がピークであった頃の交易路を単純化して示した地図です(図7)。この地図から、トンプクトゥは地中海世界の沿岸部にたどり着くまでの終着点であり起点でもあったことが見て取れます。トンプクトゥはすぐ手前までニジェール川が流れている町ですが、ひとたび町に入



図7



図8

るとサハラ砂漠の端です。町の外れから20分も歩けば、砂漠でラクダが休憩をしているような光景が普通に見られます。この写真はサンコレモスクといわれる、14世紀に建てられたモスクです(図8)。独特の建築様式です。またこちらの写真は、ドイツの探検家のハインリヒ・バルトが、19世紀半ばにトンプクトゥにやって来たときに宿泊した館の跡地です(図9)。

交易を通じて、アラビア語圏とのつながりが非常に密接であったトンプクトゥは、西アフリカ内陸部のイスラームの拠点となっていきました。15世紀頃をピークに、外部からアラビア語の書物がもたらされました。さらに現地で写本が製作されて、蓄積されていきました。現在では、町に大小合わせて56の図書館があり、写本が保管されています。この56の中には、非常に規模が大きいものから、ファミリーで運営をしているような小さなものまで含まれますが、人口5万の小さな町に56の写本図書館があるのは、非常に密です。そのうち最も大きく、唯一の国立写本図書館は、マリ国立アフマド・バーバ・イスラーム高等研究院です。大体は、サントル・アフマド・バーバ、アフマド・バーバ・センターと略されます。

こちらの写真は、2007年にアフマド・バーバ・センターにお邪魔したときの様子です(図10)。現地の職員の女性たちが修復に用いる紙の仕分けをしていました。日本の和紙も修復の一部に用いられて



図9

いるとのこと。こちらの写真の看板はアラビア語とフランス語で書かれていますが、マンマ・ハイダラ図書館です（図11）。これは私立の図書館です。その名前にあるようにハイダラさんの一家が継承をしてきた写本と、ハイダラさんがほうぼうから収集をしてきた数十万点の写本が収められている図書館です。

トンブクトゥの市民の人たちにとって、写本はどのような意味を持っているのでしょうか。トンブクトゥの出身者やトンブクトゥに住んでいる人たちとよく話をしている感じるのは、自分たちの町に対する強烈な強い誇りです。トンブクトゥは非常に歴史のある町ですが、交易の主体がラクダのキャラバンから大航海時代や植民地支配を経て、大西洋を經由した海運やトラック、飛行機になった現在は、小規模な一地方都市に過ぎません。それでもトンブクトゥの人たちは、自分たちの町に長い特異な歴史があって、西アフリカのイスラームの中心地であり続けた事実の強烈な自負を持っています。

その歴史をマテリアルなものとして体現をしている写本は、町のシンボルでもあります。トンブクトゥで話される主要な言語の一つにソンガイ語があります。ソンガイ語で歴史を意味する言葉は、ターリキといわれます。この中でアラビア語を知っている方は、ぴんときたかもしれません。ターリキ、タリクとは、アラビア語で歴史書や、歴史が描かれた書物を意味する言葉です。その言葉が歴史そのもの

と同じ意味をもっています。この言葉からも分かるように、町の歴史や郷土の歴史は書物と密接に結び付いています。

町の人にとっては、このような書物がマリの首都のパマコでもなく、植民地支配をしていたフランスのルーヴル美術館でもケ・ブランリー美術館でもなく、自分たちの町であるトンブクトゥで継承をしていることが、とても重要なわけです。例えば、私たちの身近な事例でいえば、京都のお寺の屏風絵がいくら素晴らしいからといっても、それを全て東京に持ってきて、国立の美術館などの収蔵庫に収めていけばいいかといわれれば、そうではないはずです。それが作られた当時と同じ場所であって、そこで時代が変わっても人々にめでられて、それを見るために人々がほうぼうからやって来る。その場で修復をされながら、受け継がれていることが重要なはずで

です。トンブクトゥの人にとっての写本も、同じような存在です。2週間前に、トンブクトゥ出身で今は首都のパマコで働いている友人と、SNSでやりとりをしました。私が「もうすぐ東京で開かれるシンポジウムで、トンブクトゥの写本について話をする」と言ったら、彼は冗談めかして、「トンブクトゥの写本について、あまり大っぴらに話さないでほしい」と言いました。「なぜなら、わが町の写本の素晴らしさが日本にまで伝わって日本人にばれてしまったら、ヨーロッパの人たちのように、日本人がわが町へ写本を買いあさりに来てしまうでしょう」とのこ



図10



図11

とでした。

トンブクトゥで大事に保存されてきた一方で、高値で取引されたものや、植民地時代にどこかに行ってしまったものもあります。支配の過程で「ずっと奪われ続けてきた」との認識がある人たちにとっては、自分たちで保管をしておきたいという気持ちは、非常に強いようです。現在でも、写本の収集活動が行われています。この写真は、それぞれの家に保管をされている写本を見せてもらって、より適切な状態で維持管理をするために持ち主から譲り受けや、買い取りをしている様子です。私が付いていった収集活動のときには、それほど古いものや貴重なものはなかったので、特に収集はされませんでした。それでも魔法陣が書かれたものや、100年前ぐらいの写本などのさまざまなものが、ごく普通の人の家にまとまって保管されていることに驚きました。

こうした図書館には、トンブクトゥ写本の代表的なものの一つで、17世紀に作られたアル・ジャズーリの写本も保管されています。オリジナルは、1465年に亡くなったモロッコのアル・ジャズーリ教団の創始者であるアル・ジャズーリの著作です。非常によい状態で保管されています。

このトンブクトゥの写本を危機にさらす出来事が、つい7年前の2012年に起こりました。マリは、1960年にフランスの植民地支配から独立をしました。独立以来くすぶっていたトゥアレグの独立問題が2012年頃から激化をします。トゥアレグの人たちはトンブクトゥにも多く住んでいますが、マリ北部や隣国のニジェールなどのサハラ砂漠に居住をする人たちです。

もともとは遊牧民として牧畜や商業のネットワークの一端を担っていた人たちなので、国境の意識よりも自分たちが自由に行き来できることが大事な人たちです。トゥアレグの人たちは、国家独立以降も民族で独立をしたいと闘争を地道に続けてはいましたが、2012年のものが一番大規模なものとなりました。独立をしたいと言ったトゥアレグの人たちの一部が、2012年に独立を求めて武装蜂起しました。武装蜂起をしているわけですから正しい言い方ではないかもしれませんが、もしそれだけだったら正当な独立要求で済んだかもしれません。しかし残念なことに、独立集団にテロリスト集団も手を貸して参入してきました。その主な集団は、AQIMといわれる

イスラーム・マグレブのアルカイダです。

彼らは、トゥアレグの独立闘争を半ば乗っ取る形で、マリ北部を制圧していきます。2012年4月には、トンブクトゥもテロリストによって占拠されます。彼らがいうところの「正しきイスラーム」にのっとりた支配である極端なシャリーアに基づいて、住民を支配していきます。どのようなことが行われたかといいますと、例えば女性は長手袋をして、腕を全て隠さなければならない。音楽の演奏や歌うこと、聴くことをしてはならない。サッカーは禁止する。盗みを働いたら腕を切り落とす。結婚前に関係を持った男女は、石打ちの刑といったことです。

当時、テロリストに支配をされているときに、ラジオやプレイヤーなどから音楽を大っぴらに聴くことができなくなった人たちの中には、パトロールをするテロリストに隠れて、音楽を聴くために首都にいる親族に電話をかけて、受話器越しに音楽を流してもらって聴いていた人もいたようです。この話をトンブクトゥが解放をされた後にトンブクトゥの人から聞いて、ちょっと涙が出ました。テロリストの支配下で行われたヴァンダリズムの一つが、山内先生も趣旨説明で言及をされていたトンブクトゥの聖者を祀るお墓の破壊です。

テロリストの考えでは、聖人を祀っていることは、アッラー以外の一人間を崇拝するあしき慣習です。トンブクトゥには、大小合わせて数百の聖廟があつて、その一部が破壊をされました。この恐怖による支配が進んでいる最中に、非常に誇り高いトンブクトゥの住民たちは、かなり思いきった行動に出ました。テロリストによる町の制圧の前後に、秘密裏に写本を町の外へ逃がしました。例えば、アフマド・バーバ・センターは約2カ月で、6万点の収蔵品のうち3万5000点を町の外に移送をしました。マンマ・ハイダラ図書館の職員たちは、町の住民と協力をして、数十万点を首都に移送をしました。

例え自分たちの所有物であっても、大量の写本を移動させていればテロリストの目に止まって、場合によっては不当に罰せられるかもしれません。移送に関わった町の人たちも、何もなかったのが今は笑い話として話せますが、「見つかったら今頃は、僕たちの両手はなかった」と話していました。トンブクトゥの住民たちはテロリストよりも一枚上手で、テロリストの目に留まるのを避けるために、彼らの警戒や政府軍の軍事行動に合わせて、輸送形

態を変えながら写本を避難させます。初期はテロリストのコントロールが厳しかったので、まずは町の外へ出すリスクは負わずに、町の民家や砂漠に分散をさせました。

彼らにとってサハラ砂漠は、私から見たら全て漠とした砂地ですが、地元の人たちはどこに隠したかを把握できるので、まずはあちこちに隠したとのこと。その次に、テロリストによる制圧後に少し混乱が落ち着いて、支配をされながらも南部との交通が回復をした時点で、陸路で首都のパマコに移送をさせる作業にあたりました。この頃になると、テロリストによって町の発電施設が破壊をされていたので、夜中に懐中電灯を手に分たちの収蔵庫に行き、ロバなどに積んで少しずつ運び出して、トラックに積み込んで移動をさせたそうです。

交通が回復をしたとはいっても、テロリストによる検問は行われていたので、ミネラルウォーターなどが入っている箱や衣装ケース、干し魚が入っている袋といった何てことない箱や袋に詰めました。写本の上に干し魚や洋服をかけることで、カモフラージュをして運び出しました。さらに事態が進むと、政府軍と国連軍がテロリストの支配からトンブクトゥを解放するために交戦を始めます。テロリスト側も北部だけではなく、マリの中部や南部にもより支配を広げるために南下をしていきます。南部と北部を結ぶ道は交戦の場となってしまったので、陸路での移動は非常にリスクとなりました。

そこでトンブクトゥの人たちは、ニジェル川を船で南下して、パマコに移送をしました。トンブクトゥから船で約5、6日かかります。日数もかかりますし、写本には大敵の水の上を行くので、運搬をした人はとても緊張をしたと言っていました。こち

らの写真は、首都に移送をされた後に、首都のパマコで保管をされている写本の一部です。私は、2014年にトンブクトゥの写本が保管されているパマコの倉庫にお邪魔しました。これは首都のアパートの1室に保管をされている様子です。2014年の時点では、トンブクトゥは既にテロリストの支配から解放されて奪還されていましたが、それでも関係者の人たちの緊張感は解けていなかったようです。

彼はカデルさんという方で、マンマ・ハイダラ図書館の館長さんです(図12)。私が写真を撮っていたのかと聞いたら、彼は撮ってかまわないと言いましたが、「写本が保管されている場所の正確な住所や地区の名前は、君の論文には書かないでほしい。この時点ではまだどんな危険があるか分からないので、秘密にしてほしい」と言っていました。この箱の様子からも分かるように、テロリストに見つかれば命の危険もあるような移送作業だったので、丁寧に一個一個の目録を作って、運ぶか運ばないか判断したり、分類別に箱へ詰めて運ぶことは一切できなかったとのこと。ブリキの箱にこのように無造作に詰めて運ばれました(図13)。

徐々に落ち着いてくると首都で目録を作り直す作業を始めたとのことですが、この時点ではまだ追いついていない状態でした。ここで、ふと疑問が湧くのではないのでしょうか。テロリストは極端な解釈を持つとはいえ、トンブクトゥの住民と同じイスラームを信仰している人たちです。それなのになぜ町の人たちは、テロリストが自分たちの写本を攻撃すると思って避難させる判断を下したのか。テロリスト自身も、トンブクトゥ制圧直後にテレビとラジオを通じて、「われわれは写本の価値を知っているので、誓って危害は加えないので安心してほしい」と



図12



図13

声明を出しました。一方で、同じ声明のときに「トンプクトゥの町の信仰は、あしき慣習に侵されている」とも言いました。

この言葉を聞いて、賢いトンプクトゥの人たちは怪しむわけです。どのように怪しんだかといいますと、彼らの言葉を借りると、「写本に害を与えないとなぜわざわざ言及をするのか。それは非常に怪しい」と。「われわれの誇りを破壊することによって気持ちをくじかせて、従順にさせようとする魂胆ではないか」、「古文書に書かれていることをあしき慣習の根拠にして、人々を罰していくに違いない。彼らの考えに反することが書かれた古文書は、焼き払われるに違いない」と考えたのです。あるいはこれは図書館の職員さんのお話ですが、「写本を高値で売り飛ばして、それを彼らのテロ活動の資金にするのではないか」との危惧を持っていた人もいたようです。

トンプクトゥの図書館の人たちは、収蔵本のどれが信仰に反すると判断されると考えたのでしょうか。例えば、写本の中には音楽を賛美する書物もたくさんあります。性のお悩み相談室のような古い本もあって、例えば男性の性的能力の回復には、アラーの御名を唱えれば元気が出ますと書いてある書物。異教徒であるヨーロッパ人の探検家がトンプクトゥに入ることは、当初は町に異教徒は入れないと規制をされていましたが、それを許可する書簡など。そのような、トンプクトゥの人たちが育んできたと自負をしている、非常におおらかなイスラームを体現しているものが、テロリストによって破壊され、間違った解釈や慣習の信仰の根拠とされると危惧したわけです。

その危機から命を顧みずに避難をさせた写本ですが、町にある数十万点の写本を全て避難させることができたわけではありません。トンプクトゥに残された一部の本は、どうなってしまったのか。テロリストは、内容を一つ一つチェックして、思想にそぐわないかどうかとか、素晴らしいから残そうとか、これは焼いてしまえなどと分類をしていたかといいますと、答えはノーです。アフマド・バーバ・センターは市内に三つの建物があって、そのうちの一つがテロリストによる占拠後に、彼らの住居として使われていました。町が解放をされた後に、職員の方がテロリストの住居となっていた収蔵庫に行ってみると、写本は無事でした。ばらばらと散乱してい

て、保管に使っていた頑丈な箱だけがなくなっていたようです。職員さんの推理によれば、テロリストは軍事攻撃に遇って退散をするときに、自分たちの荷物や武器を運ぶのに箱を使って、中身の写本を捨て去っていたのだらうということです。残念なことにトンプクトゥに残さざるを得なかった本の中には、焼かれたものもありました。写本を焼かれた状況も、図書館の職員の人からすれば非常にあきれるものでした。アフマド・バーバ・センターの職員カランプリさんの話によると、焼かれた本の傍らには、たくさんのビール瓶が散乱をしていたとのこと。住民には音楽やサッカーを禁じて、正しきイスラームを強要していた彼らは、自分たちのアジトではアルコールをたしなんでいました。フランス軍の空爆が始まったので、去り際に写本に火を付けて去っていったわけです。政治的な意図を持った破壊や焚書よりも、単に腹いせに放火をして遁走したという表現のほうが、より適切かもしれません。

このトンプクトゥの写本の救出と焼失について語るときに、トンプクトゥの図書館の職員さんたちは、非常に勝ち誇ったような笑顔で話してくれました。当時は、秘密裏に写本が移送をされたことは、多くの市民にも秘密でした。現在では市民の人たちの間でも、あのときに何が起きていたか共有されています。市民の方たちも一部始終を又聞きして、面白おかしく話してくれます。例えば、「テロリストたちは写本に何が書いてあるのかも分からないようなアラビア語もろくに読めないやつらだった。われわれは、彼らから自分たちの誇りを守った」といった発言もされます。

写本の多くが焼失を免れたことによって、自分たちの町が培ってきた寛容なイスラームや、町の財産に対する誇りが再強化されているという印象です。私が個人的に思うのは、移送のときに誰も亡くならなかったし、写本もおよそ9割という高い確率で救出ができたので、笑顔で語れるわけです。実際には一体、何が起きたのか、どのような手順と方法で救出できたのかをきちんと記録して残しておかなければなりません。今回は、たまたま、カデルさんという世界的なライブラリアン間のネットワークを持っている方がいて、彼が強いリーダーシップで指揮をしました。しかし、1人こういう人がいるからといって、いつもうまくいくわけではないでしょう。

現在、「救出ができてめでたしめでたし」ではな

く、トンブクトゥからバマコに移送をされた写本は、気候が異なるバマコで保管の困難に直面しています。トンブクトゥは、1滴も雨が降らない月もあるような砂漠です。首都のバマコは、バナナがすくすくと育って、降水量も1000ミリあるような湿潤な町です。トンブクトゥからバマコにやって来た写本は湿度や水漏れや浸水もあって、それらからいかに守るかが課題になっています。2014年の時点では、世界各地の支援団体からお金をかき集めて、アパートでこっそりと保管をしている状況でした。

現在では、首都にある写本はユネスコをはじめとした国際機関、マリ政府やトンブクトゥの図書館と

の共同で、電子化の作業が進められています。まずはパソコンで書き起こしをして、さらにページそのものの写真を撮って電子化をしていっています。今のところは、トンブクトゥに写本を戻すめどは一切、立っていません。私は、トンブクトゥ出身の友人たちに散々、トンブクトゥに写本があって、歴史があると自慢されてきました。ぜひとも、またいつかトンブクトゥに写本が里帰りして、トンブクトゥの人たちの自慢話を聞いたものです。ですが、これから先何年かかるのかはよく分からない状況です。これで話は終わります。ありがとうございました。

パネルディスカッション 「破壊の論理と文化遺産保護」

ファシリテーター：中村雄祐

パネリスト：山内和也、鶴間和幸、近藤二郎、鐸木道剛、伊東未来



中村 雄祐 (なかむら ゆうすけ)

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

読み書きに関する文理の基礎研究を踏まえつつ、文書という重要な文化資源を、調査研究の資料として、手段として、の両面から研究しています。また、さまざまな分野の専門家の共同作業にも強い関心を持っており、歴史学や情報学など研究者との学際研究や、主に中南米で国際協力のアクション・リサーチにも取り組んでいます。最近の研究の展開については、私が企画運営を担当している以下の研究会サイトをご参照ください。

文化資源学を支えるテクノロジー (文化資源学会 文化資源学の展望プロジェクト)

<https://sites.google.com/site/bunteku2013/>

中村 パネルディスカッションに入ります。司会を務める東京大学の中村と申します。最初に山内先生から説明があったように、狭義の文化財や文化遺産専門の議論をするよりも、あえて俯瞰で議論をしようとのことで、今回のサブタイトルは『人はなぜ本を焼くのか』となっています。ミュージアム以外にも図書館や文書館、さらには無形文化遺産まで、いろいろな観点から議論ができるテーマです。それが理由で、いろいろな関心をお持ちの皆さんが集まっているのではないかと思います。

まず、参考までにお伺いいたします。本日は主にミュージアムへの関心からいらしたのか、図書館か、あるいはアーカイブか。お集まりいただいた皆さんの関心の広がりを確認したいと思います。ちなみに、私は、三つとも専門ではなく、どちらかといいますとフィールドワーカーなので、全てに挙げるか全てに挙げないかで迷います。そこで働いていなくても関心があるという方も含めて、また、何度手を挙げて頂いても構いませんので、まずはミュージアムの観点から今回いらしている方は手を挙げてください。ありがとうございます。続いて、図書館の観点からの方、手を挙げてください。面白いですね。次に文書館などのアーカイブの観点からいらした方、手を挙げてください。せっかくなので、無形の観点からいらした方も、手を挙げてください。ありがとうございます。多様な関心をお持ちの皆さんが集まってくださっています。皆さんとも意見交換ができればいいですが、このようなテーマで多様な分野の専門家が一堂に会したこと自体、貴重な機会です。時間が限られているので、まずは仕掛人である山内先生から、四つの講演を聞いたコメントといえますか、まとめをもらって、その後に先生方と自由に議論をしてみたいと考えています。山内先生、よろしくお願いします。

山内 タイトルの副題は『人はなぜ本を焼くのか』ですが、『文化遺産の意図的な破壊』と比べると、こんなに小さな字になるとは思いませんでした。逆に副題のほうを大きくしたほうがよかったのではないかと、ちょっと残念な感じです。本日は、『人はなぜ本を焼くのか』というテーマです。通常であれば、文化財や文化遺産の保存、文化遺産を専門とする方々に集まっていただくシンポジウムが多いと思います。今、中村先生からお尋ねしましたが、本日



はさまざまな分野の方に参加をしてもらったということで、その意味では非常に成功したのではないかと感じています。

歴史的な話をされたお2人の先生からは、歴史資料に沿った話がありました。一方で、比較的、現代に近いほうでは、歴史的な評価もまだ定まっていないうものもありますが、現実起こったこととして、二つのお話をいただきました。その意味で、非常に面白かつ重要なお話であったと思います。秦の始皇帝の焚書坑儒だけではなく、現代までつながる記録の破壊があり、そして記録を破壊するということは、歴史の破壊や抹殺、社会や集団全体の抹殺を狙っていたのであろうと考えられます。

エジプトの例のように王名を削って、歴史を消してしまう、王名表を削って、(系図が)つながらないので追加するという行為が行なわれたこともわかりました。トンブクトゥの例では、破壊の目的がよりはっきりしていたと思っていたにも関わらず、瓶ビールを飲みながら、たき火でもしていたのかといったことも驚きでした。鐸木先生の「更地学」にも衝撃を受けました。お話の中では、「更地」にするということが「永遠」につながるかのような言及があったかと思いますが、ISのしてきたことは、実はそれに近いように感じます。その点で、「更地学」から思わぬ示唆をいただきました。ご発表の内容が多様で、ややばらつき感があるのは仕方ないとしても、非常に興味深いお話をいただきました。

中村 ありがとうございます。鶴間先生と近藤先生は歴史の専門家ですが、古代に関する研究成果を現代社会に対して積極的に発信されています。後半のお二方の講演を聞いて、どのような感想を持たれましたか。鐸木先生からは人文学の位置付けの話もあ

りましたが、そのことも含めてコメントをお願いします。先に鶴間先生からお願いしてよろしいでしょうか。

鶴間 私は古代史を研究していますが、いろいろな意味で古代は現代とつながっています。私自身が現代の人間ですので、どうしても現代のことを考えながら古代のことを研究してしまいます。現代に役に立たない古代史は意味がありませんし、しかしながらゆがめて古代を語ってはならないと、絶えず考えています。本日も新しい時代の焚書と一緒に考えると、現代と古代には共通点はすごくあるなど感じました。それは何かといいますと、戦争の中で書籍を焼くということが共通していることです。先ほどは秦の始皇帝の話をし、提案した李斯の目的を考えました。私は、秦が東方の国々を統一ではなく征服したと、ずっと主張をしてきました。

始皇帝はいろいろなものを破壊してきた一方で、



いろいろなものを保存してもきました。李斯の政策は、徹底して東方の国の歴史を抹殺することに、第一の目的がありました。その後の項羽と、本日のお二人の新しい時代の話と共通をしているのは、項羽は秦をつぶそうと考えて咸陽宮を焼きました。しかしその前には劉邦が咸陽宮に入って、臣下たちに破壊や略奪をすることをやめさせて、秦の文書を救い出すといいますか、倉庫の中を封印します。それはなぜかといいますと、劉邦は次の時代を考えて、新しい王朝をつくる時には秦のものを使わざるを得ないと考えたからです。

劉邦は、民衆から立ち上がって政府を作りましたので、蕭何という地方の役人に秦の文書を救い出させます。そこには、これから秦にとって地方をどの

ように支配するのかななどの情報がありました。その後に入った項羽は、徹底的に秦の文書を破壊します。いろいろな文書がまだ残っていたと考えられますが、項羽は宮殿を丸ごと焼いてしまいます。項羽のほうは秦とは違う国を作ろうとしましたので、宮殿を焼いて、略奪をしました。劉邦と項羽の間には文書に対する二つの歴史的な事象が表れています。それが現在のトンプクトゥの話でも同様です。戦争によって、一方の側による正当性の主張のような形で文書が焼かれて、文書が犠牲になることは、古代も現代も同じであったかもしれません。それは聖書も同様で、いろいろな時代にある気がします。そのように歴史から学ぶことは、たくさんあります。

中村 近藤先生、お願いします。

近藤 私も古代史は現代がつくっていて、常に解釈が変化をしているとずっと考えています。本日の話の中ではいくつかあって、王名表の話をしました。ラメセス2世の時代である紀元前1300年ぐらいの時代にエジプトは、自己をどのように位置付けるのか。自分たちが王統でどの位置にいて、過去はどうなっているか。その古い記憶を研究することや、古王国時代のピラミッドの修復碑文を作るわけです。これはいろいろな所で言っていますが、日本でエジプト史は大ピラミッド、ツタンカーメン、クレオパトラの三つの話になっていて、それぞれが1300年ずつぐらい違っていています。私は、これを古代エジプト三大話と揶揄しています。

これは同質的に扱われますが、ラメセス2世の時代に自分の位置付けをしながら、1300年前のピラミッドはどうだったか。自分たちの王統がどこにあるのか。古い記憶をもう一度、まとめ直すことをして、彼らはアマルナ時代やヒクソスの時代を外すような歴史を考えています。一方では、それとはちょっと裏返しになるようなヒクソスを礼賛して、彼らの支配が400年経ったとの碑文を作りました。ラメセス2世時代の人たちは、自分たちを位置付けながら歴史の中に自分たちをどのように置くのかをかなり真剣に考えています。

それとともに何を抹殺して何を受け入れるのか。自分たちの正当性なのか、自分たちの歴史の中で駄目なものをどのように決めているかといいますと、過去の記録を見ているのではないのでしょうか。エジ



プトの場合は燃やしている記録はありません。乾燥をしているので、発掘をしているとパピルスでも出てきてしまいます。中王国の王都も発掘をしていないので、今後は新たな文字資料は出てくると考えられますが、その中で意識的に廃棄をされたものについては考えます。

お二人の新しい時代の発表を聞いていて、私はエジプトの考古学とともに、インダストリアル・アーケオロジー（産業考古学）といわれる授業を持っていますが、そのような新しい文化財保存には、すごく興味があります。誰も何も文句を言わないうちに、いつの間にかなくなってしまうことは恐ろしいことです。文句を言っているのに原宿駅はなくなってしまうし、それはなぜなのだろうか。日本人は、文化財を守ることにに関してちょっと考えなければなりません。三菱一号館も指定をしようとした瞬間に解体されて、レプリカを建ててすごいことをしているだろうとのことで、何だかおかしいです。京都では、みずほ銀行も同じようなことをしています。その点で、もう少し周りにあるものの中で、残すべきものをどのようにしたらいいかは、われわれの問題として考えなければならぬと、あらためて感じました。

中村 ありがとうございます。ちょうど古代から現代へ、話題をつないでもらいました。鐸木先生の更地学の話をついていて、私は自分の原風景もそちらかもしれないと感じながら聞いていました。古代史をはじめとして歴史学から学ぶべきは、いろいろな視点からバランスよく資料批判を進めるスキルですが、他方で、現代の話題だと自分の当事者としての価値観を完全に消すことはできませんので、苦労します。

そのときに、先ほど言われたようなアニミスト的な更地がデフォルトにあるという感覚と、そうではないアプローチがありえると思います。どちらがいいか悪いかではありませんが、そこをインテリは接ぎ木をして無理している感じがあるとのこと指摘もありました。本を焼く行為に関しても、先ほどのお話は高速でしたが、メッセージはすごく伝わってきました。時間があるので、その点についてもう少し発展させていただけますか。

鐸木 よくいわれるアニミズムは、亡くなられた梅原猛先生もアニミズム復興と言っていましたが、あれは非常に恐ろしい考えです。中学校や高校でアニミズムを教えるらしいですが、アニミズムは、アニミズムゆえに物を大切にすることからいいことだと教えるようです。しかし大切にすることは、怖いからです。怖いから触らないとのことで、われわれはそういう感受性を持っています。文化財になっていなくても、鎮守の森など触ると罰が当たるとの感覚があります。日本人が古いものを壊さないのは恐怖ゆえで、そこまでいくと非常に大切にします。しかしその手前のものに対してはすごく冷たいです。

その辺りは人類共通です。ヨーロッパ人の無意識の中に、人形が生きている感覚があることを、フロイトが不気味なものと言っています。ヨーロッパ人の中ですら、アニミスティックな感受性があるのです。そのことをすでに18世紀ドイツの哲学者ヘルダーが指摘していますが、それをユダヤ・キリスト教は抑圧しているのです。われわれのこの感受性は、アフリカの研究者もここにいらっしゃいますけれど、アフリカでも同じはず。しかし例えば、中国や韓国の人に聞くと、そのようなことはあまり言ってくれません。近代化を推し進める段階では、アニミ



スティックな感受性は、あまり顧みないのでしょう。日本では、このところ人形供養がものすごく盛んになっていますし、パワースポットや仏像ブームもあります。仏像ブームには、二面あります。つまり物を大切にするには二つあって、一つはアニミスティックな感受性で、怖いから残す。もう一つは、キリスト教の物質観では、物は命はないけれども、永遠につながっている。これはキリスト教の受肉の論理です。その辺りに関して、ヨーロッパでは教義ゆえに、はっきりとしています。われわれでは、それらが何となく混在しているのではないかと感じます。

中村 近代化には両面がありますね。先ほど、更地の写真をこれでもかと思わせてもらって、私たちはこういうことを身近な日常感覚でしているのご指摘はかなり強烈です。私の同僚に文化遺産の専門家である松田陽先生がありますが、本日の予習のためにいろいろと勉強をさせてもらいました。松田先生は、東アジアから無形の文化遺産をもっと言っていかないと有形の不動産に関心が偏ってしまうのではないかとおっしゃっておられました。本日の話の大きな文脈では、なぜ東アジアでこのような議論をしているのかという話に関係してくると思います。

他方で、伊東さんにお聞きしたいです。余談ですけども、私は若い頃にマリで3年ぐらい研究の修行をしていたので、トンブクトゥの話懐かしく聞いていました。アラビア語、イスラームの文化を受け入れる土着の文化もあるので、ある面では日本と同じようにうまく接合している気がします。とはいえ、今回ご報告いただいたような事件が起きたときに、例えば鐸木先生が言われた更地のようなものは、砂漠だとどんな感じになるのか、よく分かりません。あくまで思考実験としてですが、日本で生まれ育った方としては、どのように感じられたかを聞いてみたいです。

伊東 鐸木先生がおっしゃったように認定や保護をすると決めたら継承をしますが、その手前のものはあっさり壊されるとの話は、マリでも非常に似た感覚はあります。本日の発表で、私はトンブクトゥの人は古文書を大事にしていると言いました。実際にそうですが、それを大事にするようになったのはなぜかといいますと、古文書の救出活動に尽力をされ



たカデルさんが、いかに大事なのかを説いて回りました。

そのような情熱をもった1人の尽力や、逆説的に「ヨーロッパの人たちがこのぐらい高値で買い付けにくるものを、われわれは持っている」との外からの評価。そうしたいろいろな要素によって、自分たちが持っているものがいかに貴重であるかが「逆輸入」のように認識され、古文書が彼らの誇りになってきた経緯もあります。トンブクトゥの人たちも何かきっかけがなければ、あっさりとも更地化をしていたかもしれないと思う部分はあります。どのような経緯が民族や社会、歴史の誇りになるのかは、エポックメイキングな出来事や、強力なカリスマ性を持った人の登場によって、意外と方向が変わったりするのだろうと感じました。

中村 ありがとうございます。本日は仕掛け人として趣旨説明を重点的に担当していた山内先生も、先ほど自己紹介をされたように、ご自身の現場を持っておられます。今度は現場で研究をしている立場へスイッチしていただいて、4人のお話を聞いて、自分の現場に関してどのようなことを感じましたか。現場をずっと見ていると、いろいろな火種といいますが、難しい現実も見ているのではないのでしょうか。考えていただいている間に、私がもうちょっと話します。例えばトンブクトゥでは、先ほどスライドにあったように、現場にはビール瓶が落ちていたとのこと。確かにそういうこともあるだろうという気がしますが、他方では、例えば麻薬ディーラーの研究を思い出します。

それらの研究によると、麻薬ディーラーは、結果的には中小企業の社長みたいに合理化をしていかないと、うまくいかないとのこと。普通の会社員

以上にばらばらな人たちに対して、組織的に行動を調整しないとうまくいかないの、中小企業の社長のような人がディーラーのトップになるということです。中南米ではテレビに出ることもあるようです。現場では、指揮系統のある徹底した破壊もあれば、混迷状態での破壊もあるなど、いろいろな局面があると思います。

それらは区別するべきですが、実際には混沌としているような気がします。そのことに関して、先ほど山内先生に危ない所には行ってはいないのかと聞いてみたら、危なくないようにしていますと仰っていて、さすがプロだなと思いました。本日の一つの話題であるなぜ破壊が行われるかを考える時、一方で混迷した戦争状態、他方で徹底的に末端まで指揮系統がある場合の両方が起こっている気がします。一般化は全くできませんが、その点に関してもう少しお話をお願いします。

山内 決して簡単ではないご質問をいただきました。なぜ、今回のようなシンポジウムをしなければならぬかについては趣旨説明でも話をしました。私はバーミヤーンで長らく文化遺産を保護する活動

をしていました。その後、ISの破壊行為もありました。簡単にいいますと、守る側の人員とお金が足りませんので、現実問題として対応ができていません。本や文化遺産を破壊する側の人たちが、なぜ破壊しているのかを理解できない状況では、文化遺産の保存は重要なのでお金も人も必要だと強調してもなかなか伝わらないように感じたことが、そのシンポジウムを提案する一つのきっかけでした。

その意味では、「更地論」は示唆に富むものでした。物理的な土地のスペースを更地にし、人の心の中にある信仰をつぶしてしまえば、自分たちの望むものを新たに刷り込めるスペースが生まれることとなります。まさに「更地」なのだ、その意味で、私は非常に感動しました。これで全ての謎が解けるわけではありませんが、破壊という行為とその理由を理解するきっかけになるかもしれません。アフガニスタンでは、戦争や社会といった大きな変革がありました。ターリバーン、そしてアルカイダが登場してイスラーム主義が過激化した中で起こったのが、大仏の破壊です。歴史的に見れば、明らかに社会の変革期には多くの文化遺産の破壊が起こっています。

秦の始皇帝のときも、大きな社会変革の中で、か



つての価値観とこれから求める価値観のせめぎ合いがあったのだと思います。エジプトでも同じだと思います。価値観が変わっていくことで、過去の価値観をどのように捉えていくのか、葬り去ることや削りとりすることともあれば、逆に復活をさせるということもあるのかもしれません。その意味では、大きな価値観の変革によって文化遺産が破壊される理由については、何となくではありますが、臆気ながら、理解できるような気がします。一方では、平時に起こっている文化遺産の破壊もたくさんあります。社会の大きな価値観の変化が過去の価値を破壊していくというのが、私が考えていたことですが、そうではなく、平時においても価値観が変わり、それによって破壊が行なわれていくというお話もありましたので、これからもう少し考えていく必要があるのではないかと思います。

中村 本日のシンポジウムが関わる主題として、ミュージアムでいえばモニュメントや遺跡が中心的なイメージです。アーカイブでは、公文書のように一個一個のドキュメントが大事です。他方、図書館では一応、複製があります。希少性という点では、図書館は前者二つとはちょっとずれるところがあります。とはいえ、図書館で借りるものや書店で買うものは、読みたくて読むことが多いので、読んでいくとかなり深く心に作用します。例えば日本では、地震や火事で地元の大きなシンボルが焼けてしまうと皆さん悲しまれますが、他方、読書はすごく個人的な経験です。複製があっても、まわりで何人が読んでいても関係なく、自分が読みたくて読んでいます。

その意味で本を焼く行為は、先ほどのイコノクラスムの話と深く関わっています。物を破壊することを通じて、読んでいる人の心を破壊しようとする怖い面があります。それとは別の文脈で、身分証明書が焼けてしまったら、今の法治国家の枠組みの中ではものすごく苦勞をする、ということもあるわけです。鐸木先生にもう少し解説をしてもらいたいです。破壊をする側の論理としては、物を破壊することを通じて、心を破壊する。戦争の場合は、そのことが強く感じられます。他方、日常の場合は、荒れているのに気が付いていないということもあるのではないのでしょうか。

鐸木 日常の話でいえば今、断捨離がはやっ

す。あれはあまりにも行くと、命を縮めます。場合によっては、死にます。自分の記憶のよすががなくなるわけです。ある程度はしたほうがいいでしょう。定年を機会に無理をして断捨離して、自分の蔵書をトラックで処分などをすると、命を縮めます。自分の記憶を全て消滅させるのですから。確かにいろいろとため込むことは、家族には迷惑です。テレビでよく断捨離をしていますが、断捨離は、すでに西洋的になったわれわれの感受性には無理があらうと感じます。それが一番身近な記憶の破壊です。

中村 戦争で心に攻撃をするということでは、ご発表で示されたサラエヴォの破壊などすごいダメージがあると感じます。

鐸木 ノートルダム大聖堂が焼けたのも記憶の破壊です。日常生活でも、いつもあった大きな木が突然、なくなる。今、先生がたくさんの例を出しましたが、それは非常につらいことです。しかし考えてみると、しばらく前に政治家が、「ものより心」とか言っていませんでしたか。僕の家内もそっちです。日常のことで言えば、例えば家具です。いい家具を買って、代々使う。これは実はインテリだけで、非常に西洋的な感性なのです。ちょっと張り込んでいい家具を買って、自分の子供たちが代々受け継ぐ。しかし普通は、子どもがシールなどを貼るので安物を買って、捨てて新しいものを買います。それが日本の主婦の感性です。僕の身の回りでも同様です。僕自身は西洋化をしていると感じているので、ちょっとは張り込んでいい家具を買って、長く使いたいと考えますが、家内は安物でいいと反対をします。それは普通ではありませんか。ここにいる皆さんは、近代化した感性を持っていて、長持ちす



るほうに賛成の方が多いでしょうけれども、現実ではそうでもありません。更地と同じです。普通の人も行政も非常に冷たくて、文化財の保護に誰も関心を持ってくれません。そうではありませんか。

中村 せっかくなので、後ほどフロアからも意見を聞こうと考えています。その前に今の流れで、伊東さんの講演の最後にデジタル化という話がありました。デジタル化は、実際にはデータがサーバーにあるわけで、物といえば物ですが、これまでの紙の読み書きの認知的機能が進んだものと見ることもできます。われわれの世代は、このような紙と一緒に育っているので、ここに物を見るか、心を見るかのスイッチを切り替えることは、比較的簡単にできます。見ようとすれば物として見るし、見ようとすれば「山内さんは、このようなことを考えているのか」と見ることもできます。

それがこの道具のすごく不思議で、面白いところです。だからこそ、破壊もあります。今の若い世代は、最初からスマートフォンやKindleがあります。物と心は、相変わらず人間にとって不思議な関係にありますけれども、紙の読み書きのモデルが、あまり使えなくなってきました。今回、そちらの話題をメインにする気はありませんが、トンプクトゥで電子化が進むように、他の所でもそれが選択肢になってきています。そして、「デジタル化をしたからアナログを捨ててもいい」と考えるのはやめようというのが、ここ20年ぐらいのわれわれの苦い経験からの教訓です。実際にそれらを同じだと思い込んで、スキャンしてデジタル化したら紙を捨ててしまって、ものすごく後悔をしている研究者が大学などにはいるわけです。そのぐらいにはわれわれにも知恵はたまっていますが、トンプクトゥのように日本からすると生活が厳しい所では、われわれよりスマートフォンなどへのアクセスは難しい状況です。そういう中でも他に手段がないと感じつつデジタル化が進むわけですが、今後はどうなっていくのか。そのことに関して教えてください。

伊東 トンプクトゥの写本そのものが避難をして無事であったことは、トンプクトゥの市民である図書館員やイスラームのお坊さん以外も、皆さん意外と知っています。デジタル化がされつつあることに関しては、市民の方はあまり関心がないようです。市



民の大半にとっては、自分たちとは全く違う、実感の伴わない作業が粛々に行われているイメージのようです。トンプクトゥの人にとっては、写本があることが大事です。

トンプクトゥの方もある程度はコーランが読めますが、写本に書かれているような何百年前のアラビア語はきちんと読めない人がほとんどです。何が書いてあるかよりも、写本があるという事実が大事なわけです。収集活動のときに図書館の方が困ると言っていたのは、「誰々さんの一族の所に貴重な写本があるらしい」という情報訪ねて、うちの図書館にぜひとも譲ってくれませんかと言うと、「ある」という返事があります。「では、それを見せてもらえますか」と言う、「あるけれども出せない」と言います。それはなぜかと言うと、本当はないわけです。持っていないけれどもうちにはあると言います。

日本でも、わが家には坂本龍馬の自筆の書があると言い張っているお父さんがいたりしますが、本当はないけれども「ある」と言うこともあるわけです。あるいは、何十年か前には保管がされていたけれども、今はないかもしれない。マテリアリティーがとても大事で、そこに書かれた内容も大切ですが、その物があることが大事なわけです。場合によっては、自分の一族の歴史を誇示するために嘘をつくことや、誤魔化すことをするぐらい、本当に物として「ある」かどうかが大変です。電子化の流れが進んでいるからといって、写本を破棄していいことにはなりませんし、トンプクトゥの人たちは早く本が戻ってくることを願っている状況です。

中村 両方大事といたしますか、そもそも人間の体が、ある意味で物です。完全に物から脱却をすることは、ある種、宗教的な別の次元の話になります。

資料のデジタル化が進んでいくと5年後ぐらいのコンソーシアムでは、アーカイブのデジタルデータに対するサイバー攻撃に対してどうするか、のような課題に対応しなければならない時代がくるかもしれません。破壊の形態も変わっていきます。それは置いておくとして、パネリストの皆さんに今のデジタル関係で聞いてみたいことがあります。

古代の研究に関しては、例えば、中国ではたくさんの竹簡が出てきていると伺っています。それらがデジタル化をされることによって、ある意味で研究の精度は上がっていくのでしょうか。いわゆる「西側」のアカデミアの世界ではデジタルデータを共有し、お互いに自由に議論をしようという動きが広がっています。例えば中国やエジプトは、デジタル技術を使った研究については、それぞれの研究者が努力をしている感じですか。

近藤 エジプトの場合は、文字をどのようにデジタル化するかの問題があります。今までは、文字を読んだ翻字（トランスリタレーション）記号をデジタル化しています。最近では、実際にどのように書かれるのか。原本の写真をきちんと撮って、それを保存することと、それによってどのように読んでいくかを明らかにします。それをしないと、読んでいる翻字をしたものが間違っているとの議論は、今までもかなりありました。最初にどのような方式で決めるのかは、まだいくつかあります。その辺を詰めていかなければ分かりません。

中村 ありがとうございます。鶴間先生、お願いします。

鶴間 中国の歴史でも文献のデジタル化は、例えば台湾では国を挙げて、全ての漢籍をデジタル化しています。細かいことをいえば、デジタル化は人の手を通してするわけですので、一字一句にこだわる私たちは、すこし危険を感じています。学生たちは、台湾や中国の研究院からいろいろなデータ資料を引いて、コピーペーストで貼り付けます。今までに残されてきたテキスト自体も、書き手によっては誤字があります。いろいろなテキストを確認しながら、この字はこれであるとテキスト・クリティークをしていかなければなりません。学生たちには、電子データだけを使うのは入力時の打ち間違いがあるの

で危険だと伝えていますが、それよりも紙データで、いろいろなテキストと突き合わせることを要求しています。

中村 歴史家としては、理想はそちらでしょう。ただし、デジタル技術の重要性は否定はできず、世の中の流れとしてはいろいろな理由で、5年ぐらい先にはそのテーマでする必要が出てきそうです。よろしくをお願いします。

先ほど聞いたようにフロアには、いろいろな観点から本日のシンポジウムを聞きにいらした方がいます。今もいろいろな話題が出ましたが、せっかくなので感想や質問を受けたいと考えています。二つか三つ質問を受けます。

A- 大学の先生は、いっぱい蔵書を持っていますが、その方々がリタイアされたり亡くなった後の蔵書の管理は、どうしているのでしょうか。聞いたところによると、大学の図書館では受け付けない所もあるということで、その本の行方は古書街・神保町辺りに渡るのでしょうか。どのように管理をされるのでしょうか。個人のお宅だったら何とか遺産になることは、なかなか難しいです。パブリックファンドをもらってということは難しいのかもしれませんが、どのように次世代へ個々の努力をつなげていくのかについてお聞きしたいです。それは大学の先生だけではなく、職業にかかわらずのことです。

中村 全員に答えてもらう時間はないので、どなたかお願いします。今、山内さんから定年の一番近い方に聞くのがいいとアドバイスがあったので、鶴間先生、いかがでしょうか。



鶴間 私の専門は中国史ですので、それなりに蔵書は持っています。これは冗談ですが、うちの妻は定年後には、全て本を燃やしてやると言っています。



まさに焚書です。私の対処の方法は、そんなに売れるものではありませんので、貴重なものは、今のうちから少しずつ大学へ寄贈をすることです。まとめて全体を出すと拒否をされますので、鶴間蔵書で受け入れられることはありません。もうひとつのことは、いろいろな弟子を育ててきましたので、次の世代に自分が購入をした本を譲っていきます。70歳で定年ですが、かといって70歳でリタイアして、何もしないわけではありません。最後に必要なものは残しておいて、仕事は続けていきたいです。

中村 ありがとうございます。人文学の専門家は長生きするに限ると、先輩方を見ていて感じます。他にいかがでしょうか。お願いします。

B- 先ほど神保町との話がありましたが、私はその辺りの大学で、大学生をしています。来年3月で卒業をする身で、今は卒業論文などを書いています。本日、動機としては、教養を深めるために初めて来ました。今、話を聞いていて、いろいろと衝撃を受けました。質問をしたいのは、皆さんはさまざまな分野で、一人一人違う分野で研究をされていますが、どのような究極の目的を持っていますか。先ほど定年との話がありましたが、最終目的はどのような所にたどり着きたいと考えて、研究を進めていますか。テーマの枠を超えていますか、皆さんはどのような研究成果を出したいとのゴールを描いているのかをお聞きしたいです。

中村 意外な質問が続きます。ありがとうございます。ここは、全体の枠をつくった仕掛け人に答えてもらいましょうか。

山内 難しい質問です。私の専門は文化遺産というわけではありませんが、文化遺産の研究もしています。今はどちらかというと、考古学に重きをおいています。私は考古学を学ぶうえで知りたいことは、そこにいた人たちが持っていた「知恵」です。その知恵に基づいて登場するのが町や文化です。その事象を見ることで、その背後にある人間の知恵や技術そのもの、そしてそれを生み出した歴史や時代をどうにかして知りたいというのが、私の最終的な目的です。私にはできませんが、私が行なっている文化遺産の保存という活動のなかでは、私の同僚が「物」の分析研究も行なっています。これもある意味では同じことで、それを作った人間の知恵や技術はどうだったのか、どこから登場をしたのかを知ることです。私たちは、その時代に生きていた人間そのものについて分かることはあり得ませんが、こうした研究を通じて、その当時の人間に近づけるのではないかと考えています。

中村 ありがとうございます。もうお一方で終わりにします。マイクを持っていきますので、お願いします。

C- すみません。わざわざありがとうございます。本日は、このキャッチーな題名に引かれて来た一やじ馬です。僕は、われわれがなぜ本を焼くのかにすごく興味があって、来ました。先生方に書を焼く主体の心理といますか、書を焼くことへの一つの気持ち良さのようなものについてお聞きしたいです。換言すれば、先生たちだったらどのような書を焼きたいか、どのような書は焼かれるべきかと考えますか。

中村 これは、更地の専門家に聞きましょうか。

鐸木 僕は、どの本も焼きません。若いときに1回だけ、読み終わった小説を5冊ぐらい神保町に売りに行ったことがあります。その直後に後悔をしました。いらないし、使わないから邪魔であっても、売った途端に必要なになります。それ以来、決して売

らないと決心をしたので、焼きません。

中村 今、山内さんから一番若い伊東さんにも聞いたらどうかと言われたので、お願いします。

伊東 本にも、さまざまな種類がありますが、今、仕事先でたくさん書かされる報告書でしょうか。大学では、あまり心を込めずに機械的に書いて、上に提出しなければならぬ報告書が大量にきちんと製本をされて、配布されます。そのようなものは焼くことはしませんが、廃棄してもいいのではないかと感じてしまいます。どんなに心を寄せられないような味気のない報告書であっても、物理的に火を付けることは、とても怖いのです。私は生まれてこの方、本を燃やしたことはありませんが、どんなに面倒くさいと感じている報告書でも火を付けることは、私にはできません。

中村 ありがとうございます。私から見えませんでした。もう一方、質問者がいるようなので、この方を最後とします。お願いします。

D- すみません。ありがとうございます。数年前まで、固定資産税の仕事の片隅に席を置いていて、更地は大量に見てきました。先月のニュースで、所有不明土地を更新しようとの報道がされていました。正面的な更地ではなく、データや公文書的な更地も起こさなければなりません。その現状の中で、先ほど更地に少しすがすがしさを感じると言いましたが、拭っても消えないような記憶は、土地の中にあります。あえてリセットをしなければならぬとの行政的な立場も、皆さんは学者の立場としてあるかもしれません。

先ほど捨てる本ならどうかとのことで、報告書も何を取捨選択するか。全てを人類が抱えきれて、残していけるものではありません。東洋文庫に行って、昔の役人のちょっとした資料でも読むと、すごく面白いですが、学者として何を残して、何を捨てるか。その判断はできないでしょうから、その辺りが少し難しいと、聞いていて感じました。例えば、土地の歴史や個人的な私有の記憶を外すことは、心の破壊やリセットです。ある意味で、なくすことによってすがすがしさが出るとしたら、消していくものを考えることはあるのでしょうか。

中村 これは誰に答えてもらいましょうか。鐸木先生、お願いします。

鐸木 すべてはいずれ消滅します。残るものは何かといいますと、永遠につながっているものです。美術です。美術作品はいろいろありますが、残るのは造形的に美しいものだけです。どんな作品にもエピソードがありますが、作品はエピソードゆえに残りません。エピソードは、数百年か経つとどうでもよくなります。残るのは造形的なもので、ピカソの名作などです。あれはエピソードに関係なく残ります。それ以外のものは、消滅していきます。

人が1人亡くなると、膨大な記憶が消滅します。僕の両親も恩師も亡くなっているのです。それは痛感します。僕は70歳近いですが、この年になると死ぬことは怖くありませんけれども、仕事はしなければなりません。何を残すかといえば、仕事です。それは、それぞれで違うでしょうけれども仕事を残すことは、それによって何か役に立つと感じています。勝手な仕事をしているわけですが、何か役に立つのではないかとの希望があります。仕事することとのことで、先ほどの質問の回答にもなるのではないのでしょうか。

中村 ありがとうございます。先ほどの質問と、最終的には重なるような回答でした。結果的に残らないものは残りませんが、仕方がありません。その辺が更地主義なのかどうか私は分かりませんが、個人ができることには限界があります。「できることは皆やっている」といつまらない結論で申し訳ありませんが、まとめるとそのような言葉になります。時間が過ぎてしまいましたので、これでディスカッションは終わりとします。山内先生から最後に一言、お願いします。

山内 最後に、「更地」の話をどうにかまとめておかないといけませんね。私は、最初にハイネの言葉を引用しました。本を焼くことは、人間を焼くことにつながるというのがハイネの言葉の本質です。焚書坑儒は本から始まって、人を焼きます。本は、記憶を形にしてあるものなので、それを消せばいいと最初に考えたわけですね。それでは消しきれないものがあって、それが人間そのものです。記憶としての本を焼くことは、それを持っている集団の記憶を消

し去ることであり、究極的には、その記憶を持っている人間そのものを抹消することにつながるというのが、ハイネの語った言葉の神髄だと思います。

遠く離れたところから見ているから、私たちはあまり気にしていないのかもしれませんが、現実には、トンプクトゥでは、本の破壊という意図的な「更地」化が起きました。その次には、もしかすると、自分たち、そして自分たちの社会や集団そのものが更地にされることだって決して可能性がないわけではありません。現実のものとして、この世界にはそのような立場に置かれている人がいます。本を焼くことは、あくまで一つの事象にすぎませんが、本や文化遺産を壊すことの先に一体、何があるのかについて、私たちは真剣に考える必要があります。もっと明るく終わりたいのですが、やや暗めの終わりとなり、申し訳ありません。



中村 ありがとうございます。特にまとまった結論じみたものを目指してはいたわけではありませんが、今回の新しい試みのきっかけに、それぞれが考えるべきことを確認してもらえればと思います。ディスカッションは、これで縮めます。皆さま、ありがとうございました。



閉会挨拶

本日は、『文化遺産の意図的な破壊』、副題として『人はなぜ本を焼くのか』というテーマでのシンポジウムでした。大変に堅く、そしてキャッチーな言葉でしたが、楽しんでもらえましたでしょうか。楽しんでいただけましたら幸いです。

前半は、鶴間先生と近藤先生から歴史的な観点からの話がありました。後半では、鐸木先生からの哲学的で基本的な話と伊東先生からはマリ北部トンプクトゥの話がありました。パネルディスカッションは、中村先生をファシリテーターとして、いつもと違った感じとなりましたので楽しく聴かせていただきました。

本日の伊東先生の話の中で、特にイスラームに関してのことでしょうか。イスラーム学校に入ってコーランの勉強をさせます。昔の日本でいえば、素読をして覚えさせるような感じのようです。今ではインターネットを使って、一般のイスラーム教徒でもイスラームの原典や啓示などに簡単にアクセスをすることができる時代になっています。極端なことをいえば、イスラーム法学者が独占していた啓示の解釈から解き放されることによって、もしかしたら原理的なイスラームを求める人が多くなり、とても混乱した状態がいろいろな形で出てきているのではないかと感じました。

私たちは、今までバーミヤーン遺跡やシリアのパルミラ遺跡に関して、さまざまな破壊を目のあたりにして、それにわれわれがどのように国際協力として対応をしたか、あるいは人材育成をしたかについてシンポジウムを開いてきました。コンソーシアムのウェブサイトアクセスをいただくと、その多くはPDFの形になっていますので閲覧が可能です。もし興味があるようでしたらダウンロードをして、読んでもらえるとありがたいと思います。現実問題として、バーミヤーンでは破壊された大仏の復元問題が起きています。宗教の問題や地域社会の問題があって、なかなか結論が出ない状況です。この議論は私たちにとって、文化遺産の論理だけでは解決できない重要な問題です。それを理解してもらえるとありがたいと思います。

コンソーシアムでは、年2回の研究会と本日のよ

うなシンポジウムを1回開催しています。少し宣伝になりますが、昨年度から地域社会の持続可能性の問題と文化遺産がどのように関わるかということで、文化遺産とSDGsといった研究会を開いています。本年度は、2回目の文化遺産とSDGsの研究会を1月31日に開催します。内容については、ユネスコとICOMOSの国際的な文化遺産関係の方をお呼びして、世界で文化遺産とSDGsをどのように考えているか講演してもらいます。他には、文化遺産がSDGsにどのように貢献をしていくのかについて、ビジネスの観点から話をしていただき、金沢大学の中村誠一先生には、中米で行われている遺跡保存とSDGsの関連についてお話しいたきます。興味があれば参加をいただくとありがたいと思います。

最後に、講演者とファシリテーターの先生方にもう一度、拍手をいただいて終わりとしたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



青木 繁夫 (あおき しげお)
文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／
東京文化財研究所 名誉研究員

資料編

文化遺産の意図的破壊に関するユネスコ宣言…………… 10

災害リスク削減に向けた図書館関連活動及び
紛争・危機・自然災害時の図書館関連活動に
対する IFLA の関与の原則 …………… 14

文化遺産の意図的破壊に関するユネスコ宣言 (2003年)

国際連合教育科学文化機関総会は、2003年にパリで開催された第32回会議において、

国際社会全体に影響を及ぼしたバーミヤーン仏像の悲劇的な破壊を想起し、

文化遺産の意図的破壊行為の増加に関する深刻な懸念を明示し、

ユネスコに「世界の遺産である図書、芸術作品並びに歴史及び科学の記念物の保存及び保護を確保し、且つ、関係諸国民に対して必要な国際条約を勧告する」ことによって知識を維持し、増進し、且つ、普及するという任務を委ねたユネスコ憲章第1条2(c)に言及し、

文化遺産保護のためのユネスコのすべての条約、勧告、宣言、憲章の原則を想起し、

文化遺産は地域社会、集団、個人の文化的アイデンティティー及び、社会的結束の重要な構成要素であり、その意図的破壊は人間の尊厳と人権に悪影響を及ぼす可能性があることに留意し、

武力紛争の際の文化財の保護に関する1954年ハーグ条約の前文に基本原則のひとつとして示された「各人民が世界の文化にそれぞれ寄与していることから、いずれの人民に属する文化財に対する損傷も全人類の文化遺産に対する損傷を意味するものである」という原則に再度言及し、

1899年及び1907年のハーグ条約に定められた武力紛争の際の文化財の保護に関する原則、特に1907年ハーグ第4条約の規則第27条及び第56条、並びにその後の他の合意を想起し、

平時並びに武力紛争の際の文化遺産の保護に関する慣習国際法の規則が、関連する判例法により確認され、策定されることに留意し、

さらに、文化遺産の意図的破壊に関し、国際刑事裁判所に関するローマ規程第8条2(b)(ix)及び第8条2(e)(iv)及び、必要に応じて、旧ユーゴスラビア国際刑事裁判所規定第3条(d)を想起し、

文化遺産に関する既存の宣言やその他の国際協定では完全には対応されていない問題については、引き続き国際法の原則、人道の諸原則、公共の良心の示すところによって規定されることを再確認し、

この宣言を採択し、厳粛に宣明する。

I - 文化遺産の重要性の認識

国際社会は、文化遺産保護の重要性を認識し、文化遺産を後世に継承できるよう、あらゆる形の意図的破壊と積極的に戦うことを再確認する。

II - 範囲

1. この宣言は、自然遺産に関連する文化遺産も含め、文化遺産の意図的破壊について述べるものである。
2. この宣言の目的において「意図的破壊」とは、以下のような行為を意味する。文化遺産の一部又は全部を破壊することを意図する行為であって、それによって文化遺産の完全性を損なうものであり、その方法が国際法違反又は人道の諸原則及び公共の良心の示すところに反する正当性のない違反行為に該当し、後者の場合は、いまだ国際法の基本原則の統制を受けていない行為。

III - 文化遺産の意図的破壊への対抗手段

1. 各国は、文化遺産の所在地にかかわらず、その意図的破壊行為を防止、回避、停止、抑制するため、あらゆる適切な手段を講じるべきである。
2. 各国は、それぞれの経済資源の枠組みの中で、文化遺産を保護するための適切な法的手段、行政手段、教育的手段、技術的手段を採用するべきである。また国内外の文化遺産保護の基準の変化に適応させるため、それらの手段を定期的に見直すべきである。
3. 各国は、あらゆる適切な手段、とりわけ教育、啓発、広報のための取り組みを講じて、文化遺産を尊重することを社会に確実に根付かせるよう努めるべきである。
4. 各国は、
 - (a) 武力紛争の際の文化財の保護に関する 1954 年ハーグ条約及び 1954 年と 1999 年の 2 件の同条約議定書、並びに 1949 年のジュネーブ四条約及びその第一追加議定書と第二追加議定書を締約していない場合、これらを締約し、
 - (b) 文化遺産保護を高い水準で実現するための法規制の起草と採択を推進し、
 - (c) 文化遺産保護に関連する現行の規約及び将来の規約の協調的な適用を推進するべきである。

IV - 平時の活動を行う際の文化遺産保護

各国は、平時の活動を行う際、文化遺産を保護できる方法でこれを実施するため、あらゆる適切な手段を講じるべきである。特に、1972年の世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約、1956年の考古学上の発掘に適用される国際的原則に関する勧告、1968年の公的又は私的の工事によって危険にさらされる文化財の保存に関する勧告、1972年の文化遺産及び自然遺産の国内的保護に関する勧告、1976年の歴史的地区の保全及び現代的役割に関する勧告について、それぞれの原則と目的に従うべきである。

V - 占領を含む武力紛争の際の文化遺産の保護

各国は、武力紛争に関与する際、紛争の性質が国際的であるか国内的であるかを問わず、また占領の場合も含め、文化遺産を保護できる方法で活動を実施するため、あらゆる適切な手段を講じ、国際慣習法に従うとともに、国際的な諸協定及び紛争中の文化遺産保護に関するユネスコの諸勧告のそれぞれの原則と目的に従うべきである。

VI - 国家の責任

人類にとって重要性の高い文化遺産を意図的に破壊する国、又はそうした文化遺産の意図的破壊を禁止し、回避し、停止し、処罰するための適切な措置を意図的に怠る国は、その文化遺産がユネスコもしくはその他の国際機関が保持する一覧に登録されているかいないかにかかわらず、その破壊に対し、国際法に定める範囲で責任を負う。

VII - 個人の刑事責任

各国は、国際法に従って、人類にとって重要性の高い文化遺産の意図的破壊行為に関与した人物、又は関与することを命じた人物に対し、その文化遺産がユネスコもしくはその他の国際機関が保持する一覧に登録されているかいないかにかかわらず、管轄権を設定し、実効性のある刑事制裁を与えるため、適切なあらゆる手段を講じるべきである。

VIII - 文化遺産保護のための協力

1. 各国は、文化遺産を意図的破壊から保護するため、相互に協力し、またユネスコと協力するべきである。そうした協力には、少なくとも以下の活動が必然的に含まれるべきである。

- (i) 文化遺産の意図的破壊のリスクを伴う状況に関する情報提供及び情報交換
- (ii) 文化遺産の破壊が実際に起きている場合、もしくは差し迫っている場合の協議
- (iii) 文化遺産の意図的破壊の回避や抑制のための教育プログラム、啓発活動、能力構築の推進について、

各国から要請された支援の検討

(iv) 文化遺産の意図的破壊の抑制について、関係国から要請された法的支援及び行政的支援

2. より包括的な保護のため、上記（Ⅶ－個人の刑事責任）で言及した、人類にとって重要性の高い文化遺産の意図的破壊行為に、関与した、又は関与することを命じた人物が、自国の領土にいることが明らかになった場合、各国が、その人物の国籍及び破壊行為が発生した場所にかかわらず、その人物に対し、管轄権を設定し、実効性のある刑事制裁を与えることを目的に、他の関係国と協力するため、国際法に従い、あらゆる適切な手段を講じることを推奨する。

IX - 人権と国際人道法

この宣言の適用に際し、各国は、文化遺産の意図的破壊が重大な人権侵害に関連している場合は特に、重大な人権侵害の犯罪化に関する国際規則並びに国際人道法を遵守することの必要性を認識する。

X - 市民の意識啓発

各国は、この宣言が一般市民と対象集団に可能な限り広く確実に周知されるよう、特に、一般向け意識啓発キャンペーンを実施するなどして、あらゆる適切な手段を講じるべきである。

※本資料は、文化遺産国際協力コンソーシアムがシンポジウムの参考用に日本語に仮訳したものです。正確な内容については、原文による正式の文言をご確認ください。

原文（英文）はユネスコのウェブサイトをご参照ください。

“UNESCO Declaration concerning the Intentional Destruction of Cultural Heritage”

<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000133874>（参照 2019 年 11 月 11 日）

文化遺産災害復興プログラム：文化は必要不可欠なものであり、地域社会は文化遺産を糧に育つ。文化遺産がなければ、地域社会は死ぬ。

災害リスク削減に向けた図書館関連活動及び紛争・危機・自然災害時の図書館関連活動に対する IFLA の関与の原則 (2012 年)

国際図書館連盟（IFLA）は、図書館及び情報に携わる人々を代表する国際的で信頼性のある組織である。IFLA は、その使命において、文化遺産である文書資料へのアクセシビリティの向上、保護、保存の推進に取り組んでいる。

2011 年 8 月 19 日に、IFLA 運営理事会は、IFLA とその会員が、災害リスク削減に向けた図書館関連活動に携わる際及び紛争・危機・自然災害時において活用できるような、「関与の原則」を起草するための諮問委員会を立ち上げた。起草にあたっては、ハイチの復興活動における IFLA の関与や、IFLA が関わっている国際条約、協定類を参考にした。

災害リスクの削減及び紛争・危機・自然災害に際して、協調的に関与できるようにするためには、IFLA には次の 6 点が必要である。

- 1) 各国における文化遺産の保有状況及びそれら文化遺産の災害や紛争に対するせい弱性を把握すること
- 2) IFLA 内外の関係者との協力関係を積極的に構築すること
- 3) 適時に関係者間で協調して行動できるように備えておくこと
- 4) 非常事態に対応する際に取りべき手順を知っていること
- 5) 速やかな文化財救済のための資金調達を支援すること
- 6) 災害関連の IFLA の活動を広く知らせること

序 文

IFLA は、

武力紛争・危機・自然災害による近年の文化遺産の甚大な損失を懸念し、

文化遺産である物品の多くは唯一無二であること、そして、これらの物品の消失は社会及び人類全体にとって決定的な損失であり、回復不能な貧困をもたらすことを強調し、

文化遺産の保護対策を講ずる必要があること、文化遺産が脅威にさらされるかもしれない状況下では特にその必要があることを認識し、

武力紛争・危機・自然災害の際の文化遺産の保護は、その貴重な文化遺産がある国の財政、人材、技術力に限界があるため、不完全であることが多いということを考慮に入れ、

各国が自国の文化遺産を保護する権利や一義的な責任を尊重し、

文化遺産に関する既存の国際条約、勧告、宣言や憲章は、唯一無二でかけがえのない物の保護の重要性を示しているということを考慮し、

1954年の「武力紛争の際の文化財保護に関する条約」、1954年の「同第一議定書」及び1999年の「同第二議定書」、1972年の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」及び2005年の「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約」を思い起こし、

さらに、ブルーシールド国際委員会の声明である、2011年の「危機的状況にある文化遺産保護に関するソウル宣言」、1998年の「非常時及び例外的な状況における文化遺産の保護に関するラデンチ宣言」、2004年のトリノ宣言及び2005年の「国際連合兵庫行動枠組」を参照し、

IFLAの任務・基本理念・方針は、世界中で図書館・情報分野の協会、図書館、またそこで働く人々の利益を代表し、社会における図書館の役割を示すことだということを思い起こし、

IFLAは、「関与の原則」を是認する。

1 目的

「関与の原則」の目的は次のとおり：

- a) 文化財の保護と尊重を奨励する。特に災害時のリスク管理への関心を高めて促進することによりこれを行う。
- b) 危険に瀕する図書館のコレクションと文化遺産を守るために助言する役割を担う。
- c) 災害への効果的な予防、対応及び復旧を行うために国際的かつ組織横断的な協力と支援を提供する。
- d) 図書館に関わる動産及び不動産文化財を脅かす脅威あるいは緊急事態への国際的対応を促進する。
- e) ユネスコ、図書館、文書館、博物館、歴史的建造物や遺跡に関わる団体及びブルーシールド国際委員会の戦略や活動を通じて、文化遺産に関わる活動への協力と参加を促進し強化する。
- f) いかなる関与も、確実にIFLAの資源提供力、専門知識レベル、必要とされる成果を達成する能力の範囲内で行う。

2 介入の条件

「関与の原則」は、武力紛争・危機・自然災害に関わる IFLA の方針、対策及び活動に適用するものとする。当該原則は、紛争・危機・自然災害に対する予防、対応及び復旧活動に IFLA とそのメンバーが関与するかどうか及び関与する場合の条件を決定する指針となるべきものである。効果的かつ積極的対策を確実に実施するために、IFLA は次のことを行う：

- a) 入手可能なハザードマップ^(*1)、ぜい弱性マップ^(*2)、リスクマップ^(*3)に基づき、危険区域を把握し監視する。適時に、災害管理組織や自主防災組織との協力により、災害に対する予防及び対応訓練を企画する。
- b) 被害・脅威・リスクの程度を評価するために、紛争・危機・自然災害の状況に関する全ての関連情報を収集する。
- c) 全国レベルの図書館協会、国立図書館、PAC 地域センター、ブルーシールド国内委員会、ユネスコなどを通じて、当該国・地域から IFLA の会長あるいは事務局長に対して、災害後の支援や復旧に関する照会がなされることを要請する。
- d) 現場でのいかなる支援も、Stichting IFLA 基金^(*4)のような IFLA 内の手段あるいは外部基金を利用して、現地組織と連携して実施する。
- e) 災害管理に関する団体や自主防災組織との調整を行う。
- f) 初期の介入段階においては、その国／地域がもつ資源や対応能力を考慮に入れる。
- g) 活動や介入領域に関しては、IFLA の戦略や使命との整合性を確保する。
- h) 身の安全が可能な限り確保された場合にのみ、紛争・危機・災害時における介入を行う。
- i) 可能な限り円滑で効果的かつ合法的な介入となるように、その国ですでに活動している文化遺産関係団体及びその他の団体並びに現地の自治体と協働して介入を組織する。

(*1) 被害をもたらす危険因子を示す地図

(*2) 危険因子による被害をうけやすい文化遺産に関する地図

(*3) 総合的な災害危険度を示す地図

(*4) IFLA の活動を支援するために 2007 年に設立された基金

3 活動の指針

次のことを尊重した活動を実施すべきである。

中立性：IFLA は不偏不党である。つまり、文化遺産の種類、国、信条、表現、民族的背景、政治・経済制度に関係なく、災害への備え、対応、復旧、復興により文化遺産を保護すべきである、ということである。さらに、IFLA は各国の内政上の問題や紛争に干渉しない。

専門性：IFLA は、基準を遵守し、現地の状況を尊重した活動を行う。IFLA は「図書館協会の機能強化のためのプログラム」を通じた専門的能力の開発を支援する。ハザードマップ等で潜在的な危険が示唆されている地域を、図書館協会の機能強化の対象とすることで、将来的に基準を遵守した介入を行うための土台を築くことになる。

持続可能性と能力開発：IFLA は、文化遺産を個人及び社会の貴重な財産とみなす。文化遺産の保護と復旧は、現在及び将来の世代の持続可能な発展にとって不可欠である。持続可能性と能力開発は、いかなる介入においても主要な要素である。

完全性：IFLA は、文化遺産を文化的アイデンティティの象徴として、また、持続可能な発展の根源として尊重し、将来の世代への継承を阻害するような損傷を防ぐ。文化遺産を尊重することは、文化的アイデンティティを尊重するための基礎となる。文化遺産については総体で検討されるべきである。特に、図書館が歴史的建造物や歴史的地域に設置されている場合には、その必要性が高い。コレクション、作品、その他いかなる動産文化財も、その環境から切り離してはならない。

非営利性：いかなる介入も非営利で行うべきである。

協力：IFLA は、現地の協力者、災害管理組織、自主防災組織、文化機関、文化団体、その他ユネスコ、ブルーシールド国際委員会等の文化遺産関連機関及びその加盟機関、IFLA の関連分科会・活動、PAC 地域センターと協力する。協力の目的は、各国による文化遺産の保全対策を強化することとすべきである。さまざまな利害が関係することを考慮に入れて、適切な調整を行うべきである。

透明性：IFLA は、活動の目的と活動への関わりについて明示し、進捗について定期的に報告を行う。

IFLA と協力者は、人道的活動において広く受け入れられている行動規範に従う。

- 「兵庫行動枠組」：
http://www.unisdr.org/files/1037_hyogoframeworkforactionenglish.pdf
- 「スフィア・プロジェクト」人道原則：
<http://www.sphereproject.org/>
- 「赤十字国際委員会」行動規範：
<http://www.icrc.org/eng/resources/documents/misc/64zahh.htm>
- 「人道支援団体説明責任パートナーシップ」による財政管理原則：
<http://www.hapinternational.org/>

4 関与レベル

情報共有

IFLA は、次のことに取り組むこととする。

- a) ハザードマップ、ぜい弱性マップ、リスクマップを通じて、危機に瀕している地域のデータバンクを開設し、情報提供する。
- b) 世界中の文化遺産に対する脅威についての情報を、IFLA のメンバー、協力者、そして一般の人々と共に、IFLA のウェブサイトを通じて、収集・共有・交換する。
- c) IFLA 本部内の既存の機構を通じて、関連情報や統計、模範事例の収集、分析、普及を促進する。
- d) 紛争・危機・自然災害時における図書館関係活動に関する情報共有のための責任者を指名する。

社会的認知

IFLA は、次のことに取り組むこととする。

- a) 紛争・危機・自然災害時の文化遺産の保護を目的とする基本文書の起草、批准、履行を奨励する。
- b) 文化遺産について責任をもつ全てのレベルの人々に、リスク管理の望ましい在り方を普及する。
- c) 能力育成と支援プログラムを通じて、文化遺産の保護の重要性の理解を奨励し、促進する。
- d) 意思決定者や専門職員に、災害の防止または軽減、準備、対応、復旧対策の推進の必要性について、意識喚起に努める。
- e) 紛争・危機・自然災害時における図書館関連の文化遺産の被害や活動に関する一般の人々の認知を高める。
- f) 緊急事態に適切に対応できるよう専門的知識を提供する。

協力

重複を避け、活動の有効性を最適化するために、IFLA は、次のことに取り組むこととする。

- a) 協力者間の対話を促進する。
- b) 文化遺産の保護及び保全のためのデータ収集及び模範事例について、情報を交換し、専門知識を共有する。
- c) 情報の蓄積と普及、認知向上、準備と対応など、関連する全ての領域で、国際的な協力者や専門家、国立図書館と緊密に連携して活動する。また、紛争・危機・災害が起きている国で、すでに機能している組織を十分に利用する。

現場での関与

IFLA は、他の機関や団体と協働して、次のことに取り組むこととする。

- a) 緊急時の迅速な介入のための資源を明らかにする。
- b) 図書館関連の文化遺産が消滅の危機にある、重大な脅威にさらされている、そうでなければ緊急の保全を必要としている等、特殊な状況にあることを判定する。
- c) 作業が適切な方法で間違いなく行われていることを確認するための専門知識を提供する。
- d) 文化遺産の識別や評価、保護、保存、修復の分野の職員及び専門家を養成するための資源を明らかにする手助けをする。
- e) 当該国が保有していないか、または購入することができない機材を供給するための資金提供に努める。

5 ニーズ評価

IFLA は、関与を検討する際に採るべき手順について定める。IFLA による関与は、以下の各項に関するニーズ評価の結果に基づいて決まる。

- a) 必要とされる関与の方式が、「4 関与レベル」に明記されているものであること
- b) 予想されるコスト
- c) 緊急度
- d) 図書館関連の文化遺産の重要度（危険因子、せい弱性、リスクに関する既存の評価に基づく部分もある）
- e) 現地の対応能力及び専門知識
- f) 当該地域の最新の政治的、社会的又は保健医療事情

6 顧問団

これらの「関与の原則」の実施と IFLA による支援の在り方は、顧問団 (Advisory Group) が管理し、IFLA 運営理事会に報告するものとする。顧問団は資料保存コア活動及び資料保存分科会の長並びに関連する専門知識を持ち、IFLA 運営理事会から指名された 3 名のメンバーで構成されるものとする。顧問団の機能や責務はその付託事項に示される。IFLA 本部は顧問団に対する運営上の支援を行うものとする。

7 評価

いかなる活動も、関与の前、関与中、関与後に、体系的かつ客観的に評価されるものとする。また、プログラムやプロジェクトのみならず、組織、戦略、政策及び協力のレベルまで含めて評価するものとする。経済協力開発機構開発援助委員会 (OECD DAC) の「DAC 評価 5 項目」に従い、いかなる関与も次の基準に照らして評価されるものとする。

- 妥当性：その関与が、対象、受益者及び IFLA の優先課題に合致している程度
- 効率性：投入資源との関連で質的・量的なアウトプットを測る尺度
- 有効性：その関与の目標達成度
- 持続可能性：資金援助終了後も活動の便益が持続するかどうかの尺度
- インパクト：直接又は間接に、意図的又は意図せずに、多数の住民・地域・社会全体に対して、その関与が及ぼす広域的な影響。その影響により、現地の社会指標、経済指標、環境その他の指標に肯定的あるいは否定的な変化が生ずるだろう。

2012 年 4 月 4 日、オランダ、ハーグにおける IFLA 運営理事会にて承認

※本資料は、IFLA による日本語訳を掲載したものです。

概要および原文は IFLA のウェブサイトをご確認ください (日本語訳へのリンクあり)。

“IFLA Principles of Engagement in library-related activities of disaster risk reduction and in times of conflict, crisis or natural disaster”

<https://www.ifla.org/publications/ifla-principles-of-engagement-in-library-related-activities-in-times-of-conflict-crisis> (参照 2019 年 11 月 11 日)

文化遺産の 意図的な 破壊

Intentional
Destruction of
Cultural
Heritage

人はなぜ

本を焼くのか

2019年
12月1日[日]

13:00 - 17:00

12:30開場

政策研究大学院大学
想海樓ホール

定員300名 入場無料・事前申込制

主催 | 文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁 後援 | 外務省、国際協力機構、国際交流基金



文化遺産の 意図的な 破壊

人はなぜ 本を焼くのか



人は文字を生み出し、粘土板やパピルス、木簡や竹簡、羊皮紙や紙に記してきました。文書庫、そして図書館を造り、自分たちの記録を集め、残そうとしてきました。その一方で、それを意図的に破壊するという行為もまた、歴史的に繰り返されてきました。

古代より行われている文化遺産の破壊行為は今なお続き、世界各地で貴重な文化遺産が失われ続けているのが現状です。単なる記録媒体としてだけでなく、集団及び個人の記憶のメタファーとしても受け継がれてきた書物、そして図書館・公文書館等は繰り返し標的とされ続けてきたのです。

では、なぜ本を焼くのでしょうか。その目的を知り、破壊行為を未然に防ぐことはできないのでしょうか。このシンポジウムでは、歴史的に行われてきた焚書や文化遺産の「意図的な」破壊行為を振り返り、文化遺産を破壊する側の「論理」に照準を当てていきます。あくまで破壊された側からの想像にはなりますが、何を否定し、どのような効果を狙って破壊するのかを問い、社会にとっての書物、ひいては文化遺産の意義について考える機会とします。私たちは将来のために何ができるのか、どのような国際協力のあり方が必要なのかを過去の事例から学び、議論を展開する場としたいと思います。

プログラム

13:00-13:05 開会挨拶

岡田保良 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／
国士舘大学イラク古代文化研究所 教授)

13:05-13:25 趣旨説明

山内和也 (文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア
分科会長／帝京大学文化財研究所 教授)

13:25-14:00 講演1

「秦始皇帝の焚書坑儒の真相」
鶴間和幸 (学習院大学文学部 教授)

14:00-14:35 講演2

「エジプトにおける文字記録の抹殺とアレクサ
ンドリア大図書館の焼失」
近藤二郎 (早稲田大学文学部 教授)

10分休憩

14:45-15:20 講演3

「ユーゴ内戦時の文化遺産の破壊—サラエヴォ
図書館、コソボの教会堂などを例として—」
鐸木道剛 (東北学院大学文学部 教授)

15:20-15:55 講演4

「テロと古文書と誇り—マリ北部トンブクトウ
における事例から—」
伊東未来 (西南学院大学国際文化学部 講師)

10分休憩

16:05-16:55 パネルディスカッション

「破壊の論理と文化遺産保護」
ファシリテーター
中村雄祐 (東京大学大学院人文社会系研究科 教授)
パネリスト
鶴間和幸、近藤二郎、鐸木道剛、伊東未来

16:55-17:00 閉会挨拶

青木繁夫 (文化遺産国際協力コンソーシアム副会長／
東京文化財研究所 名誉研究員)

17:10- 懇談会 (事前申込・会費制)

日時

2019年12月1日(日) 13:00-17:00 (開場 12:30)

会場

政策研究大学院大学 想海樓ホール
東京都港区六本木7-22-1

申込方法

コンソーシアムウェブサイトの申込フォーム
よりお申込みください。(締切:11月27日)

<https://www.jcic-heritage.jp/eventform/>



※ハガキ・FAXでの申込も可。氏名(ふりがな)・ご所属・電話番号・メール
アドレス・会員/非会員・懇談会出欠をご記入の上、「コンソーシアム
シンポジウム参加希望」とお書き頂き、11月27日(水)必着で事務局
宛にお送りください。

※お席に余裕がある場合は当日参加も受け付けております。

お問合せ

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
(独) 国立文化財機構 東京文化財研究所内
E-mail consortium@tobunken.go.jp
Tel. 03-3823-4841 Fax. 03-3823-4027



アクセス

東京メトロ日比谷線・都営大江戸線 六本木駅 7番出口から徒歩7分
東京メトロ千代田線 乃木坂駅 5番出口から徒歩6分

※当日は南門からお入りください。

シンポジウム

文化遺産の意図的な破壊
—人はなぜ本を焼くのか— 報告書

Report on the Symposium

**Intentional Destruction of
Cultural Heritage :Why are
Books Burned?**

2020（令和2）年3月発行

March 2020

発行：文化遺産国際協力コンソーシアム

Published by :
Japan Consortium for International Cooperation
in Cultural Heritage

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所内

Tel: 03-3823-4841 / Fax: 03-3823-4027

<https://www.jcic-heritage.jp/>

編集担当：五嶋千雪（文化遺産国際協力コンソーシアム事務局）

C/O Independent Administrative Institution National Institutes for
Cultural Heritage

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

13-43, Uenokoen, Taito-ku, Tokyo 110-8713, Japan

Tel: +81-(0)3-3823-4841 / Fax: +81-(0)3-3823-4027

Edited by :

Chiyuki Goshima (Japan Consortium for International Cooperation in
Cultural Heritage)



JCI-*Heritage*